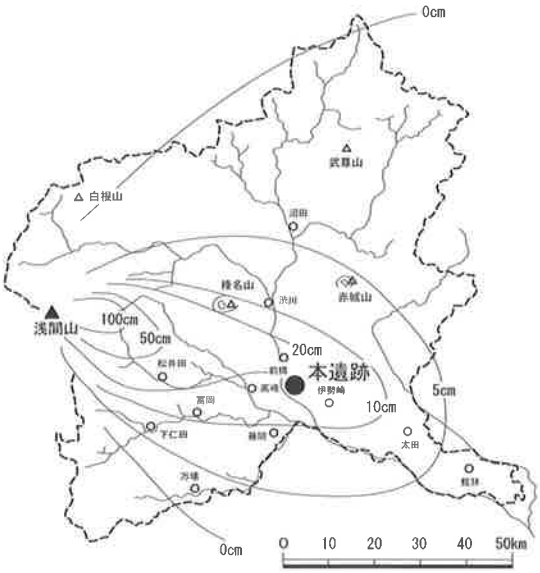
南部拠点地区遺跡群No. 10

前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



浅間B軽石降下の等厚線図（町田・新井1992による）

2014. 9

前橋市教育委員会
前橋市南部拠点西地区土地区画整理組合
有限会社毛野考古学研究所

Ｂ区、１号南北大畦畔・Ｗ－６号溝跡（南から）

Ｃ区、３号東西大畦畔とＨ－１号住居跡（上が北）

巻頭写真

Ｃ区、Ｈ－１号住居跡 遺物出土状態（南西から）

Ｈ－１号住居跡 出土遺物

例　言

1　本書は、前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業に伴い実施した、南部拠点地区遺跡群№10の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　調査は、前橋市教育委員会の指導・監督のもとに、前橋市南部拠点西地区土地区画整理組合の委託を受け、有限会社毛野考古学研究所が実施した。調査担当は同研究所員　井上　太、有山径世、山本千春である。

3　発掘調査・整理作業の実施期間は、平成26年3月19日～平成26年9月29日である。

4　本調査の調査区の地番、面積及び遺跡番号、並びに略称は下記のとおりである。

所在地地番：前橋市鶴光路町113－2　外17筆　　面積：９，８５０㎡

遺跡番号：００７８５　　略称：２５Ｇ８４

5　本調査の遺構測量は、小出拓磨、設楽和也（有限会社毛野考古学研究所員）が担当した。

6　本書の編集は有限会社毛野考古学研究所が行い、井上が担当した。

7　本書の執筆は、Ｉを藤坂和延（前橋市教育委員会）、その他を井上が担当した。

8　調査に関わる資料は、一括して前橋市教育委員会文化財保護課が保管している。

9　発掘調査・整理作業に関わった方々は下記のとおりである。（五十音順、敬称略。）

［ 発掘調査 ］赤尾嘉章　赤見公一　淺川正行　新井健吾　新井正治　碓井俊夫　大竹　努　小野田勝
金田　守　狩野友好　神山春示　亀田浩子　川上善平　川田敏夫　菊池文男　北山信一
小暮悠樹　佐藤幸子　篠原孝宏　清水　勝　清水千代　志村久子　須賀保一　関口孝行
関口勝司　高田和正　高橋智子　高林　操　武井みち子　都丸夏雄　中原國隆　荏戸玲子
橋本幸明　堀口聖一　堀越国光　松井昭光　松倉秀樹　水島利茂　矢島義秋　山崎美紀香
山田明男　渡辺信夫

［ 整理作業 ］青柳美保　池内麻美　小野沢絹子　合田幸子　小谷貴世美　下條真美代　瀬尾則子
伴場りく　武士久美子　永島美和子　真下弘美

10　発掘調査の実施から報告書刊行に至る間、以下の機関・方々のご指導・ご協力を賜った。記して感謝を申し上げる。（順不同）　株式会社ベイシア　清水建設株式会社　赤塚次郎　坂口　一　田口一郎
永井智教　三浦京子

凡　例

1　挿図の座標北には、世界測地系（国家座標第Ⅸ系）を使用した。方位記号は座標北を示す。

2　等高線や断面図中における水準値は、海抜標高を示す（単位：m）。

3　掲載の遺構図の縮尺率は、各挿図中にスケールで表示した。

4　グリッドは、原点（X=37,300・Y=-67,400）より、西から東へＸ０、Ｘ１…、北から南へＹ０、Ｙ１…と付した。

5　本書中のテフラの呼称は、下記のとおりである。

Ａｓ－Ａ、Ａ軽石：1783年（天明３年）に噴出した浅間Ａテフラ。

Ａｓ－Ｂ、Ｂ軽石：1108年（天仁元年）に噴出した浅間Ｂテフラ。

Ｈｒ－ＦＡ、ＦＡ：６世紀初頭に噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ。

Ａｓ－Ｃ、Ｃ軽石：４世紀初頭頃に噴出した浅間Ｃテフラ。

6　本書掲載第１図には、国土交通省国土地理院発行の1/200,000「長野」・「宇都宮」、第２図に同院発行の1/25,000地勢図「前橋」・「高崎」、第３図には「前橋市都市計画図」1/2,500を一部加工して使用した。

7　表紙には2011年国土地理院撮影の空中写真を使用した。

目　次

例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
写真図版目次
Ⅰ　調査に至る経緯 …… 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 1
　1　地理的環境 …… 1
　2　歴史的環境 …… 2
Ⅲ　調査の方法と経過 …… 4
　1　調査の方法 …… 4
　2　調査の経過 …… 5
Ⅳ　遺跡の概要 …… 6
　1　基本層序 …… 6
　2　遺構・遺跡の概要 …… 6
Ⅴ　検出遺構 …… 7
　1　平安時代末以降 …… 7
　2　古墳時代 …… 31
Ⅵ　出土遺物 …… 39
　1　平安時代末以降 …… 39
　2　古墳時代 …… 41
Ⅶ　まとめ …… 51
　1　平安時代末以降 …… 51
　2　古墳時代 …… 53
写真図版
抄　録

挿図目次

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　周辺の遺跡 …… 3
第３図　調査地位置図 …… 4
第４図　調査区全体図 …… 5
第５図　基本層序 …… 6
第６図　Ａ区全体図及び断面図 …… 8
第７図　Ａ区Ａs-Ｂ下水田断面図 …… 9
第８図　Ａ区土坑 …… 9
第９図　Ａ区溝跡断面図 …… 10
第10図　Ｂ区全体図及び断面図 …… 11
第11図　Ｂ区Ａs-Ｂ下水田断面図 …… 12
第12図　Ｂ区土坑 …… 13
第13図　Ｂ区溝跡断面図 …… 13
第14図　Ｃ区平安時代以降全体図及び断面図（１） …… 15
第15図　Ｃ区平安時代以降全体図及び断面図（２） …… 16
第16図　Ｃ区平安時代以降全体図及び断面図（３） …… 17
第17図　Ｃ区Ａs-Ｂ下水田断面図 …… 18
第18図　Ｃ区土坑 …… 19
第19図　Ｃ区井戸跡 …… 21
第20図　Ｃ区溝跡断面図（１） …… 23
第21図　Ｃ区溝跡断面図（２） …… 25
第22図　Ｃ区溝跡断面図（３） …… 27
第23図　Ｃ区窪地断面図 …… 30
第24図　Ｃ区古墳時代全体図 …… 31
第25図　Ｃ区Ｈ－１号住居跡遺物出土状況 …… 32
第26図　Ｃ区Ｈ－１号住居跡 …… 33
第27図　Ｃ区Ｈ－２号住居跡・３号住居跡 …… 35
第28図　Ｃ区Ｈ－２号住居跡、３号住居跡遺物出土状況 …… 36
第29図　Ｃ区古墳時代土坑 …… 38
第30図　調査区出土遺物 …… 39
第31図　溝跡出土遺物 …… 40
第32図　Ｈ－１号住居跡出土遺物（１） …… 42
第33図　Ｈ－１号住居跡出土遺物（２） …… 43
第34図　Ｈ－１号住居跡出土遺物（３） …… 44
第35図　Ｈ－１号住居跡出土遺物（４） …… 45
第36図　Ｈ－２号住居跡出土遺物（１） …… 45
第37図　Ｈ－２号住居跡出土遺物（２） …… 46
第38図　Ｈ－３号住居跡出土遺物 …… 46
第39図　土坑出土遺物 …… 47
第40図　条里型地割り想定図 …… 51
第41図　Ｃ区平安時代末以降の溝跡位置図 …… 52

表 目 次

第１表　周辺遺跡検出遺構 ―― 2
第２表　Ａ区出土遺物観察表 ―― 47
第３表　Ｃ区出土遺物観察表 ―― 47
第４表　溝跡出土遺物観察表（１） ―― 47
第５表　溝跡出土遺物観察表（２） ―― 48
第６表　Ｈ－１号住居跡出土遺物観察表（１） ―― 48
第７表　Ｈ－１号住居跡出土遺物観察表（２） ―― 49
第８表　Ｈ－２号住居跡出土遺物観察表（１） ―― 49
第９表　Ｈ－２号住居跡出土遺物観察表（２） ―― 50
第10表　Ｈ－３号住居跡出土遺物観察表 ―― 50
第11表　土坑出土遺物観察表 ―― 50

写真図版目次

巻頭写真
Ｂ区、１号南北大畦畔・Ｗ－６号溝跡
Ｃ区、３号東西大畦畔とＨ－１号住居跡
Ｃ区、Ｈ－１号住居跡 遺物出土状態
Ｈ－１号住居跡 出土遺物
ＰＬ．１
調査地から榛名山方向を望む
Ａ区・Ｂ区 全景
ＰＬ．２（Ａ 区）
Ａ区 全景
As-Ｂ下水田 １号東西大畦畔・W-２号溝跡
As-Ｂ下水田 １号東西大畦畔 水口１
As-Ｂ下水田 １号東西大畦畔 Ｓ－１
As-Ｂ下水田 １号東西大畦畔 Ｓ－２断ち割り
ＰＬ．３（Ａ 区）
As-Ｂ下水田 １号東西大畦畔・W-２号溝跡 土層断面
Ａ区東半部 As-Ｂ下水田
Ａ区西半部 As-Ｂ下水田
As-Ｂ下水田面 耕具痕
Ａ区 遺物出土状態
Ｄ－１号土坑
Ｄ－２号土坑
Ｗ－１号溝跡
ＰＬ．４（Ａ・Ｂ 区）
Ｗ－３号溝跡
Ｗ－４号溝跡
Ｗ－４号溝跡 土層断面
Ａ区 基本層序
Ｂ区 全景
ＰＬ．５（Ｂ 区）
As-Ｂ下水田 １号南北大畦畔・W-６号溝跡
As-Ｂ下水田 １号南北大畦畔・W-６号溝跡
As-Ｂ下水田 １号南北大畦畔・W-６号溝跡 土層断面Ｆ
As-Ｂ下水田 ２号東西大畦畔
Ｂ区南半部 As-Ｂ下水田
Ｄ－３号土坑
Ｄ－４号土坑
Ｗ－５号溝跡
ＰＬ．６（Ｃ 区）
Ｃ区 全景
ＰＬ．７（Ｃ 区）
Ｃ区 全景
Ｃ区北半部 As-Ｂ下水田と１号南北大畦畔
ＰＬ．８（Ｃ 区）
Ｃ区南半部 As-Ｂ下水田とＨ-２号・３号住居跡
As-Ｂ下水田 １号南北大畦畔
As-Ｂ下水田 １号南北大畦畔 西脇の足痕
As-Ｂ下水田 １号南北大畦畔 断ち割りＡ
As-Ｂ下水田 ３号東西大畦畔 西半部・W-10号溝跡
ＰＬ．９（Ｃ 区）
As-Ｂ下水田 ３号東西大畦畔・W-10号溝跡
As-Ｂ下水田 水口１
As-Ｂ下水田 水口３
As-Ｂ下水田 水口５
As-Ｂ下水田 ２号南北大畦畔水口６
As-Ｂ下水田 水口７
As-Ｂ下水田面 凹凸状況
As-Ｂ下水田 畦畔断ち割りＤ
ＰＬ．10（Ｃ 区）
Ｄ－５号土坑
Ｄ－７号土坑
Ｄ－８号土坑
Ｄ－９号土坑

D -10 号土坑
D -10 号土坑 土層断面
D -11 号土坑
D -12 号土坑
PL. 11（C 区）
D -13 号土坑
I - 1 号井戸跡
W - 7 号溝跡
W - 8 号溝跡
W - 9 号溝跡・X - 1 号窪地
W -11 号溝跡
W -12 号溝跡
W -13 号溝跡、16 号・17 号溝跡
PL. 12（C 区）
W -14 号溝跡
W -15 号溝跡
W -15 号溝跡 土層断面
W -16 号～ 18 号溝跡 北端部
W -16 号～ 18 号溝跡 土層断面A
W -16 号・17 号溝跡 中央付近屈曲部
W -19 号溝跡、21 号溝跡
W -20 号溝跡
PL. 13（C 区）
W -22 号溝跡
W -22 号溝跡 土層断面A
W -23 号溝跡
W -24 号溝跡
W -24 号・25 号・29 号溝跡 交差部
W -25 号・26 号・28 号溝跡
W -26 号溝跡 土層断面A
W -27 号溝跡
PL. 14（C 区）
W -30 号溝跡
W -31 号・32 号溝跡
W -31 号・32 号溝跡 土層断面
W -33 号溝跡
W -34 号溝跡 東辺
W -34 号溝跡 東辺最深部
W -34 号・39 号溝跡 交差部土層断面A
W -35 号溝跡 西辺、36 号溝跡
PL. 15（C 区）
W -37 号溝跡 西辺、38 号溝跡
W -38 号溝跡 土層断面A
W -39 号溝跡
W -40 号、16 号・17 号溝跡
X - 1 号窪地・W - 9 号溝跡
X - 1 号窪地 土層断面
X - 2 号窪地
X - 2 号窪地 土層断面
PL. 16（C 区）
C区、古墳時代遺構 全景
H - 1 号住居跡
H - 1 号住居跡 外周溝南辺
H - 1 号住居跡 外周溝東辺
H - 1 号住居跡 外周溝北辺
PL. 17（C 区）
H - 1 号住居跡 外周溝南辺遺物出土状態
H - 1 号住居跡 外周溝北辺遺物出土状態
H - 1 号住居跡 外周溝北辺部土層断面
H - 2 号住居跡
H - 2 号住居跡 外周溝南西部
H - 2 号住居跡 外周溝南西部遺物出土状態
H - 2 号住居跡 外周溝土層断面A
H - 3 号住居跡
PL. 18（C 区）
H - 3 号住居跡 遺物出土状態
D - 6 号土坑
D - 6 号土坑 遺物出土状態
D -14 号土坑
D -14 号土坑 土層断面
D -15 号土坑
D -16 号土坑
D -17 号土坑
PL. 19
A区 出土遺物
C区 出土遺物
溝跡 出土遺物
H - 1 号住居跡 出土遺物 (1)
PL. 20
H - 1 号住居跡 出土遺物 (2)
PL. 21
H - 1 号住居跡 出土遺物 (3)
PL. 22
H - 1 号住居跡 出土遺物 (4)
H - 2 号住居跡 出土遺物
PL. 23
H - 3 号住居跡 出土遺物
土坑 出土遺物

Ⅰ　調査に至る経緯

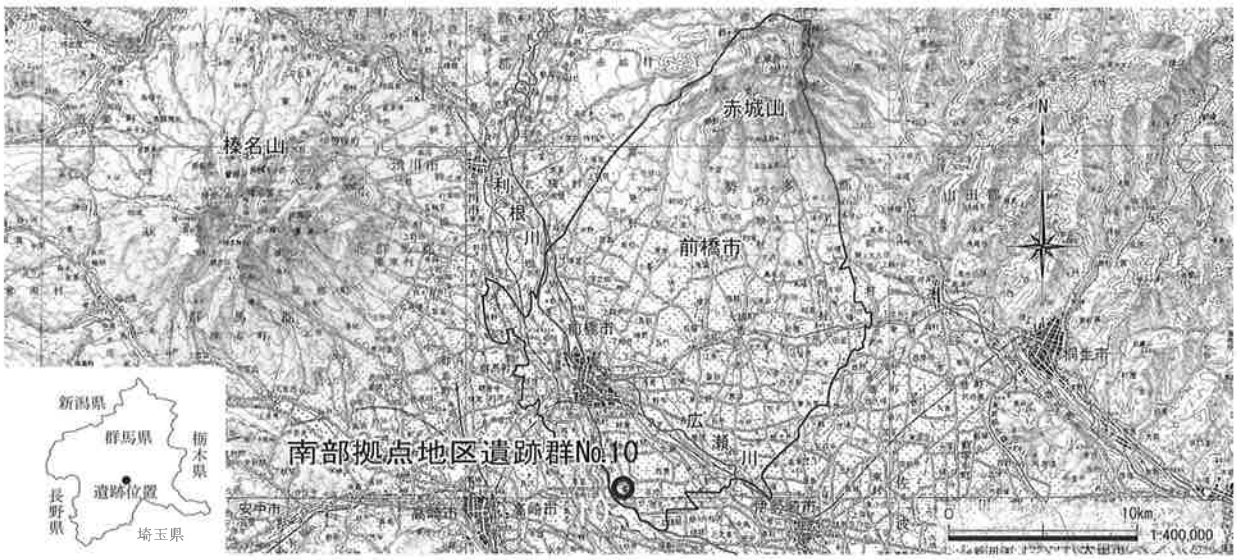
平成25年6月5日付けで前橋市南部拠点西地区土地区画整理組合より埋蔵文化財確認調査依頼が前橋市教育委員会に提出され、同年7月3日～8月30日にかけて試掘調査を実施し、浅間B軽石で覆われた水田跡を確認した。試掘調査に際しては、開発面積が広大であるため原則20ｍピッチでトレンチを設定し、重機により遺構確認を行った。なお、試掘面積は8,659㎡であった。試掘調査の結果を受け、埋蔵文化財の保護について協議を重ねたが、設計変更は不可能であるため発掘調査を実施し記録保存の措置を執ることで合意を得た。前橋市教育委員会では既に直営による発掘調査を実施しており、直営による調査の実施が困難であるため、「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」に則り、前橋市教育委員会の作成する調査仕様書に基づく監理・指導の下、発掘調査を実施することになり、平成26年3月7日付けで前橋市南部拠点西地区土地区画整理組合、民間調査組織である有限会社毛野考古学研究所、前橋市教育委員会との間で発掘調査実施に関する協定書が締結された。同年3月10日から適時調査準備を開始、同年3月25日から土木重機の投入による表土除去が実施され、現地での発掘調査が開始された。

なお、遺跡名称「南部拠点地区遺跡群№.10」の「南部拠点地区」は区画整理事業名を採用し、数字の「№.10」は過年度に実施した調査と区別するために付したものである。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

本遺跡は、前橋市域の南東部「前橋台地」の後背湿地に立地する。前橋台地は、約2万年前の浅間山噴火による山体崩壊を起源とする「前橋泥流」が、利根川によって赤城・榛名山間から関東平野に流出する部分に堆積して形成された扇状地性台地である。台地上にはその後の中小河川の浸食によって、北西から南東方向に多くの自然堤防・後背湿地が形成されている。台地の東辺は、利根川の旧流路である広瀬川低地帯の段丘崖によって画されている。この崖上には高燥な地形が帯状に連なり、その西方には高崎市・玉村町にかけて広大な水田地帯が広がっている。現在この水田域の中を、中世に流路が変流したと考えられている利根川が貫流している。東方には前橋台地北部の湿地帯に源をもち、古墳時代から水田開発に利用されてきたと考えられる「端気川（はけがわ）」が南流している。調査地は現在の利根川の左岸から300ｍ前後、端気川の右岸からは約1㎞に位置する。



第1図　遺跡の位置

2　歴史的環境

本遺跡周辺の前橋台地東半部では弥生時代から前の遺跡の立地は非常に少ない。ここでは遺跡数が急増する古墳時代以降の様相について記していく。

古墳時代前期には周辺の自然堤防や微高地上に多数の集落が立地してくる。徳丸仲田遺跡（44）東辺のＨ・Ｉ区、公田池尻遺跡（34）北端部、本遺跡北西の横手早稲田遺跡（26）・横手湯田遺跡（24）Ａ・Ｂ区で住居跡が検出されている。このうち横手早稲田・横手湯田遺跡の住居跡は、周囲に溝をめぐらせたものである。また、下阿内壱町畑遺跡（12）１区から西田遺跡Ｂ区（14）にかけてでは、この時期の祭祀跡とみられる痕跡も発見されている。その他、Ａｓ－Ｃ関係の水田跡や溝跡などが周辺部で多数検出されている。前代までと大きく様相が変わる背景として、台地上の小河川の利用や用排水路の開鑿などによる低地部の水田開発が考えられている。また、徳丸仲田遺跡では堰を伴った大規模な用水路が発見され、広範囲に及ぶ組織的な大開発が行われたと考えられている。

これらの水田開発を主導したとみられる首長層の墳墓が築かれた地として、台地の東辺に朝倉・広瀬古墳群が分布している。前期に限っても、全長 130 ｍの東日本最大の前方後方墳である前橋八幡山古墳、129 ｍの前方後円墳で三角縁神獣鏡などを出土した前橋天神山古墳が占地しているほか、同時期の円墳である朝倉Ⅱ号古墳などが知られている。また、公田東遺跡（35）では前方後方形周溝墓も検出されている。

古墳時代中期から後期の集落遺跡は台地の北辺部以外には今のところ発見例がない。少量ながら後期の土器が出土する遺跡もみられ、前期とは地点を替えて存在するものと考えられる。水田跡はＨｒ－ＦＡやＨｒ－ＦＰに関わる水田が 22 遺跡で確認されており、水田域の拡大に伴い集落域が移動している可能性がある。

朝倉・広瀬古墳群ではその後も７世紀代まで有力古墳の築造が続き、全体としては 150 基以上の古墳が存在したことが判明している。

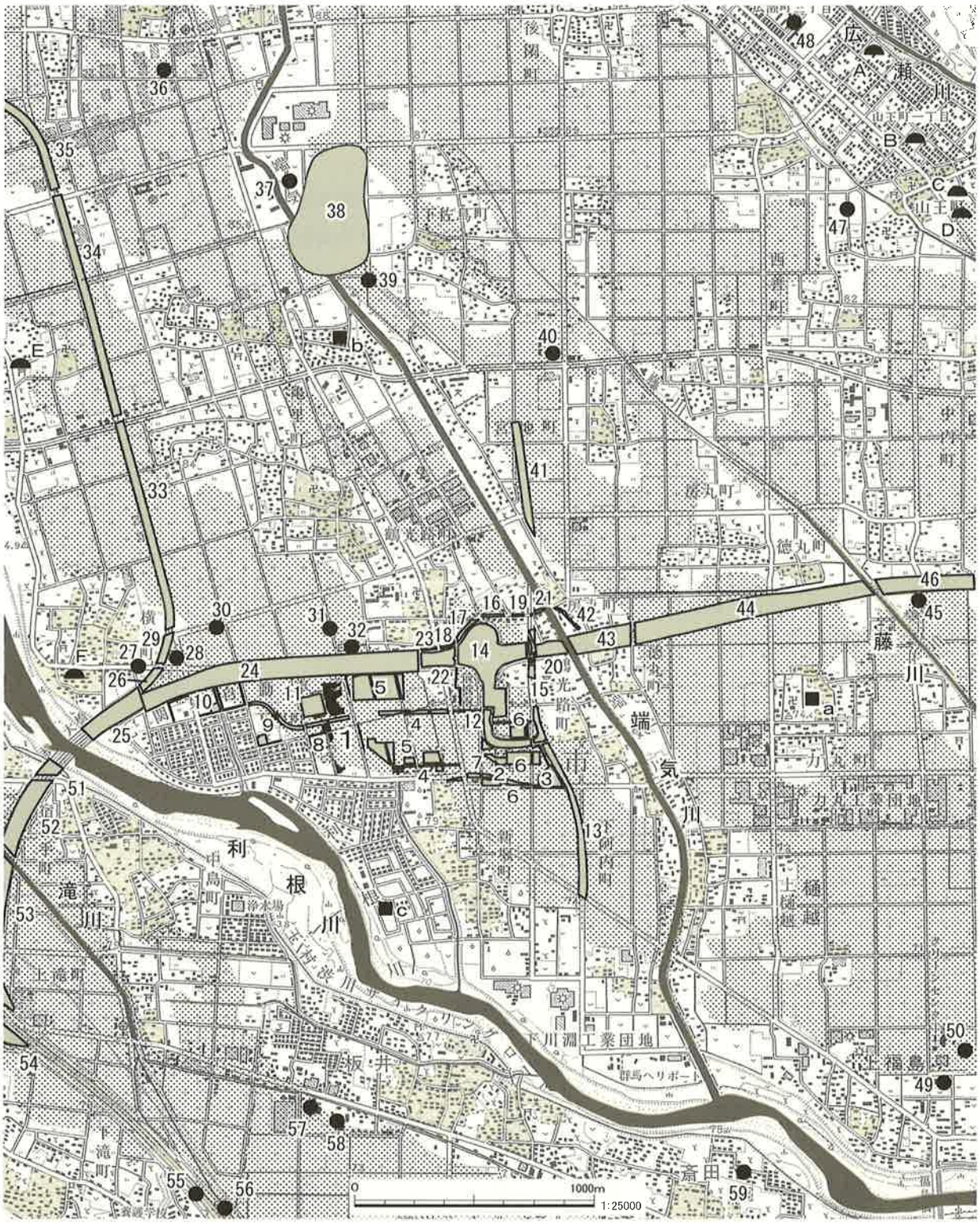
奈良・平安時代では、再び周辺の微高地上に広く集落が展開してくる。西善尺司遺跡（46）やその東方の中内村前遺跡などでは大規模集落が発見されている。平安時代末期のＡｓ－Ｂ層直下の水田跡は周辺のほとんどの遺跡で検出される状況で、その区画は条里区画を継承していることが判明している。周辺一帯の条里制の施行に伴い、集落域の再編が行われたことも考えられている。

中近世については、大きな特色として環濠遺跡群の存在があげられる。玉村町にかけての一帯には、方形を基調とする濠をめぐらせた屋敷地や寺院などが散在し、環濠の一部と考えられる溝跡が検出された遺跡も数多い。力丸城址や宿阿内城址（ａ・ｂ）はこのような環濠屋敷が複合・発展した形態と考えられている。

第１表　周辺遺跡検出遺構

遺構の種別　遺跡表示番号		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28
古墳時代の水田跡	As-C 混土層														○								○						
	As-C 混土層上													○															
	Hr-FA 層下						○						○		○										○	○	○		
	Hr-FA 洪水層下					○						○																	
	Hr-FP 層下																								○		○		
	Hr-FP 泥流層下																									○		○	
古墳時代の竪穴住居跡		前後										前													前中		前中		
奈良・平安時代の水田跡		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
奈良・平安時代の竪穴住居跡															○		○			○	○	○							
中・近世の水田跡	As-B 混土層																	○							○		○		○
	As-A 層下																												
	復旧溝など												○	○							○				○	○	○		
中・近世その他の遺構	館跡など												○		○			○			○		○		○	○			
	火葬土坑																									○			
	土坑墓													○	○						○		○			○			

遺構の種別　遺跡表示番号		29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56
古墳時代の水田跡	As-C 混土層						○	○								○	○								○	○			
	As-C 混土層上										○															○			
	Hr-FA 層下					○	○	○			○						○		○					○	○	○			
	Hr-FA 洪水層下																												
	Hr-FP 層下																							○	○				
	Hr-FP 泥流層下																								○	○			
古墳時代の竪穴住居跡							前後	後		後	後	後					前後				前								
奈良・平安時代の水田跡		○	○	○	○	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○		○			○	○	○	○	○	○	○	
奈良・平安時代の竪穴住居跡							○	○			○				○	○	○			○				○					
中・近世の水田跡	As-B 混土層	○				○	○	○																	○				
	As-A 層下							○																○					
	復旧溝など	○																						○	○	○	○	○	○
中・近世その他の遺構	館跡など		○				○	○			○				○	○	○	○	○	○				○	○	○	○		
	火葬土坑										○								○										
	土坑墓					○										○			○					○					



1 本遺跡
2 南部微点地区遺跡群№1
3 南部微点地区遺跡群№2
4 南部微点地区遺跡群№3
5 南部微点地区遺跡群№4
6 南部微点地区遺跡群№5
7 南部微点地区遺跡群№6
8 南部微点地区遺跡群№7
9 南部微点地区遺跡群№8
10 南部微点地区遺跡群№9
11 南部微点地区遺跡群№11
12 下阿内壱町畑
13 下阿内前田
14 西田
15 西田Ⅱ
16 西田Ⅲ
17 西田Ⅳ
18 西田Ⅴ
19 西田Ⅵ
20 鶴光路榎橋
21 鶴光路榎橋Ⅱ
22 村中
23 村中Ⅱ
24 横手湯田，同Ⅱ～Ⅵ
25 横手南川端
26 横手早稲田
27 井戸南
28 横手宮田Ⅱ
29 横手宮Ⅲ
30 亀里銭面、同Ⅱ
31 亀里油免Ⅱ
32 鶴光路練引
33 亀里平塚
34 公田池尻
35 公田東
36 上佐鳥中原前，同Ⅱ・Ⅲ
37 下佐鳥
38 鶴倉工業団地遺跡群№1～6
39 川曲
40 東田
41 宮地中田
42 徳丸高堰Ⅲ・Ⅳ
43 徳丸高堰，同Ⅱ
44 徳丸仲田，同Ⅱ～Ⅳ
45 西善尺司Ⅲ
46 西善尺司，同Ⅱ
47 西善鍛冶屋
48 山王若宮Ⅱ
49 金免
50 砂町
51 西横手遺跡群
52 宿横手三波川
53 上滝榎町北
54 上滝五反畑
55 滝川B
56 上滝社宮司
57 天神前
58 天神前Ⅱ
59 田口下屋敷

(広瀬古墳群)
A 亀塚山古墳
B 金冠塚古墳
C 文殊山古墳
D 阿弥陀山古墳
E 下川添3号古墳
F 浅間神社古墳
a 力丸城
b 宿阿内城
c 新堀城

第２図　周辺の遺跡

Ⅲ　調査の方法と経過

1　調査の方法

前橋市教育委員会が実施した試掘調査結果から、調査対象地内にはＡｓ－Ｂ層下の水田跡が広範囲に展開していることが予想され、一部には遺物包含層も確認されていた。今回の開発事業の計画内容は大型店舗の建物等の建設であり、調査範囲は遺跡に破壊が及ぶ部分となるＡ・Ｂ・Ｃ３カ所の調査区が決定された。調査区の面積はＡ区 1,148.37 ㎡、Ｂ区 1,223,44 ㎡、Ｃ区 7,581.55 ㎡、合計で 9,953.36 ㎡となった（第３図）。

調査はＢ区から着手し、その後Ａ区、Ｃ区へと順次進めていった。調査の方法は、表土からＡｓ－Ｂ層の上部までバック･ホーで掘削し、Ａｓ－Ｂ層の遺存しない部分についてはＡｓ－Ｂ層の下層となる層位まで掘削した。このため、Ａｓ－Ｂ層より上部から掘鑿された遺構は、土層断面の観察により本来の掘り込み面を確認した。重機による表土除去後は人力により遺構の確認と検出にあたった。また、Ａｓ－Ｂ層下面の水田の調査終了後、Ｃ区で認められた遺物包含層の部分を調査し、古墳時代後期、及び前期の住居跡を検出した。

遺構の精査後は写真撮影、測量図面等の記録を作成した。写真は、35 ㎜モノクロフィルム及びリバーサルフィルムと、デジタルカメラで撮影し、全体の遺構検出終了後には空中写真撮影を実施した。図面測量は、平面図はトータルステーションを用いて作成し、断面図は手実測で 1/20 縮尺で実施した。

検出された遺構は調査区・時代などに関わらず検出順に種類毎に記号番号を付した。記号は、Ｈが住居跡、Ｄは土坑、Ｉが井戸跡、Ｗは溝跡、Ｘは不明遺構を表している。本書では原則調査時の遺構番号をそのまま使用しているが、東西大畦畔についてのみは調査時の１号を２号に、２号を３号にそれぞれ変更した。

第３図　調査地位置図

2 調査の経過

平成26年3月19日より準備作業を開始。基準杭や調査区の設定、器材の搬入、現地事務所用プレハブ・トイレの設置などを行う。

3月25日から重機による表土掘削をB区から開始、31日からは重機を2組としてA区も並行して表土掘削を開始した。両区の表土の除去は4月3日に終了し、引き続きC区の表土掘削に移行した。最終的にC区までの掘削が終了したのは4月18日であった。

この間、3月22日からは作業員による遺構検出作業を、B区の南半部から開始した。B区の遺構検出は4月7日に終了し、引き続きA区の西半部から掘下げを開始した。A区は4月14日に精査を終了し、15日にはA・B両区の空中写真撮影業務を実施した。16日から23日にかけてはA・B区の遺構測量業務と補足調査を実施した。

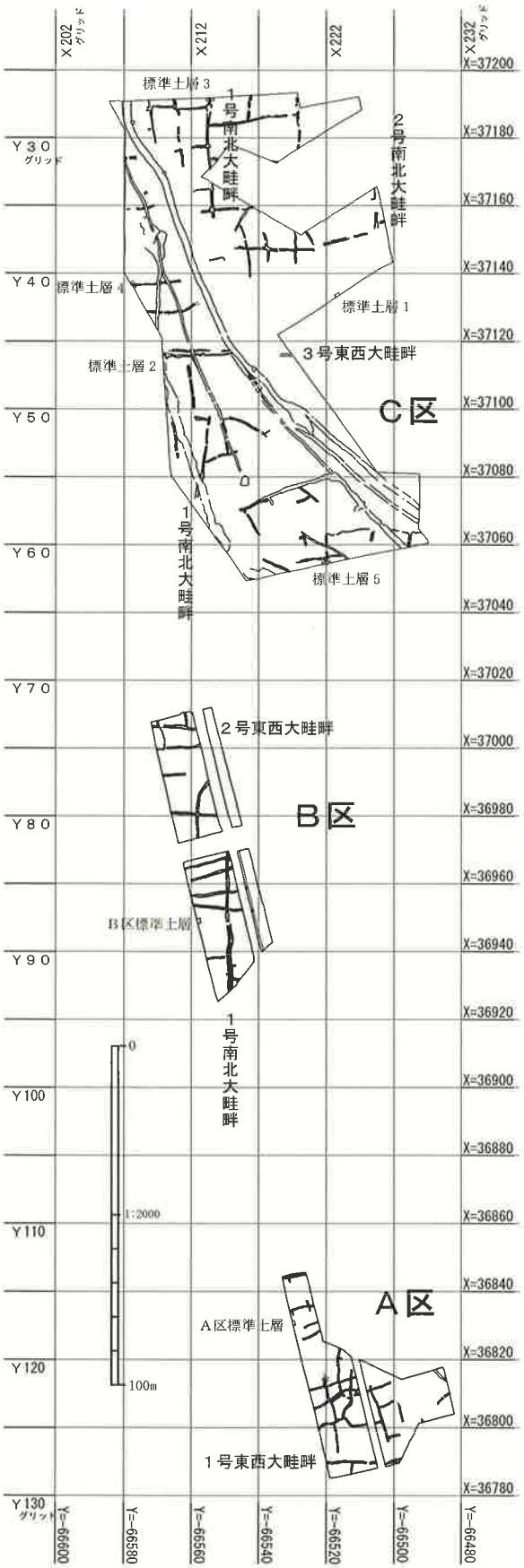
C区は4月15日から遺構の検出作業に取りかかり、As-B層の遺存度が良い北西部から遺構検出作業を開始した。4月25日にW－16号溝から西のAs-B層下面の精査を終了し、その後再び北方から、東半部の精査にあたった。As-B層下面での遺構検出は5月15日に終了したが、この間5月12日からは下層の古墳時代の遺構の調査を開始し、22日に終了した。

5月19日からはC区の空中写真撮影実施に向けて、調査区内の清掃や器材の撤去・搬出作業を開始。23日にラジコン・ヘリにより空中写真を撮影。

C区の遺構測量業務は、この間5月1日から断続的に実施した。

5月24日にはC区の補足調査や測量業務を行い、現地での作業をすべて終了した。

整理・報告書作成業務については、平成26年5月26日から9月にかけて有限会社毛野考古学研究所において実施した。



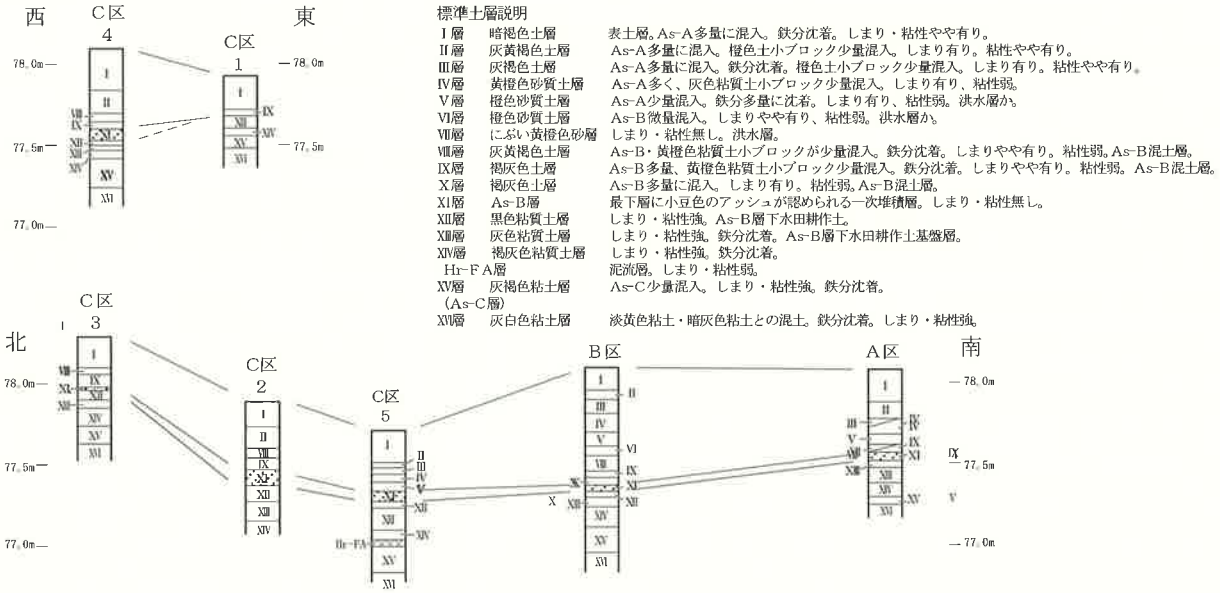
第4図　調査区全体図

Ⅳ　遺跡の概要

1　基本層序

調査地は昭和40年代の耕地整理によって整然とした水田区画が造成されている。標高はＣ区の北西部が78.3ｍほどで、全体的に南東方向にゆるやかに傾斜し、Ａ区南東部との高低差は1.4ｍという現況であった。

標準土層はＢ区で良好な層準が確認でき、Ａ区においても比較的良好な状況がみられた。しかし、Ｃ区中央では第Ⅺ層のＡｓ－Ｂ層の下面は、北西から南東方向への浅い谷地形となっており、第Ⅺ層より上部の堆積は地点によって大きく異なっていた。さらに、Ｃ区中央の東半部側は第Ⅻ層までも削平されて残存せず、本来この付近は微高地状の地形であったことが想定された。古墳時代の住居跡はこの地点で検出されている。Ｃ区南端の谷部では第ＸⅣ層と第ＸＶ層の間にＨｒ－ＦＡ泥流層が薄く確認されたが、その他では古墳時代前期の住居跡外周溝の覆土上部に部分的に検出されたのみであった。またＡｓ－Ｃ層は純層が確認された地点はなく、軽石の混入から第ＸＶ層の下層での降下が考えられた。



第５図　基本層序

2　遺構・遺物の概要

検出された遺構は、Ａ区とＢ区で平安時代末のＡｓ－Ｂ層直下の水田跡及び溝跡３条、中世以降のＡｓ－Ｂ混土の溝跡２条、土坑４基、近世以降の溝跡１条で、Ｃ区では古墳時代前期の住居跡２軒、土坑５基、古墳時代後期の住居跡１軒、Ａｓ－Ｂ層直下の水田跡及び溝跡７条、窪地状遺構１基、Ａｓ－Ｂ混土の土坑８基、井戸跡１基、溝跡24条、窪地状遺構１基、近世以降の溝跡３条であった。

Ａｓ－Ｂ層直下の水田跡は、Ａ区とＢ区ではＡｓ－Ｂ層の下まで耕地整理の削平が及んでいる部分があったものの、全体的に畦畔などが良好に検出された。Ｃ区では調査区中央付近の東側がやはりＡｓ－Ｂ層下まですでに削平されており水田跡は検出されなかった。一帯は調査区のほぼ全域にわたって水田跡が展開していたとみられる。

遺物は、Ａ区・Ｂ区ではほとんど出土がなかった。Ｃ区でもＡｓ－Ｂ直下の水田跡や溝跡などに係わるものは検出されなかったが、中世以後の溝跡などからは土師器や陶磁器の破片など少量の遺物が出土した。しかし土師器類についてはすべて混入によるものである。一方、古墳時代前期の住居跡では、外周溝の部分から良好な土師器群の出土があった。

Ⅴ　検出遺構

1　平安時代末以降

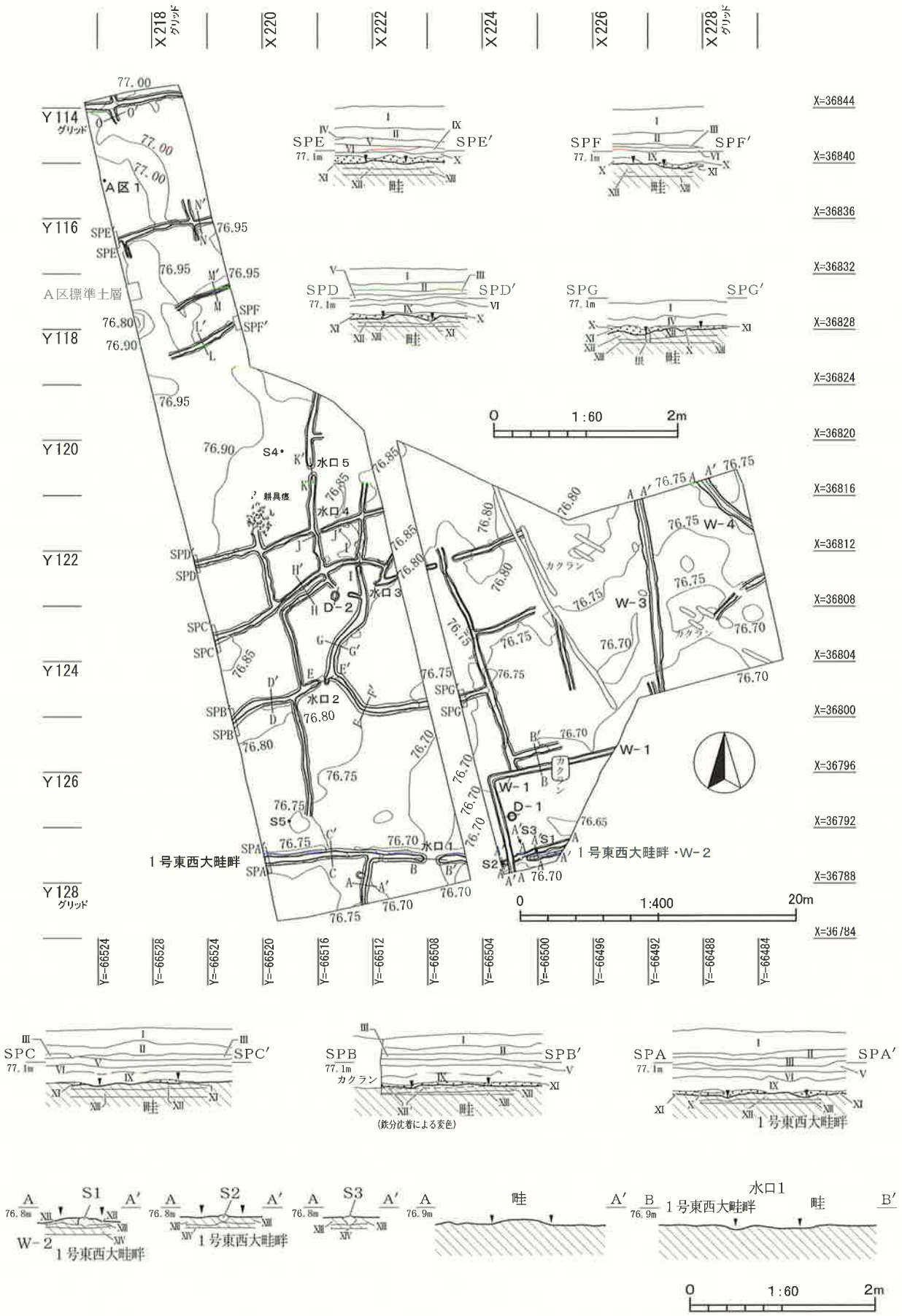
1 A　区

調査区中央付近を南北に深い排水路が走っており、調査区は東西に分かれていた。東半部では過去の耕地整理の削平を受けて、60cm 近く低い段差となっていた。このため、西半部では第Ⅺ層（Ａs－Ｂ層）も含めて良好な層準が認められたが、東半部では表土層の直下に辛うじて第Ⅺ層が薄く残る程度の部分が多く、第Ⅻ層上面も後世の耕作などによる攪乱が激しかった。以下、中・近世の遺構も含めて種別、番号順に記載する。

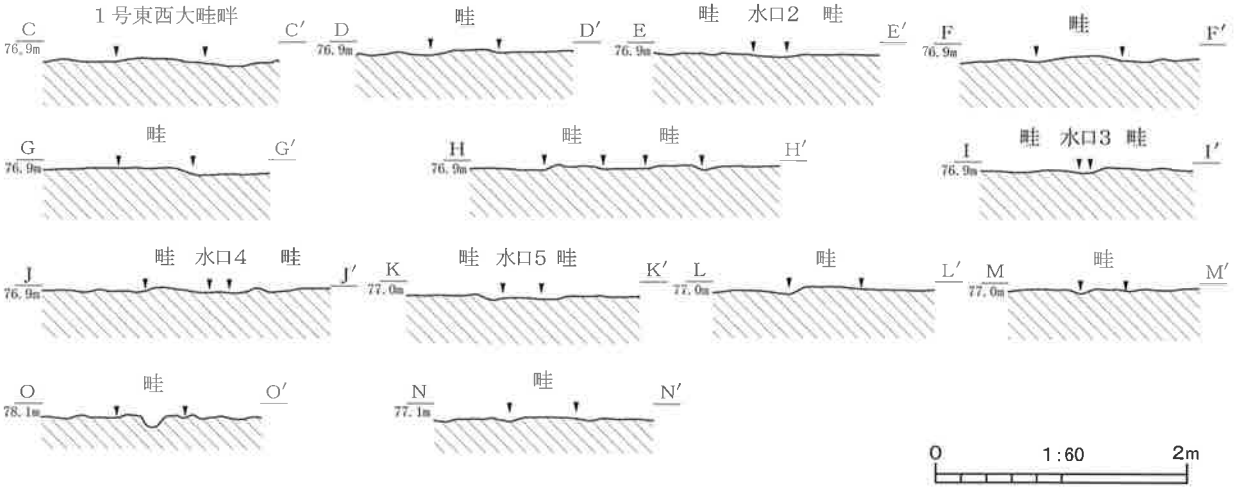
なお以下の記述中、X…、Y…についてはグリッド番号を表している。

1　Ａs－Ｂ層下水田跡　（第６・７図、ＰＬ．２・３）

位置：調査区のほぼ全域で検出された。　**重複**：中世以降のＷ－１号・３号溝跡、Ｄ－１号・２号土坑に切られている。**地形**:北西部で標高 77 m強、南東端部が 76 m強と１mの差があり、ゆるやかに傾斜している。　**畦畔**:調査区の南端部 X220 ～ 225、Y127 で、22 mの長さにわたって**１号東西大畦畔**が検出された。西半部はほぼ東西方向の走向であるが、東半部は 20°程北に振れた方向であった。規模は、最大幅は 94cm、最大高は６cm ほどを計る。削平を受けているためか小規模な部分が多かったが、他の小畦畔よりは全体に規模が大きかった。東端部ではＡs－Ｂ降下で直接埋没したＷ－２号溝が併行して走っていた。本来は大畦畔の中央部にあったものが、畦畔の南側が削平された結果と考えられる。このＷ－２号溝の西の畦畔上（X224）には２カ所に礫（Ｓ－１・２）が検出された。10cm 強ほどの輝石安山岩で、礫の大部分が畦畔の中に埋まった状況であり掘り込みなどは認められなかった。この北の水田面中（X224、Y127）にも同様に礫が１点（Ｓ－３）検出された。さらに中央付近（X223）には幅 70cm と広い水口１が設けられ、南の調査区外へ続く南北小畦畔（X221）が１条取り付いていた。その他の小畦畔も含め畦畔の高さはあまりなく、盛り土はすべて水田面と同じＡs－Ｂ層直下の第Ⅻ層の黒色粘質土で形成されていた。　**区画**：全形が捉えられた水田区画は調査区中央付近の不定形な６枚程度であった。一部には南北（X223、 Y122 ～ 125）、東西方向（X218、Y121・122）に小畦畔の目が通る部分もあり、調査区西半の北側や東半部の付近は長方形の区画を指向している様子が見られた。しかし、調査区中央付近では小さな三角形や菱形状の区画をはじめ不定形な区画が多く、最小の三角形の区画（X221、Y122）は２㎡ほどと極小であった。水田面は黒色粘質土で全体的に 10cm 内外の層厚があり、１号東西大畦畔の北側から上記の不定形な区画の部分にかけては、上面が茶褐色に変色した部分が認められ、鉄分の沈着によるものとみられた。また、この付近の水田面は凹凸が目立つ状況であったが、凹凸自体は風化しているようであった。調査区西半の中央部では、Ａs－Ｂ層で直接覆われた掘削痕が集中する個所（X219、Y121）が検出された。幅 10cm 強の平らな刃先を持つ鋤状の耕具によるもので、50 個以上の痕跡が残り、ほとんどが西あるいは北西方向からの掘削であった。南側の途切れた小畦畔の状況と合わせてみると、畦畔を崩す行為がなされていたと考えられる。　**水口**:大畦畔以外に４カ所（水口２～５）で確認されたが、前記の不定形な区画群の付近にまとまるように検出されている。　**遺物**：調査区の北辺付近（X217・Y115、第６図Ａ区１）で灰釉陶器皿（第 30 図）の破片が出土したが、洪水起源とみられる灰黄褐色シルト質土の堆積する浅い窪地部分からの出土であった。



第６図　Ａ区全体図及び断面図



第７図　Ａ区Ａs-Ｂ下水田断面図

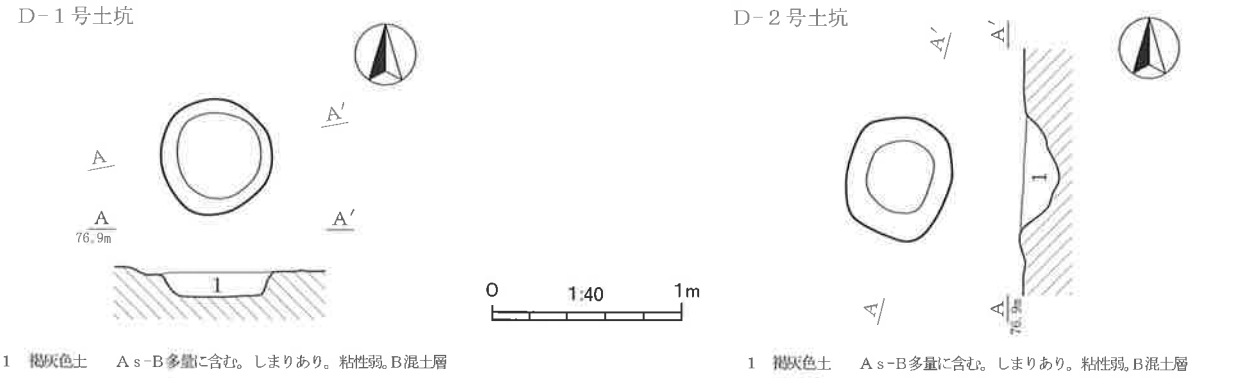
２ 土 坑

Ｄ－１号土坑 （第８図、ＰＬ．３）

位置:調査区東半部の南端付近、X224、Y126 で検出された。 **重複**:Ａs-Ｂ層を掘り込みＡs-Ｂ下水田面を切っていた。 **規模・形態**:やや不整な円形で、長径 61cm、深さは 13cm を計る。断面形は円筒形である。 **埋没状態**:Ｂ軽石を多量に含む埋土で、Ａs-Ｂの降下後あまり時間を経ない段階での掘削とみられる。遺物の出土はなかった。 **時期**：埋土の状況から中世とみられる。

Ｄ－２号土坑 （第８図、ＰＬ．３）

位置：調査区西半部の中央部 X221、Y122 で検出された。 **重複**：Ａs-Ｂ層を掘り込みＡs-Ｂ下水田面を切っていた。**規模・形態**：長径 63cm の楕円形で、深さは 20cm ほどである。断面形はなべ底状を呈していた。 **埋没状態**：埋土中にはＢ軽石を多量に含み、Ｄ－１号土坑と同様であった。遺物はなかった。 **時期**：埋土の状況から中世とみられる。



第８図　Ａ区土坑

３ 溝 跡

Ｗ－１号溝跡 （第６・９図、ＰＬ．３）

位置：調査区東半の X224 ～ 226、Y125 ～ 127 で検出された。 **重複**：Ａs-Ｂ層を掘り込み、１号東西大畦畔などＡs-Ｂ下水田を切っている。 **規模・形態**：Ｌ字形にほぼ直角に走る北辺部と西辺部で、北辺部 9.3m、西辺部７ｍが検出された。上幅は 40cm 前後で、深さは最深部でも 25cm ほどと浅かった。断面形は箱状で、底面には掘削痕の凹凸がみられた。 **埋没状態**：埋土中はＢ軽石と粘質土を多く含んでいた。 **時期**：埋土の状況から中世とみられる。

Ｗ－２号溝跡　（第６・９図、ＰＬ．２）

位置：調査区南東端部 X224・225、Y127 で、１号東西大畦畔に沿って検出された。　**重複**：第XI層よりも下面からの掘り込みである。　**規模・形態**：調査区東壁から 2.7 ｍの長さが検出されたが、西側はすでに畦畔とともに削平を受け残存していなかった。上幅は 40 ～ 60cm ほどで、深さは５cm 弱ほどの浅い皿状の断面形であった。大畦畔に伴う溝と考えられる。　**埋没状態**：Ａｓ－Ｂの降下で直接埋没しており、流水の痕跡は認められなかった。

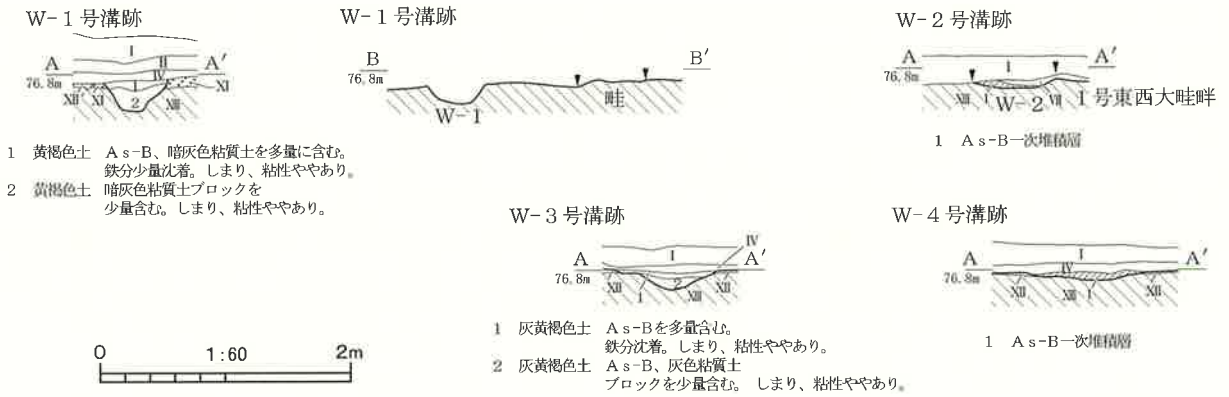
時期：１号東西大畦畔と同じく平安時代末である。

Ｗ－３号溝跡　（第６・９図、ＰＬ．４）

位置：調査区東半部 X226・227、Y121 ～ 124 で南北方向に縦断して検出された。　**重複**：第IV層よりも下位からの掘り込みで、第XII層を切っている。　**規模・形態**：ほぼ南北の走向で、14 ｍの長さが検出された。南北両端は調査区外へ続いている。北端部では上幅 60cm、深さ 30cm ほどであったが、南端側は幅 20cm、深さは数 cm ほどとなっていた。断面形はなべ底状を呈する。　**埋没状態**：Ｂ軽石を多く、粘質土の小ブロックを少量含んでいた。　**遺物**：軟質陶器や陶器の小片が数点出土した。　**時期**：埋土や遺物の状況から中世とみられる。

Ｗ－４号溝跡　（第６・９図、ＰＬ．４）

位置：調査区の東端 X227・228、Y120・121 で検出された。　**重複**：第IV層よりも下位からの掘り込みで、第XII層を切っている。　**規模・形態**：北西から南東方向へやや東に湾曲しながら走る。両端とも調査区外へ続いている。長さ５ｍ弱が検出され、規模は上幅 40 ～ 25cm 前後、最深部で５cm ほどであった。断面形は、浅い皿状である。**埋没状態**：Ａｓ－Ｂの降下によって埋没している。　**時期**：埋土の状況から、Ａｓ－Ｂ下水田と同時期の平安時代末である。



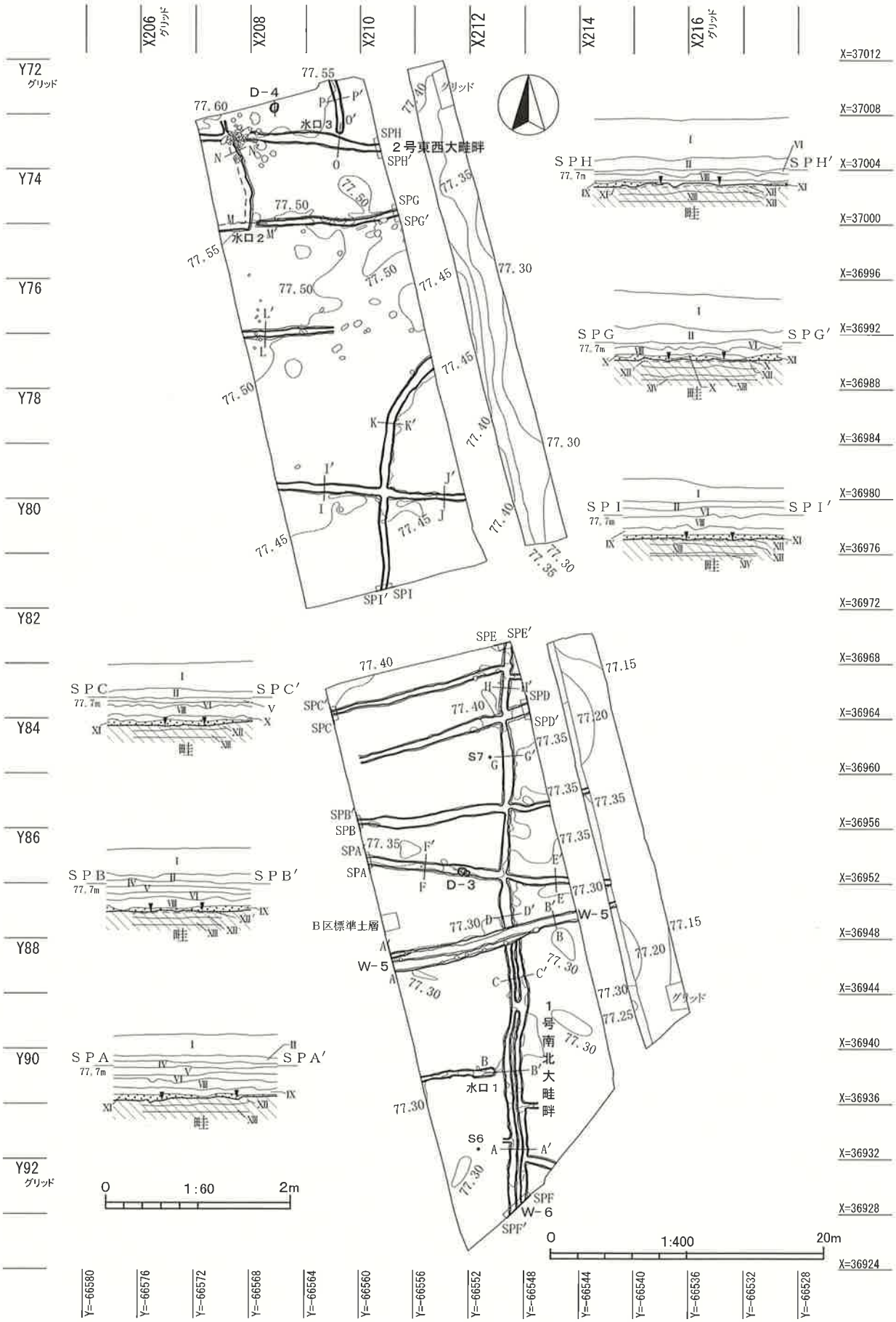
第９図　Ａ区溝跡断面図

２　Ｂ 区

Ａ区の北方 85 ｍほどに位置する。Ａ区と同じく調査区の東辺部を南北方向に排水路が縦断し、さらに中央部には幅５ｍの道路が東西に走っているため調査区は４分割された。排水路の東側はやはり耕地整理で大きく削平されて現表土の上面では 60cm ほどの段差があり、東側ではＡｓ－Ｂ層（XI層）や第XII層までがすでにほとんど失われていた。その他の部分はＡｓ－Ｂ層は全体に良好に遺存していた。

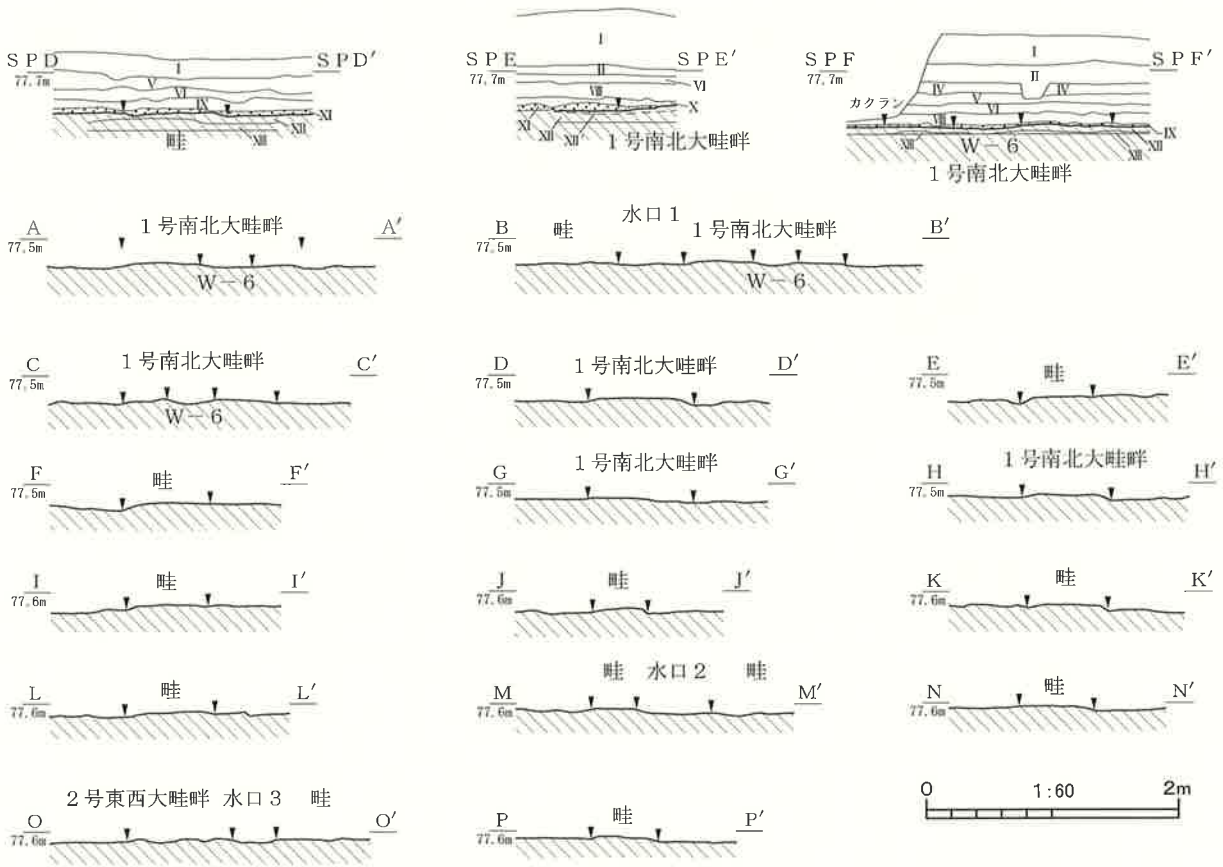
１　Ａｓ－Ｂ層下水田跡　（第 10・11 図、ＰＬ．４・５）

位置：調査区のほぼ全域で検出された。　**重複**：Ｄ－３号・４号土坑、Ｗ－５号溝跡に切られている。　**地形**：



第10図　B区全体図及び断面図

水田面である第XII層の標高は、北西端の最高所で77.60ｍほど、残存部の南東端部は77.25ｍほどで、本来はゆるやかな傾斜地形で、全面に水田が広がっていたとみられる。　**畦畔**：調査区南半部の中央（X212、Y82～92）を縦断して約41.5ｍにわたって**１号南北大畦畔**が検出された。わずかに屈曲するものの走向はほぼ南北方向であった。規模は、Ｗ－５号溝と重複する部分の南側半分ほど（Y88～92）は幅が1.5～1.2ｍほどと広く、その中央部にはＷ－６号溝跡が走っていた。これに対して北側（Y82～87）は45㎝～１ｍの幅と縮小されていた。高さは最高部でも５㎝ほどしかなかったが、これは他の畦畔全体でも同様の遺存状況であり、Ａs－Ｂ層の被覆状態からみると後世の削平などによる結果ではなく、本来Ａs－Ｂの降下時点で畦畔はあまり高い状態になかったことによるものと考えられた。Ｗ－６号溝跡は大畦畔に伴うものでＡs－Ｂ層に直接覆われていた。東西の小畦畔が交差するように派生していたが、それらの走向は一定していなかった。西側に水口１（X212、Y90）が設けられていた。調査区北辺部（X207～210、Y73）では**２号東西大畦畔**が13ｍの長さで検出された。小さな屈曲はあるがほぼ東西方向に走行していた。幅は0.5～1.5ｍと小畦畔よりやや幅広程度の規模で、高さは最高部でも5.5㎝ほどであった。西端部付近で南北の小畦畔が交差する部分（X207、Y73）が１ヵ所検出されたが、後世の多数の大小のピットが集中し攪乱されていた。また北側に水口３（X209、Y73）が設けられていた。その他の小畦畔ではやや幅広のものが多い状況であった。畦畔の盛り土はすべて水田面と同じ第XII層黒色粘質土層であった。　**区画**：全形が検出された区画はなかった。総じて整然とした形状とはなっていないが長方形を基調としており、一区画の面積が広く変則的な小区画はみられなかった。水田面の第XII層は、一部に鉄分の沈着により橙褐色に変色した部分が認められた。　**水口**：大畦畔以外に１カ所水口２（X208、Y75）が確認されたのみであった。**遺物**：水田面の２カ所で小礫Ｓ－６（X212、Y91）・７（X212、Y84）が検出された。10㎝強ほどの輝石安山岩で、第XII層中に入り込んでいたが特に掘り込みなどは認められなかった。



第11図　Ｂ区Ａs－Ｂ下水田断面図

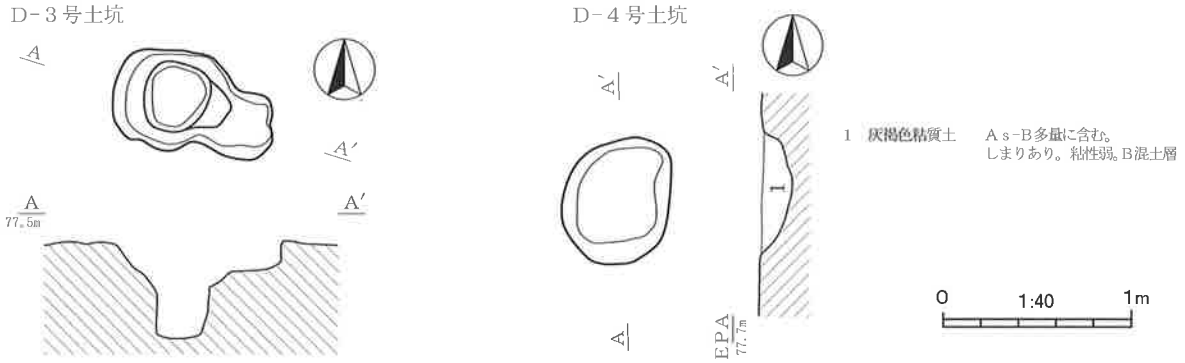
2　土　坑

Ｄ－３号土坑　（第 12 図、ＰＬ．５）

位置：調査区南半部の X211、Y87 で検出された。　**重複**：Ａs－Ｂ下水田の東西方向の小畦畔を切っていた。　**規模・形態**：平面形は東西に長い瓢箪形であるが基本は西半の円形部分である。東半部は浅く二段掘りになっている。長軸で 87cm、深さは円形部が最深 50cm、二段掘り部で 15cm を計る。円形部の断面形は上部が開く漏斗状であった。　**埋没状態**：Ｂ軽石を多量に含む埋土で、遺物はなかった。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

Ｄ－４号土坑　（第 12 図、ＰＬ．５）

位置：調査区北端 X208、Y73 で検出された。　**重複**：Ａs－Ｂ下水田面を切っていた。　**規模・形態**：南北にやや長い楕円形で、長径は 70cm、深さ 15cm を計る。断面形はなべ底状を呈する。　**埋没状態**：Ｂ軽石を多量に含む埋土であった。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。



第 12 図　Ｂ区土坑

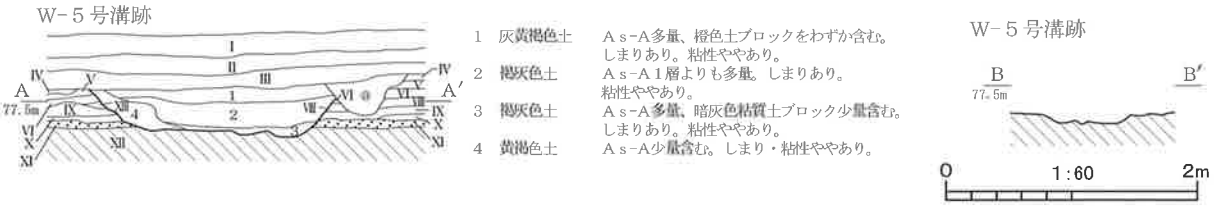
3　溝　跡

Ｗ－５号溝跡　（第 10・13 図、ＰＬ．５）

位置：調査区南半の中央付近 X210 ～ 214、Y87・88 で検出された。　**重複**：１号南北大畦畔を切っている。　**規模・形態**：西南西から東北東方向へ、17 ｍの長さが検出された。両端部は調査区外へ続く。検出面での規模は、西半部は掘り直しのため幅が広く上幅 1.4 ｍ前後、東端部では上幅 20cm 強程度となり、深さは最深部で 50cm ほどであった。断面形は皿状で、底面は全体として東へゆるやかに下がっていた。　**埋没状態**：掘り込み面は第Ｖ層より上部からであり、埋土中にはＡ軽石を多量に含んでいた。　**遺物**：軟質陶器や陶器の小片が少量出土した。　**時期**：掘り込み面や埋土・遺物の状況から近世とみられる。

Ｗ－６号溝跡　（第 10・11 図、ＰＬ．５）

位置：１号南北大畦畔に付随して中央を走る（X212、Y88 ～ 92）。　**規模・形態**：調査区南端から 14 ｍほど北へ延びて一旦途切れ、65cm ほど間をおいて再び 3.5 ｍほど続いていた。北端はＷ－５号溝に切られていて不明である。上幅 40cm 内外で、深さは最深部で６cm ほどと浅く、断面形は皿状であった。底面は全体として南へゆるやかに下がっていた。　**埋没状態**：Ａs－Ｂの降下で直接埋没していた。流水の痕跡は認められなかった。　**時期**：１号南北大畦畔と同じ平安時代末である。



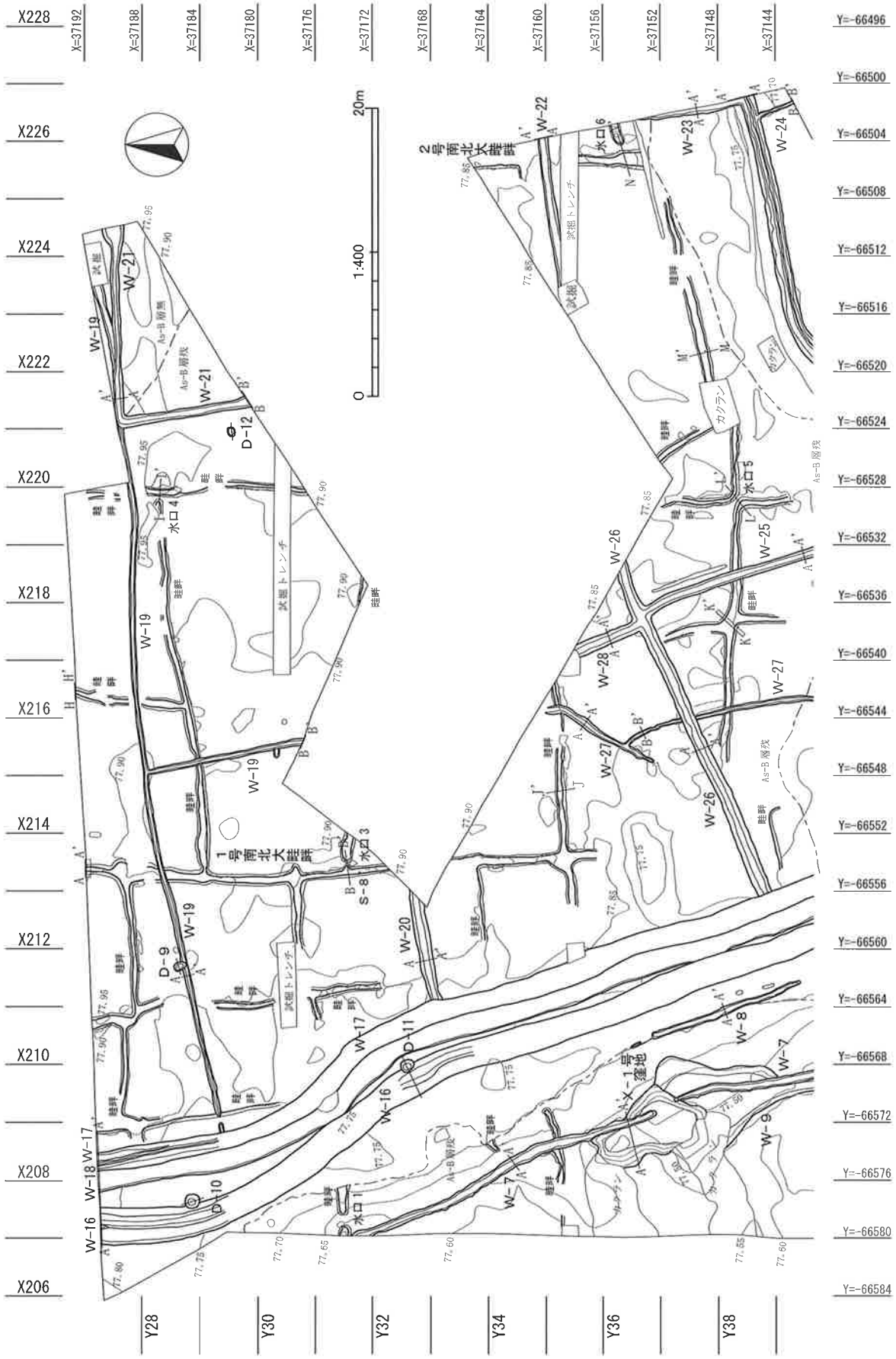
第 13 図　Ｂ区溝跡断面図

3　C 区

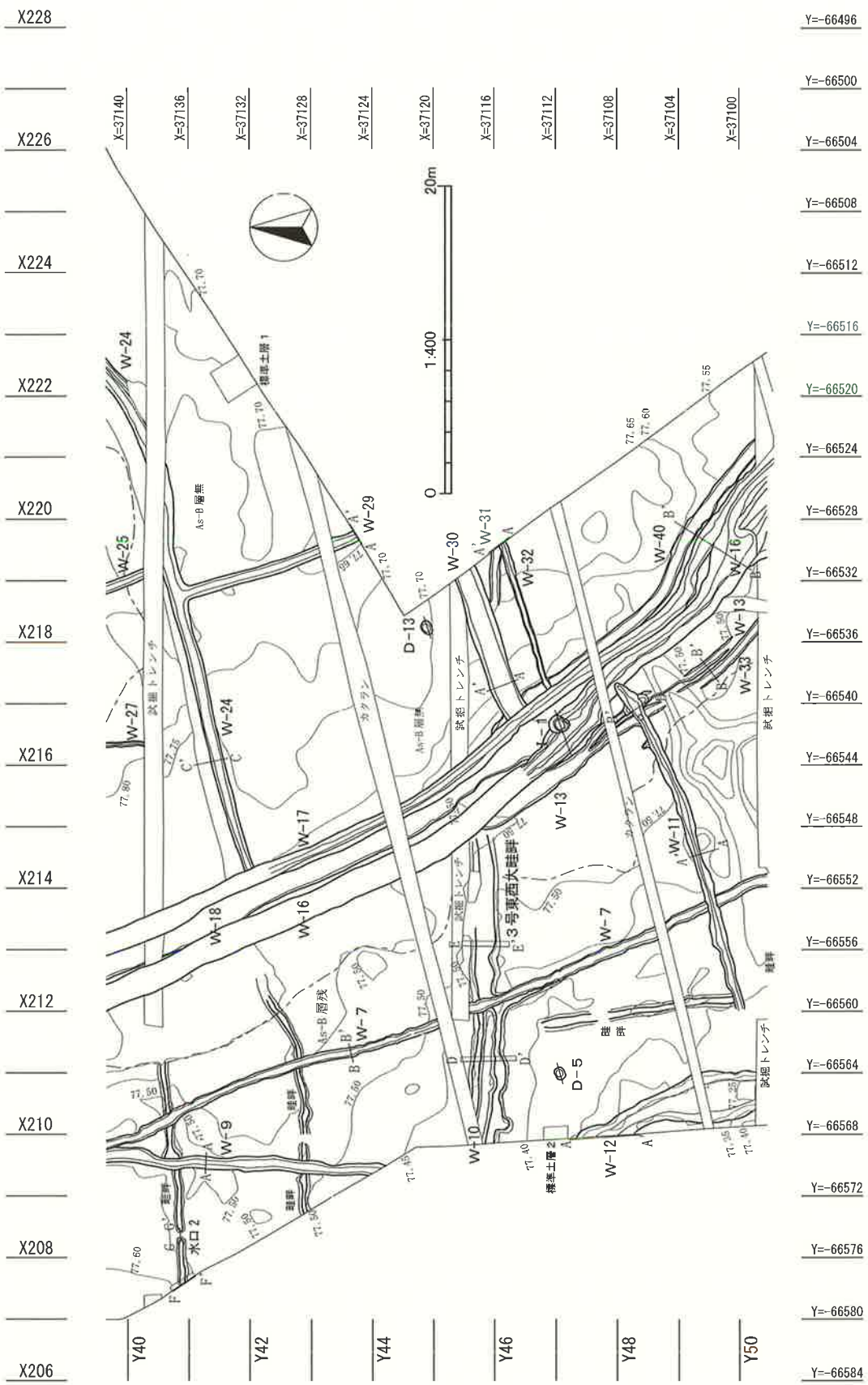
調査区の北端から南端まで約 140 mあり、調査前の標高は北端で 78.3 m、南端で 77.7 mと 60cm ほどの比高差があった。第XI層（A s- B層）を取り除いた第XII層（黒色粘質土層）上面では南北の高低差は地表面と同等であったが、調査区の東半部は本来微高地状の地形で、調査区中央部を北西から南東に向かう浅い谷地形が入っていたことが明らかになった。このため調査区の西半側の谷部ではA s- B層が良好に残っていたものの、中央部東側付近はA s- B層はすでに削平されて失われており、調査区の北東部も薄く残存する程度であった。

1　A s － B層下水田跡　（第 14・15・16・17 図、P L．6～9）

位置：調査区中央から南東部のA s- B層が失われていた部分を除いて、ほぼ全域にかけて検出された。本来は調査区全体に広がっていたと考えられる。　**重複**：水田と同時期のW － 9 号・10 号・12 号・15 号・27 号・31 号・38 号溝以外はすべて後世の遺構である。また、W -10 号・31 号溝以外の上記の溝は水田の畦畔を切っていた。　**地形**：前記のように水田面の第XII層上面は調査区西半では谷状地形となっており北西で標高 77.80 m、南端で 77.20 mであった。北東部は 78.00 mほどと高くなっていた。　**畦畔**：調査区の中央西寄り X213 ライン付近に**1 号南北大畦畔**（第 14・16 図）が検出された。B区の 1 号南北大畦畔の北側延長部分にあたる。中央の削平を受けた部分では確認できなかったが、北半側 Y27 ～ 36 で 35.5 m、南半側 Y50 ～ 56 で 26 mが検出された。北半側はほぼ南北方向の走行であるが、南半側は谷部にあたるためか東に振れた走向であった。幅は北半側の 1.4 mが最も広く、南半側の 49cm が最も狭い。高さは最も高い部分でも 5.8cm ほどであった。北半側 Y31 には水口３が検出され、その南の畦畔上には小角礫（S － 8）が 1 点埋もれていたが、掘り込みなどは確認されなかった。またこの付近には人の足跡が点在していたが、規則性はみられなかった。調査区東辺部の X225 ライン付近では、北の Y34 ～ 36（第 14 図）と南端の Y59（第 16 図）の２か所で南北方向の規模の大きい畦畔が検出された。北の部分は南側は削平されていたが長さ 12 mまで残存していた。最大幅が 1.4 mで高さは 9 cm 弱の規模があった。また南の部分では検出長は３m弱で、最大幅が 1 mほどであった。北側は削平を受けており、南は途切れていて延長部は検出されなかった。これらは部分的でもあったため調査時点では認識し得なかったが、大畦畔と考えられ**2 号南北大畦畔**とした。調査区の中央部では、西の谷部側 Y46 ライン付近で**3 号東西大畦畔**（第 15 図）が検出されたが、東側はすでに削平されていて不明であった。検出長は 20.5 mでほぼ東西方向に走り、幅は最大部で 2.6 m、高さも最高 8.6 ｃmと大規模であった。畦畔の中央にはA s- B層に直接覆われたW -10 号溝が走っていた。この延長上の調査区東端 X219 付近では同じくA s- B層で埋没したW -31 号溝が検出されており、東西大畦畔に伴っていたものと考えられる。小畦畔は谷部で検出されたものは比較的高さが残っていた。畦畔の盛り土は水田面と同じ第XII層（黒色粘質土層）であった。断面図 M-M’（X222、Y37）の部分では畦畔内に小礫（S － 9）が埋まっていた。　**区画**：区画全体が捉えられた水田面は数枚程度であった。区画の形態は 3 号東西大畦畔を挟んで南北で大きく異なっていた。北半部は小畦畔が東西・南北方向を指向しており、比較的整然とした長方形の区画が連続していた。南半部は不明な部分が多いが小畦畔の走向の乱れが著しく、不定形な区画が連続していたとみられる。区画自体にはさほど狭小な水田は認められなかった。水田面の状況は、浅く小さな窪みが群在する程度の比較的平坦なものが多かったが、南半部の中央付近では凹凸の顕著な部分が認められた。またこの部分では鉄分の沈着によるものか、水田面の第XII層上面が茶褐色を呈している状況が認められた。　**水口**：全体に９カ所（水口１～９）で検出された。水口５（X220、Y38）では北西から南東の区画へ流下させていた。　**遺物**：調査区の北辺部で、水田上面から土師質土器皿（第 30 図）の破片が出土した。

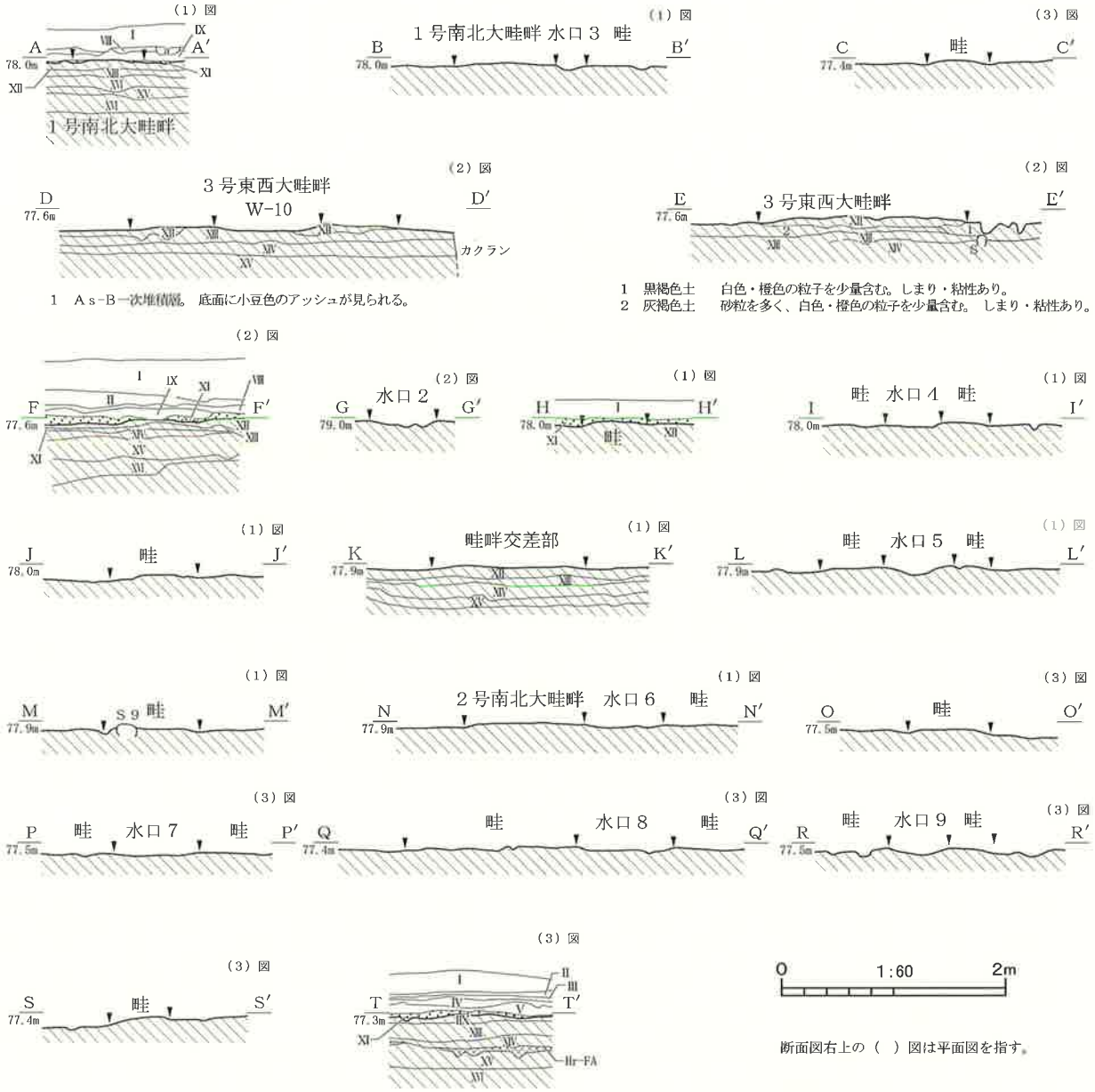


第 14 図　C 区平安時代以降全体図及び断面図（1）



第15図　C区平安時代以降全体図及び断面図（2）

第16図　C区平安時代以降全体図及び断面図（3）



第17図　Ｃ区Ａs-Ｂ下水田断面図

2　土　坑

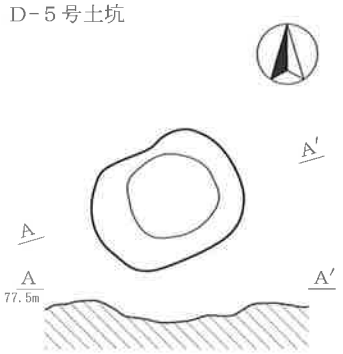
Ｄ－５号土坑　（第18図、ＰＬ.10）

位置：調査区中央の西辺、X211、Y47で検出された。　**重複**：Ａs-Ｂ下水田面を切っている。　**規模・形態**：平面は隅丸長方形状で、東西の最長部が80cm、南北60cm、深さは13cmほどである。断面形は皿状で、底面にはやや凹凸が目立った。　**埋没状態**：埋土はＢ軽石を多量に含む灰褐色土であった。　**時期**：埋土の状況から、中世とみられる。

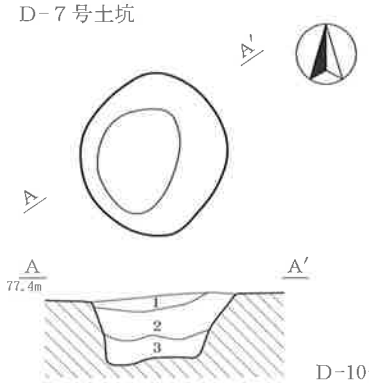
Ｄ－７号土坑　（第18図、ＰＬ.10）

位置:調査区の南西部、X212、Y57で検出された。　**重複**:Ａs-Ｂ下水田面を切っている。　**規模・形態**:長円形で、南北の最長部が87cm、東西は77cmほどである。深さは36cmほどあり、やや上部が開く円筒状の断面形であった。**埋没状態**：埋土はＢ軽石中に暗褐色土のブロックを少量含むものであった。　**時期**：埋土の状況から、平安末から中世とみられる。

D－5号土坑

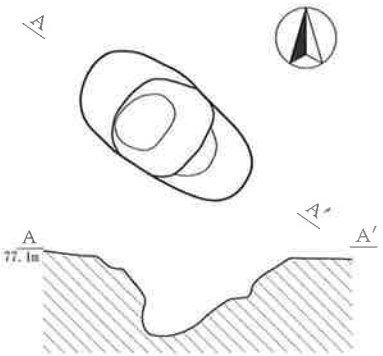


D－7号土坑

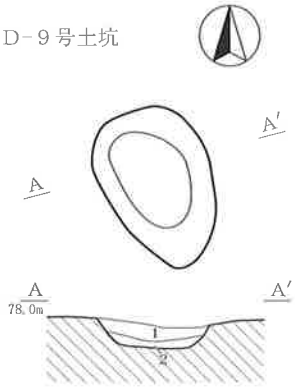


1　褐灰色土　Ａｓ－Ｂに暗褐色土ブロック多量、黄褐色土ブロック少量含む。しまりややあり。粘性やや弱。
2　褐灰色土　Ａｓ－Ｂに暗褐色土ブロック中量含む。しまりややあり。粘性やや弱。
3　褐灰色土　Ａｓ－Ｂ主体。暗褐色土ブロック小量含む。しまりややあり。粘性やや弱。

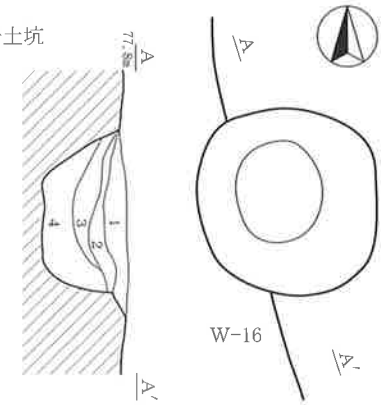
D－8号土坑



D－9号土坑

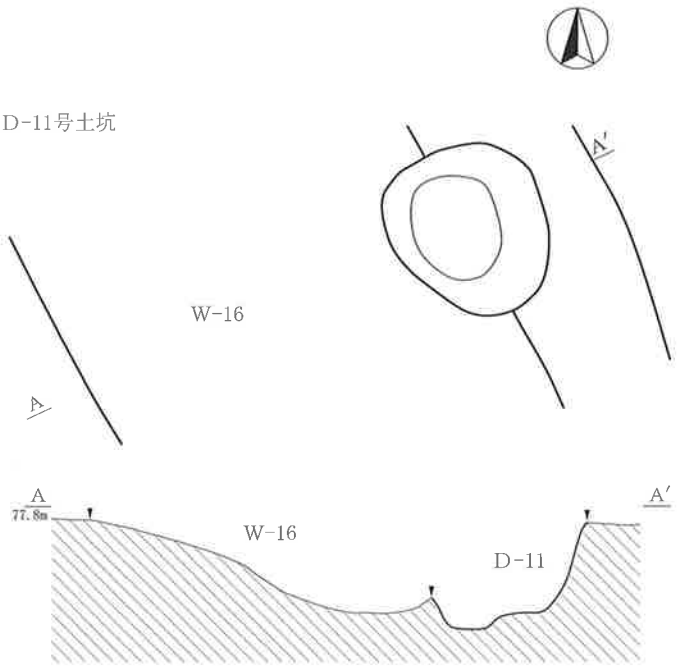


D－10号土坑

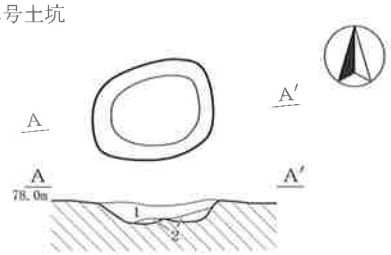


1　黄褐色土　Ａｓ－Ｂ多量。鉄分沈着。しまりややあり。粘性弱。
2　褐灰色土　Ａｓ－Ｂ主体に灰黄褐色粘質土ブロックを多量に含む。鉄分沈着。しまりややあり。粘性弱。
3　褐色粘質土　Ａｓ－Ｂ多量、暗褐色土ブロック小量含む。しまり・粘性あり。
4　褐灰色土　Ａｓ－Ｂ主体に褐灰色粘質土ブロックを小量含む。しまり・粘性弱。

D－11号土坑

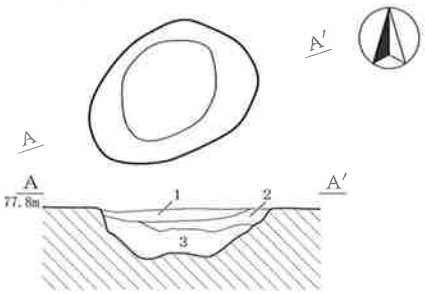


D－12号土坑



1　黒褐色土　Ａｓ－Ｂ主体。鉄分沈着。しまり・粘性弱。
2　褐灰色土　Ａｓ－Ｂ多量、褐灰色土多量に含む。しまり・粘性ややあり。

D－13号土坑



1　暗褐色土　Ａｓ－Ｂ・黄褐色土ブロックを多量に含む。しまりややあり。粘性弱。
2　褐灰色土　Ａｓ－Ｂ多量、黄褐色土ブロックを少量含む。しまり・粘性ややあり。
3　褐色粘質土　Ａｓ－Ｂ中量、黄褐色土ブロックを小量含む。しまりややあり。粘性やや弱。

0　1:40　1m

第18図　Ｃ区土坑

Ｄ－８号土坑　（第18図、ＰＬ.10）

位置：調査区の南西端、X215、Y61で検出された。　**重複**：洪水層とみられる黄灰褐色シルト質土で埋まった窪みの下部で検出され、Ａs-Ｂ下水田面を掘り込んでいた。　**規模・形態**：上面は長円形であったが、二段掘り状になっており、内部は円形を呈する。上面の長径が88cm、内部の円形部の径が47cm、最深部が42cmほどを計る。断面形は上部は皿状で、下部はＵ字状で斜めに掘り込まれていた。底面はやや凹凸が見られた。　**埋没状態**：Ｂ軽石を多量に含んだ埋土であった。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

Ｄ－９号土坑　（第18図、ＰＬ.10）

位置：調査区の北西部、X211、Y28で検出された。　**重複**：Ｗ-19号溝を切っていた。　**規模・形態**：倒卵形の平面で、南北の最長部が87cm、深さは15cmほどである。断面形はなべ底状を呈する。　**埋没状態**：Ｂ軽石を多量に含む埋土であった。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

Ｄ-10号土坑　（第18図、ＰＬ.10）

位置：調査区北西端のX207、Y28で検出された。　**重複**：Ｗ-16号溝の肩部を切っていた。　**規模・形態**：やや不整な円形で、径１ｍ前後を計る。深さは45cmほどで、断面形は上部が開き気味の円筒状であった。　**埋没状態**：埋土は、Ｂ軽石が主体のものであった。わずかに湧水がみられた。　**時期**：埋土の状況から、平安末から中世とみられる。

Ｄ-11号土坑　（第18図、ＰＬ.10）

位置：調査区北西部のX210、Y32で検出された。　**重複**：Ｗ-16号溝の肩部を切っていた。　**規模・形態**：平面形は倒卵形状で、最長部が94cm、深さは55cmほどであった。円筒状の断面形で、底面はやや凹凸が見られた。**埋没状態**：埋土はＤ-10号土坑と同様で、Ｂ軽石を主体とする状況であった。やはりわずかに湧水があった。規模・形態も含め前記のＤ-10号土坑と非常に似た様相であり、Ｗ-16号溝との位置関係も合わせ考えると、この２基は湧水量の多いＷ-16号溝を利用した水溜めの目的であったものではないかと考えられる。後述するＩ－１号井戸も規模はやや大きいが同様の立地形態である。灌漑用の簡易な貯水穴とみられる。　**遺物**：混入の土師器小片が少量出土している。　**時期**：埋土の状況から、平安末から中世とみられる。

Ｄ-12号土坑　（第18図、ＰＬ.10）

位置：調査区北東部のX220、Y29で検出された。　**重複**：Ａs-Ｂ下水田面を切っている。　**規模・形態**：隅丸長方形状の平面形で、長辺が65cm、深さは14cmほどを計る。皿状の断面形で、底面には凹凸が見られた。　**埋没状態**：埋土中にはＢ軽石を多く含んでいた。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

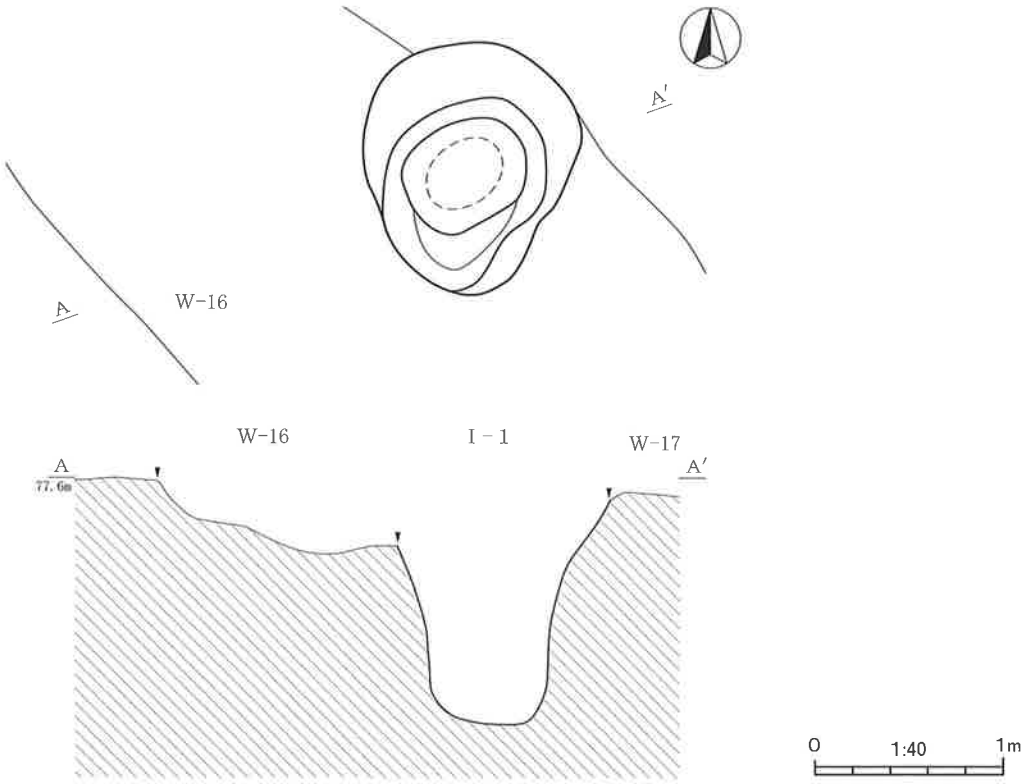
Ｄ-13号土坑　（第18図、ＰＬ.11）

位置：調査区中央の東辺、X218、Y44で検出された。　**重複**：削平を受けている部分であったが、Ａs-Ｂ下水田面を切っていたと考えられる。　**規模・形態**：倒卵状の平面形で、長径93cm、深さは25cmほどを計る。上部が開き気味の円筒状の断面形を呈する。底面にはやや凹凸がみられた。　**埋没状態**：埋土中には多量のＢ軽石を含んでいた。**遺物**：混入の土師器小片が数点出土している。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

３　井戸跡

Ｉ－１号井戸跡　（第19図、ＰＬ.11）

位置：調査区中央部のX216、Y47で検出された。　**重複**：Ｗ-16号溝と重複するが新旧関係は不明。　**規模・形態**：小規模な素掘りの井戸で、平面形は円形、断面形は上部がゆるやかに開き、下部は円筒形の漏斗状であった。上面はＷ-16号溝の肩部との重複のため明確ではないが径1.4ｍほどあったものと考えられる。底面は径40cmほどで、ほぼ平坦であった。深さは1.2ｍで、湧水はあるものの少量で底面から20cm程度の滞水量であった。現状では常時頻繁に生活に使用できる状態ではなかった。重複するＷ-16号溝との位置関係や埋土の状況からみ



第19図　C区井戸跡

ると、上流側で湧水がありある程度の水流があったとみられるW－16号溝から引水・貯留して、灌漑用に利用していた可能性が考えられる。　**埋没状態**：B軽石を多量に含む埋土が主でW－16号溝の埋土と同様であり、同時に存在した可能性がある。　**遺物**：混入の土師器小破片が数点出土したのみである。　**時期**：埋土の状況から、As－B降下からあまり時を経ない平安末から中世の開削とみられる。

4　溝　跡

W－7号溝跡　（第14・15・16・20図、PL.11）

位置：調査区西半部で、Y31からY54にかけて検出された。　**重複**：As－B下水田、X－1号窪地を切り、W－11号溝に切られていた。　**規模・形態**：北北西から南南東方向に、やや屈曲部分もあるが直線的に走り、長さ98mが検出された。北端は調査区外へ続いており、南端は攪乱のため不明確であったがX－2号窪地に接続して終わっていたとみられる。上幅は50～60cm、深さ3～7cmほどで、断面形は皿状である。底面は細かい凹凸が目立った。底面の比高は南端側で30cmほど低かった。　**埋没状態**：B軽石を多量に含む埋土であった。

遺物：混入品の土師器・陶器の小片が数点出土した。　**時期**：埋土の状況から、平安時代末から中世とみられる。

W－8号溝跡　（第14・20図、PL.11）

位置：調査区北半の西側、X210～211、Y36～39で検出された。　**重複**：As－B下水田面が削平されている部分であったが、これを切っていたとみられる。　**規模・形態**：北北西から南南東方向に、長さ約11mが検出され、両端は浅くなって終わっていた。上幅40～50cm、深さ10cm前後を計り、U字状の断面形である。　**埋没状態**：埋土中にはB軽石を多量に含んでいた。　**遺物**：混入品の土師器小片が数点出土した。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

Ｗ－９号溝跡　（第14・15・20図、ＰＬ.11）

位置：調査区北半の西辺、X208・209、Y37～44にかけて検出された。　**重複**：Ｘ－１号窪地と同時期で、Ｂ下水田の畦畔を切っており、Ｗ－７号溝に切られていた。　**規模・形態**：Ｘ－１号窪地から派生して、直線的に長さ29ｍほど南下し、調査区外へ続いている。北端側はＸ－１号窪地との関係からか幅４ｍほどの広さがあるが、急速に狭まって60cm～１ｍの幅となっていた。深さは北端部で10cm強で、南端は８cmほど、断面形は浅い皿状である。北端と南端の底面は比高差10cmほどで、全体としては南に下がっていた。　**埋没状態**：Ａｓ－Ｂの降下で直接埋没しており、底面には水田面と同様に小豆色の灰層が認められた。　**時期**：平安時代末。

Ｗ-10号溝跡　（第15・17図、ＰＬ．８）

位置：３号東西大畦畔の中央部に検出された。　**重複**：Ｗ－７号溝に東端部をわずかに切られていた。　**規模・形態**：３号東西大畦畔の検出範囲の西半部にのみ存在し、東半部には認められなかった。西側は調査区外へ延びていく。検出長は９ｍで、上幅は75cm～1.2ｍ、深さは最深部で８cmほど、断面形は皿状を呈する。　**埋没状態**：Ａｓ－Ｂで直接埋没していた。　**時期**：埋土の状況から平安時代末である

Ｗ-11号溝跡　（第15・20図、ＰＬ.11）

位置：調査区中央部X212～217、Y48・49にかけて検出された。　**重複**：Ａs-Ｂ下水田や、Ｗ－７号・13号・16号・33号溝を切っていた。　**規模・形態**：東北東から西南西の走向で、北へわずかに湾曲している。約23ｍの長さが検出され、東端はＷ-16号溝に接する部分からはじまり、西端は徐々に浅くなって消えていた。上幅は出入りが多く50cm～１ｍほどで、深さはＷ-16号溝に接する部分へ深くなり30cmほどであった。断面形はＵ字形で、底面の比高差は約20cmあった。　**埋没状態**：埋土はＢ軽石を多量に含み、最下部には砂層が認められた。水路と考えられる。　**遺物**：混入の土師器小片が｜数点出土した。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

Ｗ-12号溝跡　（第15・16・20図、ＰＬ.11）

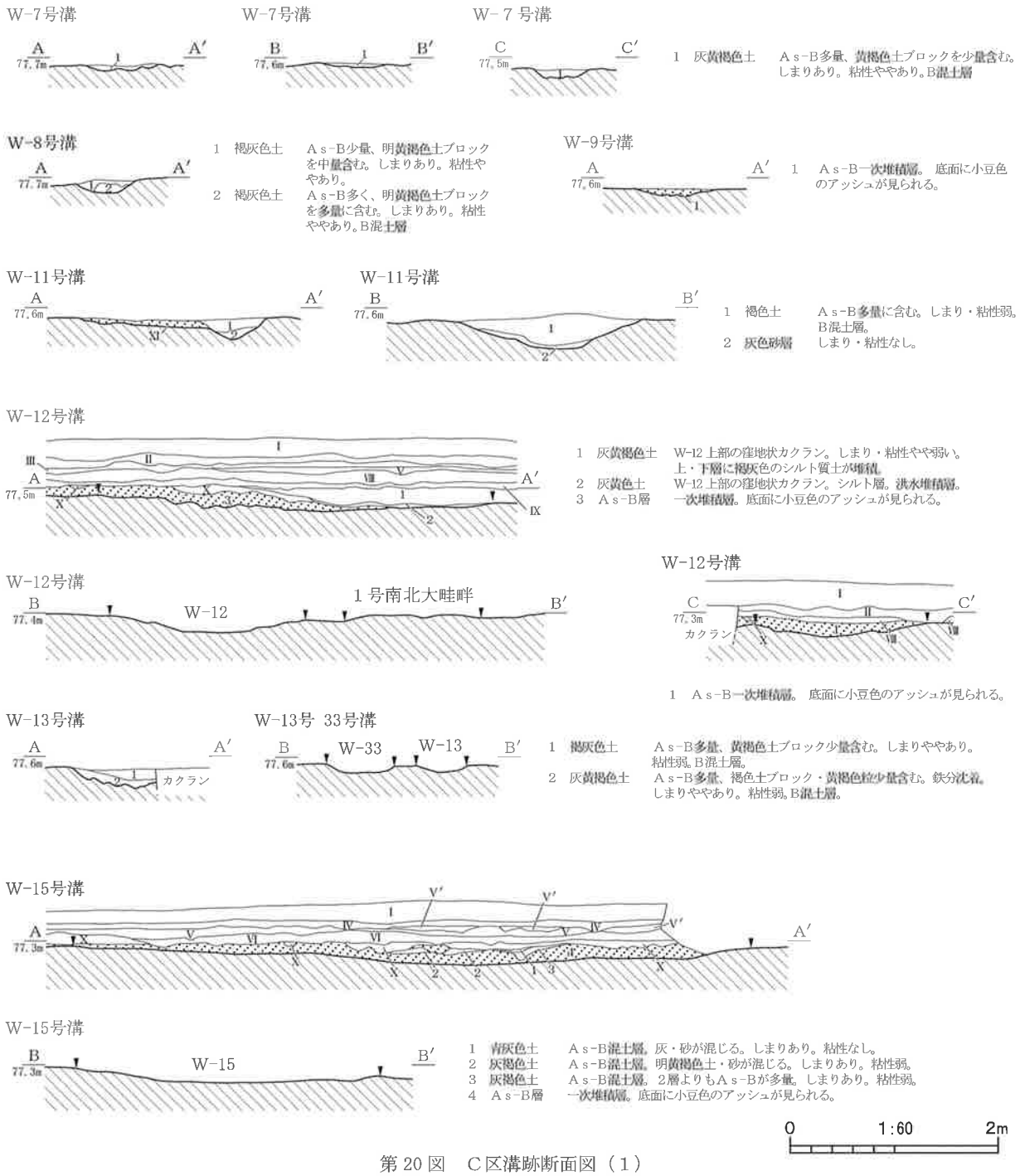
位置:調査区南半の西辺、X210～214、Y47～60で検出された。　**重複**:Ａs-Ｂ下水田の畦畔を切っていた。　**規模・形態**：北北西から南南東の走向で、南端部は西へ折れて調査区外へ続く可能性がある。検出長は56ｍであった。全体には直線的であったが、部分的に出入りの多い不整な形態で、上幅は1.5m～3.4ｍ前後であった。深さも場所により５～20cmほどと一様ではなく、断面形は非常に浅い皿状であった。底面の比高差は南端が20ｃｍほど低くなる程度であった。　**埋没状態**：全体がＡs-Ｂの降下で埋没しており、底面には降下当初の火山灰が認められた。　**時期**：埋没状況から平安時代末である。

Ｗ-13号溝跡　（第15・16・20図、ＰＬ.11）

位置：調査区中央部から南半部の東辺、X215～228、Y45～58にかけて検出された。途中一部は削平を受けて消滅していた。　**重複**：Ａs-Ｂ下水田を切り、Ｗ-11号・35号・39号溝に切られている。　**規模・形態**：Ｗ-16号溝との接点から南東方向に調査区南半を縦断し、さらに調査区外へ延びていた。検出長は77ｍほどであった。規模は北端では10ｃｍ弱と浅く、南東へ向かって拡大し、上幅は1.1ｍ、深さ20cmほどとなっていた。断面形は皿状で、底面は凹凸が目立っていた。　**埋没状態**：埋土中には多量のＢ軽石を含んでいた。　**遺物**：北半部からは土師器や須恵器の小片が20点ほど、南半部からは多量の土師器片が出土したが、いずれも混入によるものであった。　**時期**：埋土の状況から、平安末から中世とみられる。

Ｗ-14号溝跡　（第16図、ＰＬ.12）

位置：調査区南半のX216～218、Y51～53で検出された。　**重複**：Ｘ－２号窪地を切っている。　**規模・形態**：北東から南西方向に、現代の攪乱溝に沿うように弧状に走っており、両端は徐々に浅くなって消滅していた。検出長は約17ｍで、上幅は約50cm前後、深さは最深部で10cm前後と小規模であった。断面形は皿状で、底面は凹凸がみられた。　**埋没状態**：埋土はＢ軽石を多く含んでいた。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。



第20図　C区溝跡断面図（1）

W-15号溝跡　（第16・20図、PL．12）

位置：調査区南西端部X216・217、Y61で検出された。　**重複**：北端は、後世の洪水層とみられる黄灰褐色のシルト質土で埋まった窪みに切られていた。　**規模・形態**：西北西のW-12号溝の方向から南東に向かう走行で、9mほどまで検出され南端は調査区外へ延びていた。不整な形態で上幅は2.5～4mほど、深さは南へ深くなり最深部で20cmほどであった。断面形は皿状を呈していた。　**埋没状態**：全体がAs-Bの降下で埋没していた。規模・形態も合わせみてW-12号溝と同種の遺構と考えられる。　**時期**：埋土の状況から平安末である。

W-16号溝跡　（第14・15・16・21図、PL．6・11・12・15）

位置：調査区の北西端から南東端X207～227、Y27～57にかけて、調査区を縦断して検出された。　**重複**：3号東西大畦畔を切り、W-17号・18号溝に切られている。　**規模・形態**：北西から南東へ、途中二度屈曲しな

がら東へ湾曲して走っていた。両端はさらに調査区外へ続いていた。約 152 mの長さが確認できたが、半分以上は底面まで検出できなかった。上幅は北端部が最大で 2.5 m、南端部では 1.5 mほどとなっていた。深さはほぼ一定で 1 mほどであった。調査区北壁の土層断面では、掘り込み面は第XI層よりも上層であることが知られた。断面形は二段掘り状で、上部は大きく広がり、下部は幅広のU字状を呈していた。北端部付近（X207 ～ 210・Y27 ～ 34）ではゆるやかにS字状に屈曲しており、この付近では底面から湧水がみられた。調査区中央付近（X215 ～ 272・Y46 ～ 51）の屈曲部では溝幅が広がり、枝分かれ上の突出部が確認された。この突出部基部の底面には西壁側に 15cm 内外の礫 4 点が並び置かれた状態で検出された。簡易な堰のような構造物が設けられていた可能性がある。突出部は急激に浅くなり、南方へは続かなかった。本溝跡は、西側の谷部と東側の微高地の地形の変換線に掘鑿されており、調査地内で最大の規模の溝跡であり、後世のW -17 号溝が全く走行を同じくしていることや、東西方向の溝跡がいずれも本溝跡を起点あるいは終点としているとみられることから、その後の土地利用において重要な基準となったものであることがうかがえる。 **埋没状態**：断面の観察から少なくとも 1 回以上は掘り直しが行われたとみられる。埋土はB軽石を主体とする土層で、下層には流砂層の堆積がみられ水路跡と考えられた。 **遺物**：北端部では土師器や陶器の小片が少量、中央部では土師器破片が多数、東端部では土師器と陶器などの破片が多数出土している（第 31 図）が、土師器については混入品であった。 **時期**：埋土や遺物の状況から平安末から中世とみられる。

W -17 号溝跡 （第 14・15・16・21 図、ＰＬ． 6 ・11・12・15）

位置：調査区の北西端から南東端、X208 ～ 227、Y27 ～ 56 にかけて、W -16 号溝と並走して調査区を縦断していた。 **重複**：W -40 号溝に切られ、Ａs- Ｂ下水田の畦畔、W -16 号・18 号・20 号・24 号・26 号・30 号・32 号溝を切っていた。 **規模・形態**：2 か所の屈曲部分も含めてW -16 号溝と全く併行の走向で、検出長も同じく 152 mである。底面までの掘り下げは部分的にとどまった。数回の掘り直しが行われたようで、最終的な掘り込み面は第Ⅳ層か第Ⅲ層であった。掘り込み面での上幅は北端部では 2 m近い幅であった。深さも北端部が深く約 1 mで、南端部では 50 cmほどであった。断面形は二段掘り状で、上部は漏斗状に開き下部は浅いU字形であった。 **埋没状態**：Ａ軽石を多量に含む埋土であった。 **遺物**：北端部では土師器、須恵器、軟質陶器や陶器の破片が少量し、明治 15 年の銅貨も出土した。中央部では土師器片が多数、陶磁器片（第 31 図）が少量出土し、東端部では陶器片が少量出土している。土師器や須恵器片は混入品であった。 **時期**：埋土や遺物の状況から近世から近代とみられる。

W -18 号溝跡 （第 14・15・16・21 図、ＰＬ．12）

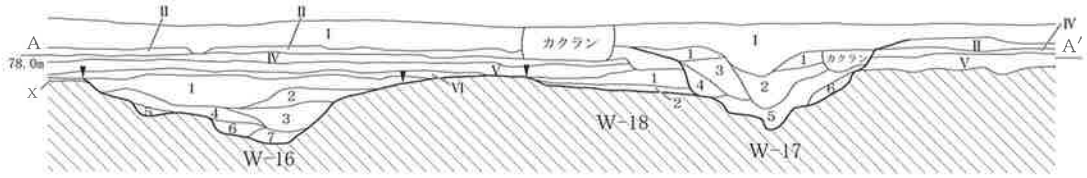
位置：調査区の北西端から南東、X207 ～ 223、Y27 ～ 54 にかけて、W -16 号・17 号溝の間を中心に検出された。 **重複**：W -16 号溝を切り、W -17 号溝には切られていた。 **規模・形態**：非常に浅く、西壁側がかろうじて残っていた程度のため不明な点が多い。東壁側はW -17 号溝とほぼ重なっていたとみられる。深さは最深部でも 10cm 程度であった。断面形は浅い幅広の形だが、西壁側の立ち上がりは明瞭であった。溝跡とするにはやや不明確であったが、W -16 号・17 号溝に併行していることから溝とした。 **埋没状態**：埋土はＢ軽石を多く含み、固く締まった土層であった。 **遺物**：北端部では土師器、軟質陶器、陶磁器の破片（第 31 図）が多数出土し、中央から南半部では土師器片多数と軟質陶器・陶磁器片が少量出土している。土師器については混入品であった。

時期：埋土や遺物の状況から、中世から近世にかけてとみられる。

W -19 号溝跡 （第 14・21 図、ＰＬ．12）

位置：調査区北辺部の X208 ～ 223、Y27 ～ 30 で検出された。 **重複**：Ａs- Ｂ下水田の畦畔を切り、W－ 17 号・21 号溝に切られている。 **規模・形態**：Ｔ字形に、東西方向に屈曲気味に走る部分とそれに直交する南北方向の部分からなる。東西方向は 55 m、南北方向は 11 mほどの長さが検出された。東端部と南端部は調査区外へ続く。上幅 25 ～ 45cm、深さは 10cm ほどと小規模で、断面形はU字状であった。底面は、全体としてはわずかに数cm西方へ下がるようであった。掘り込み面は第Ⅷ層よりも上位であった。 **埋没状態**：Ａｓ－Ｂを多く含む埋

W-16号・17号・18号溝



W-16 号溝

1　褐灰色土　B混土層、IX層に類似。
2　褐灰色土　B混土層。砂質。As-B少量、褐色土ブロック微量含む。しまりややあり。粘性弱。
3　灰黄褐色土　B混土層。砂質。As-B中量、黄褐色土ブロック多量に含む。しまりややあり。粘性やや弱。鉄分の沈着が少量見られる。
4　褐灰色土　As-B主体。暗赤灰色シルト少量、黄褐色土ブロック微量含む。しまりややあり。粘性弱。
5　褐灰色土　As-Bと褐色土ブロックの混土。しまりややあり。粘性やや弱。
6　褐灰色土　As-Bと褐色土ブロックの混土。しまりややあり。粘性弱。
7　褐灰色土　As-B主体の流砂層。しまり弱。粘性弱。

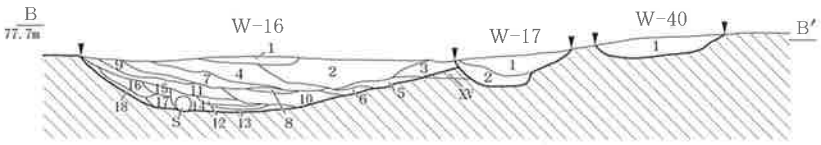
W-17 号溝

1　灰黄褐色土　As-A多量、黄褐色粒少量含む。しまりあり。粘性やや弱。
2　灰黄褐色土　As-A少量含む。しまり弱。粘性あり。
3　褐灰色土　As-A・褐色土少量含む。しまりやや弱。粘性やや弱。
4　灰黄褐色土　As-A・As-B・褐色土ブロック少量含む。しまりあり。粘性ややあり。
5　灰黄褐色土　As-A・As-B少量、褐色土ブロック多量に含む。しまりやや弱。粘性ややあり。
6　灰黄褐色土　As-A・黄褐色粒中量、頃褐色土ブロック少量含む。しまり・粘性あり。

W-18 号溝

1　灰黄褐色土　As-B・褐色土を多量に含む。しまりあり。粘性弱。
2　褐灰色土　As-B多量、黒褐色土ブロック少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

W-16号・17号・40号溝



W-16 号溝

1　褐灰色土　As-B中量含む。しまりあり。粘性ややあり。
2　灰黄褐色土　洪水層。As-B多量に含む。鉄分沈着。灰白色砂質土が帯状に入る。しまりあり。粘性ややあり。
3　褐灰色土　As-B多量に含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性弱。
4　灰黄褐色土　As-Bと灰白色砂質土が帯状に互層堆積。鉄分沈着。しまりあり。粘性弱。
5　褐灰色土　As-B・褐灰色粘質土多量、灰黄褐色砂質土少量含む。しまりあり。粘性弱。
6　褐灰色土　灰黄褐色砂質土少量含む。鉄分沈着。砂質土。しまり・粘性あり。
7　褐灰色土　As-Bと褐灰色砂質土の混土層。鉄分沈着。しまりあり。粘性弱。
8　褐灰色砂層　As-B少量含む。鉄分沈着。しまりややあり。粘性弱。
9　褐灰色土　As-B・褐灰色砂質土・灰黄褐色砂質土の混土層。しまりあり。粘性やや弱。
10　褐灰色土　As-Bと褐灰色粘質土が互層に堆積。しまりあり。粘性ややあり。
11　褐灰色土　As-B中に灰褐色砂質土を中量含む。鉄分沈着。しまり・粘性弱。
12　As-B流砂層　灰色軽石主体に、黄褐色軽石少量。
13　As-B流砂層　黄褐色軽石主体。
14　As-B流砂層　灰色軽石主体。
15　褐灰色土　As-Bと黄褐色砂質土の混土層。鉄分沈着。しまり・粘性弱。
16　灰黄褐色土　As-B主体に灰黄褐色砂質土が中量。しまりやや弱。粘性弱。
17　褐灰色土　15層に似るが、砂質土が少ない。鉄分沈着。しまり・粘性弱。
18　灰黄褐色土　砂質土にAs-B少量。しまりややあり。粘性弱。

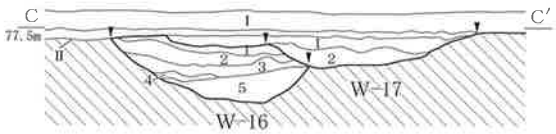
W-17 号溝

1　褐灰色土　As-A少量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性ややあり。
2　褐灰色土　As-A中量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性ややあり。

W-40 号溝

1　褐灰色土　As-A少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

W-16号・17号溝



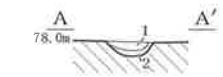
W-16 号溝

1　褐灰色土　As－B中量、黄褐色土少量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性ややあり。
2　褐灰色土　As－B多量、黄褐色土微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
3　黒褐色土　As－B中量含む。しまりあり。粘性ややあり。
4　黒褐色土　As－B中量、黄褐色土微量含む。しまりあり。粘性ややあり。
5　褐灰色土　As－Bと褐色土が互層に堆積。しまりややあり。粘性ややあり。

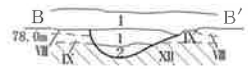
W-17 号溝

1　褐灰色土　As-A多量、黄褐色粒微量含む。しまりあり。粘性やや弱。
2　灰黄褐色土　As-A少量、As－B中量、黄褐色土少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

W-19号溝

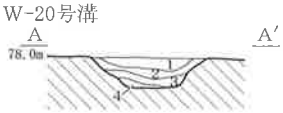


W-19号溝



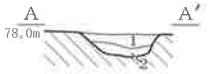
1　灰黄褐色土　As-B・黄褐色土ブロックを中量含む。しまりあり。粘性弱。
2　褐灰色土　As-B・黄褐色粒微量含む。しまり・粘性あり。

W-20号溝



1　褐灰色土　As-B多量、黄褐色粒少量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性やや弱。
2　褐灰色土　As-B中量、黄褐色土ブロック少量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性やや弱。
3　褐灰色土　As-B少量、黄褐色土ブロック少量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性やや弱。
4　褐灰色土　As-B少量、黄褐色土ブロック微量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性ややあり。

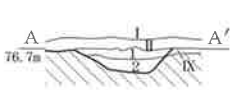
W-21号溝



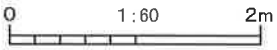
W-21号溝

1　暗褐灰色土　As-B中量、黄褐色粒少量含む。鉄分沈着。しまりややあり。粘性やや弱。
2　褐灰色土　As-B中量、黄褐色粒微量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性やや弱。

W-22号溝



1　褐灰色土　As-B中量、黄褐色粒少量含む。鉄分多量に沈着。しまり・粘性ややあり。
2　褐灰色土　As-B・暗褐灰色土ブロック・黄褐色土ブロック少量含む。鉄分沈着。しまりややあり。粘性弱。



第21図　C区溝跡断面図（2）

土であった。　**遺物**：土師器・須恵器の小片、軟質陶器・陶器の小片が少量出土したが、土師器・須恵器は混入による。　**時期**：中世とみられる。

W-20号溝跡　（第14・21図、ＰＬ．12）

位置：調査区北半のX211・212、Y32で検出された。　**重複**：Ａs-Ｂ下水田面を切って、W-17号溝に切られている。　**規模・形態**：東から西方向にほぼ直線的約８ｍが検出され、東端は調査区外へ延びていた。上幅１ｍ弱、深さ25cmほどの規模で、断面形は逆台形を呈する。底面はわずかに東へ下がる。　**埋没状態**：Ｂ軽石を多く含む埋土であった。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

W-21号溝跡　（第14・21図、ＰＬ．12）

位置：調査区北東部のX221～224、Y27～29で検出された。　**重複**：W-19号溝を切っている。　**規模・形態**：鍵形に南北・東西方向に走る。南北辺が９ｍ、東西辺が13.5ｍまで検出され、南端・東端ともに調査区外へ続いていた。上幅50～75cmで、深さは20cm前後であった。断面形は逆台形を呈する。底面は東西辺から南北辺へわずかに低くなっていた。　**埋没状態**：Ｂ軽石を多く含む埋土であった。　**遺物**：常滑大甕の小片のほか、混入の土師器小片などが数点出土した。**時期**：埋土や遺物の状況から中世とみられる。

W-22号溝跡　（第14・21図、ＰＬ．13）

位置：調査区北半部X223～225、Y35で検出された。　**重複**：Ａs-Ｂ下水田面を切っていた。　**規模・形態**：東西方向で10ｍ強の長さが検出され、両端は調査区外へ続いていた。西側はW-26号溝に連続する可能性がある。上幅50～60cmで、深さは20cm前後、断面は逆台形であった。掘り込み面は第Ⅸ層より上部であった。　**埋没状態**：Ｂ軽石を多く含む埋土であった。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

W-23号溝跡　（第14・22図、ＰＬ．13）

位置：調査区東辺のX226、Y36～38で検出された。　**重複**：W-24号溝とは同時期とみられる。　**規模・形態**：南北方向に約８ｍの長さが検出された。北端は調査区外へ延び、南端はW-24号溝に接続していた。上幅は50cm以上あり、深さは17cmほどとみられる。断面形は逆台形で、底面は南側へ傾斜していた。掘り込み面は第Ⅸ層より下であった。　**埋没状態**：埋土はＢ軽石を多く含んでいた。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

W-24号溝跡　（第14・15・22図、ＰＬ．13）

位置：調査区中央部のX214～226、Y38～41で検出された。　**重複**：W-17号溝に切られ、北壁側には段切り状の現代の溝が併行しており、上面が削平されていた。また、W-23号・29号溝とは一連の溝とみられる。

形態：屈曲しながら東西方向に走り、東端付近ではＴ字状に南へ細い枝溝が続いていた。検出長は直線で52.5ｍであった。西端はW-17号溝に切られて終わり、東端は調査区外へ続くようであった。上幅は場所により60cm～1.1ｍと幅があり、南の枝溝状の部分では20～30cmであった。掘り直しが行われているため、東半部は２条の溝が並走するような形となっていた。深さは最深部で16cmほどであった。底面は両端でほとんど標高差はなかった。掘り込み面は第Ⅹ層より上部であった。　**埋没状態**：埋土はＢ軽石を多く含んでいた。　**遺物**：東半部からは陶磁器片多数と、混入の土師器・須恵器小片数点が出土し、西半部では混入品の土師器・須恵器小片数点が出土した。　**時期**：埋土や遺物の状況から中世とみられる。

W-25号溝跡　（第14・15・22図、ＰＬ．13）

位置：調査区北半のX217～218、Y36～40で検出された。　**重複**：Ａs-Ｂ下水田面を切り、南端は攪乱の溝や試掘トレンチで切られていた。北端はW-26号・28号溝に接続しており同時期とみられる。　**規模・形態**：北北西から南南東の走向で、長さ15.5ｍ程が検出された。南端はW-24号溝に接続していたものとみられる。上幅が60～70cmほどで、深さは20～30cmを計る。断面形は幅広のＵ字状であった。底面は南端側が５cmほど低くなっていた。　**埋没状態**：埋土はＢ軽石を多く含んでいた。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

W-23号・24号溝

W-23 号溝
1　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ多、黄褐色粒中含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性やや弱。

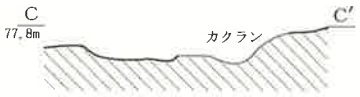
W-24 号溝
1　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ中量、灰黄褐色砂質土・黄褐色土ブロック少量含む。しまりあり。粘性やや弱。
2　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ中量、黄褐色土ブロック少量含む。しまりあり。粘性弱。
3　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ多量、黄褐色粒微量含む。しまりあり。粘性弱。
4　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ多量に含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性弱。

W-23号溝

W-24号溝

1　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ多量に含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性弱。

W-24号溝



W-25号溝

W-26号溝

W-26 号溝
1　灰黄褐色土　Ａｓ-Ｂ多量、黄褐色土ブロックを少量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性ややあり。
2　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ中量、黄褐色粒を少量含む。砂質土。鉄分沈着。しまり・粘性弱。

W-25 号溝
1　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ・褐色土ブロック・灰黄色土を中量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性やや弱。
2　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ多量、黄褐色粒を微量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性ややあり。

W-27号溝

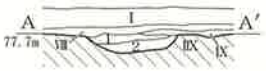
1　Ａｓ-Ｂ一次堆積層

W-27号溝

W-28号溝

1　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ多量、黄褐色土ブロックを少量含む。砂質土。鉄分沈着。しまりあり。粘性弱。
2　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ・灰色土ブロックを中量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性弱。

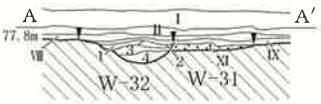
W-29号溝



1　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ多量に含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性弱。
2　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ主体に、灰黄褐色土ブロックを少量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性弱。

W-30号溝

W-31号・32号溝



W-31 号溝（３号東西大畦畔付随）
1　Ａｓ-Ｂ一次堆積層

W-32 号溝
1　灰褐色土　Ａｓ-Ｂを多量に含む。鉄分沈着。しまり・粘性弱。
2　灰褐色土　Ａｓ-Ｂ中量、灰黄褐粒を微量含む。しまりあり。粘性弱。
3　黒褐色土　Ａｓ-Ｂ多量、灰黄褐色粘質土ブロックを少量含む。しまりあり。粘性弱。
4　暗灰色土　Ａｓ-Ｂ主体。鉄分沈着。しまりあり。粘性弱。

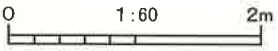
W-33号溝

1　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ多量、に含む。鉄分沈着。しまり・粘性弱。
2　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ中量、黄褐色土ブロック、黄褐色粒を少量含む。しまりあり。粘性ややあり。

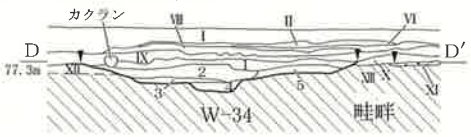
W-34号溝

W-34 号溝（B-B′）
1　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ主体に、褐灰色土ブロックを多量、灰黄褐色・黒褐色土を少量含む。鉄分の沈着が顕著。
2　灰褐色土　Ａｓ-Ｂ・黄褐色粒を少量含む。鉄分沈着。しまり・粘性ややあり。
3　褐灰色土　暗灰色のＡｓ-Ｂ主体。しまり・粘質弱。
4　褐灰色土　灰色のＡｓ-Ｂ主体。しまり・粘性弱。
5　褐灰色土　流砂層。Ａｓ-Ｂ主体に、黄褐色土ブロックを多量に含む。鉄分沈着。しまりややあり。粘性弱。
6　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ主体に、黄褐色土ブロックを中量、灰黄褐色土を少量含む。鉄分沈着。しまりややあり。粘性やや弱。
7　灰褐色土　流砂層。暗灰色と灰色のＡｓ-Ｂ主体。黄褐色土ブロックを中量含む。鉄分沈着。しまりややあり。粘質やや弱。

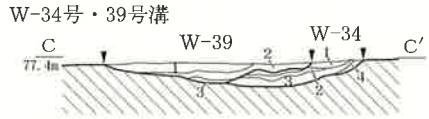
W-34号溝



W-34号溝（畦畔を含む）



W-34号・39号溝

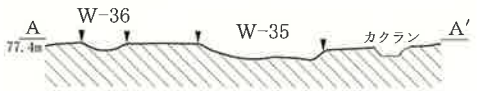


W-34 号溝（C-C′）
1　灰黄褐色土　Ａｓ-Ｂ中量、黄褐色土ブロックを多量に含む。しまり・粘性弱。
2　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ多量に含む。鉄分少量沈着。しまり・粘性弱。
3　灰褐色土　Ａｓ-Ｂ多量、白色粒少量含む。しまりややあり。粘性弱。
4　灰褐色土　Ａｓ-Ｂ少量含む。しまり・粘性やや弱。

W-39 号溝（C-C′）
1　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ・白色粒・黄褐色土小ブロックを中量含む。鉄分少量沈着。しまりあり。粘性弱。
2　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ中量含む。鉄分少量沈着。しまり・粘性弱。
3　灰褐色土　Ａｓ-Ｂ中量含む。しまり・粘性弱。

W-34 号溝（D-D′）
1　黄灰褐色土　Ａｓ-Ｂ中量、黄褐色土中量、白色粒微量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性弱。
2　灰黄褐色土　Ａｓ-Ｂ多量、白色粒微量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性弱。
3　褐灰色土　Ａｓ-Ｂと２層の混土。しまりあり。粘性やや弱。
4　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ多量に含む。しまりあり。粘性ややあり。
5　褐灰色土　Ａｓ-Ｂ多量、白色粒・黄褐色土を中量含む。鉄分沈着。しまりあり。粘性弱。

W-35号・36号溝



W-37号溝

W-38号溝

1　Ａｓ-Ｂ一次堆積層　底面に小豆色のアッシュ。

第 22 図　Ｃ区溝跡断面図（３）

W-26号溝跡　（第14・22図、ＰＬ.13）

位置：調査区北半のX213～218、Y36～38で検出された。　**重複**：Ａs-Ｂ下水田面とＷ-27号溝を切っており、Ｗ-17号溝に切られていた。Ｗ-25号・28号溝とは同時期とみられる。　**規模・形態**：東北東から西南西の走向で、25ｍの長さが検出され、東端は調査区外へ続いていた。東方で検出されたＷ-22号溝に連続するとみられる。上幅は西端が広めで1.1ｍほど、東端では80㎝ほどであった。深さは27㎝弱と一定していた。断面形は幅広のＵ字状を呈する。底面は西側へ10㎝ほど低くなっていた。　**遺物**：混入の土師器・須恵器小片が数点出土した。　**埋没状態**：埋土中にはＢ軽石を多く含んでいた。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

W-27号溝跡　（第14・22図、ＰＬ.13）

位置：調査区北半のX215・216、Y35～40で検出された。　**重複**：Ａs-Ｂ下水田の畦畔を切っており、Ｗ-26号溝に切られていた。　**規模・形態**：北北東から南南西方向に８ｍ走り、途中で南方に枝分かれして16ｍ続いていた。端部はすべて浅くなって消えていた。上幅は20～60㎝と幅があり、深さは最大でも５㎝程度であった。断面形は皿状で、底面には細かい凹凸が目立った。　**埋没状態**：Ａs-Ｂの降下で直接埋没していた。　**時期**：埋土の状況から平安時代末である。

W-28号溝跡　（第14・15・22図、ＰＬ.13）

位置：調査区北半のX217、Y35・36で検出された。　**重複**：Ａs-Ｂ下水田面を切っていた。南端部が接続するＷ-25号・26号溝とは同時期とみられる。　**規模・形態**：北北西から南南東の走向で、５ｍの長さで検出された。北端は調査区外へ延びていく。上幅は90㎝内外、深さは20㎝ほどであった。断面形は幅広のＵ字状を呈する。

埋没状態：埋土中にはＢ軽石を多く含んでいた。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

W-29号溝跡　（第15・22図、ＰＬ.13）

位置：調査区中央付近のX219、Y41～43で検出された。　**重複**：北端が接続するＷ-24号溝と同時期とみられる。**規模・形態**：北北西から南南東方向の走向で、12ｍの長さが検出された。南端は調査区外へ延びていた。規模は上幅が80㎝前後で、深さは10㎝内外であった。断面形は逆台形で、底面の比高差はほとんどなかった。掘り込み面は第Ⅸ層より下であった。　**埋没状態**：埋土はＢ軽石を多く含んでいた。　**遺物**：土師器・軟質陶器・陶器片が数点ずつ出土した。　**時期**：埋土や遺物などの状況から中世とみられる。

W-30号溝跡　（第15・22図、ＰＬ.14）

位置：調査区中央部のX216～218、Y45・46西側付近で検出された。　**重複**：Ｗ-17号溝に切られ、Ｗ-31号溝を切っていた。　**規模・形態**：西北西から東南東方向に10ｍが検出され、東端は調査区外へ続いていた。上幅が1.6～1.9ｍ、深さは15㎝ほどで、断面形は皿状であった。底面は平坦であった。　**埋没状態**：埋土はＢ軽石を多く含むものであった。　**遺物**：土師器小片多数と陶器片数点が出土した。　**時期**：埋土の状況や遺物から中世とみられる。

W-31号溝跡　（第15・22図、ＰＬ.14）

位置：調査区中央部のX218・219、Y46で検出された。　**重複**：Ｗ-30号・32号溝に切られていた。　**規模・形態**：東西方向で3.4ｍほどの検出長であった。上幅が70㎝、深さは５㎝程度で、断面形は皿状であった。西の延長方向にＷ-10号溝及び３号東西大畦畔が位置する。　**埋没状態**：Ａs-Ｂ降下層に直接埋没していた。　**時期**：埋土の状況から平安時代末であり、位置から３号東西大畦畔の中央を走るＷ-10号溝の延長部と考えられる。

W-32号溝跡　（第15・22図、ＰＬ.14）

位置：調査区中央部のX217～219、Y46で検出された。　**重複**：Ｗ-17号・40号溝に切られ、Ｗ-31号溝を切っていた。　**規模・形態**：西北西から東南東方向に10ｍまで検出され、東端は調査区外へ続いていた。上幅が30～50㎝、深さは最深で15㎝ほどで、断面形はＵ字状であった。掘り込み面は第Ⅷ層より下位であった。　**埋没状態**：埋土中にはＢ軽石を多く含んでいた。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

W-33 号溝跡　（第 15・16・22 図、ＰＬ．14）

位置：調査区中央から東半部の X216 ～ 222、Y47 ～ 54 で検出された。　**重複**：W -11 号溝に切られていた。

規模・形態：W -13 号溝の北端付近から枝分かれして南東方向に走り、W -34 号溝に接して終わっていた。途中一部が削平のため消失していたが、38 mの長さが検出された。上幅 30 ～ 75 cm、深さは最深部で 15 cmほどであった。断面形はU字状を呈し、底面は南端側へ 10 cmほど下がっていた。　**埋没状態**：埋土はＢ軽石を多量に含むもので、W -13 号溝と共通であった。　**遺物**：土師器小片が多数出土したが、すべて混入品である。　**時期**：埋土の状況から平安時代末から中世とみられる。

W-34 号溝跡　（第 16・22 図、ＰＬ．14）

位置：調査区東半部の X216 ～ 227、Y54 ～ 60 で検出された。　**重複**：Ａs- Ｂ下水田面を切っており、W -35 号・36 号・39 号溝には切られていた。　**規模・形態**：西南西から東北東方向に 24 m走り、南東方向に折れて 30 mの長さまで検出された。南端は調査区外へ続いていた。規模は北辺側がやや小規模で上幅 70 ～ 1.1 m、深さ 20 cmほど、東辺側南端では幅 1.9 m、深さ 17 cmほどであった。断面形は、南端付近では二段掘り状であったが、その他では浅いU字状であった。北辺から東辺の屈曲部はゆるやかな曲線で、幅が広くやや深くなっていた。東辺の屈曲部寄りの部分では、やはり長さ４mほどに亘って幅が広く、深さ 30 cm以上となっている部分が検出され、さらに南には直交して長さ４m、最深部が 35 cmほどの土坑状の部分が検出された。埋土の様子からは同時期とみられた。掘り込み面は第Ｘ層の上部からであった。　**埋没状態**：埋土中には多量のＢ軽石を含んでいた。　**遺物**：土師器小片が多数出土したが、すべて混入によるものであった。　**時期**：埋土の状況などから中世とみられる。

W-35 号溝跡　（第 16・22 図、ＰＬ．14）

位置：調査区東半部の X216 ～ 224、Y54 ～ 57 で検出された。　**重複**：W -13 号・16 号・34 号溝を切り、W -37 号溝に切られていた。　**規模・形態**：北西から南東方向に走り、鍵形に屈曲して湾曲しながら北東方向へ続いていた。西辺側は 20 m、南辺側が 22 m検出され、東端部はW -16 号溝に接して終わっていた。最大幅は 1.6 m、最小部で 90 cmほど、深さは最深部で 17 cmほどであった。断面形は皿状で底面はほぼ平坦であった。底面の標高は南辺の東端側が高くなっていた。　**埋没状態**：埋土はＢ軽石を多く含むものであった。　**遺物**：土師器小片が多数出土したが、混入によるものであった。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

W-36 号溝跡　（第 16・22 図、ＰＬ．14）

位置：調査区東半部の X218 ～ 220、Y56 ～ 58 で検出された。　**重複**：W -35 号溝を切っていた。　**規模・形態**：W -35 号溝の西側に沿って 50 cmほどの間隔を取りながら、北西から南東方向に直線的に走り、東へ屈曲してW -35 号溝に接して終わっていた。11 mの長さが検出された。上幅 20 ～ 35 cm、深さ 10 cm以下の規模で、浅いU字状の断面形であった。　**埋没状態**：埋土中にはＢ軽石が多く認められた。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

W-37 号溝跡　（第 16・22 図、ＰＬ．15）

位置：調査区東半部の X220 ～ 223、Y56 ～ 60 で検出された。　**重複**：W -35 号溝を切っていた。　**規模・形態**：W -35 号溝の南辺部と重複し北東から南西に 13 m走り、鋭角に折れて南東方向に 19 m続いていた。南端はW -39 号溝に接して終わっていた。上幅は 30 ～ 50 cm、深さは最深部で 20 cm弱であった。断面形は浅いU字状であった。底面の標高は北辺が低くなっていた。　**埋没状態**：埋土中にはＢ軽石を多く含んでいた。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

W-38 号溝跡　（第 16・22 図、ＰＬ．15）

位置：調査区南端部 X220 ～ 223、Y59 ～ 61 で検出された。　**重複**：Ａs- Ｂ下水田の畦畔を切っていた。　**規模・形態**：西南西から東南東方向に、やや屈曲しながら 16 mほどが検出された。南端は調査区外へ延びていた。上幅は 50cm 前後であるが不整で、深さは最深部でも 6 cmほどであった。底面は細かい凹凸が顕著であった。　**埋**

没状態：Ａs-Ｂの一次堆積で埋没している状態であった。　**時期**：埋土の状況から平安時代末である。

Ｗ-39号溝跡　（第16・22図、ＰＬ.14・15）

位置：調査区東南端のX223～227、Y56～61で検出された。　**重複**：Ａs-Ｂ下水田の畦畔、Ｗ-13号・34号・37号溝を切っていた。　**規模・形態**：北東から南西方向に23ｍほど走り、鋭角気味に折れて南東方向に3.5ｍほどが検出された。北辺側は二段掘り状で、上幅1.3ｍほど、深さは17㎝前後を計り、断面は皿状の下部を小さくＵ字形に二段に掘り込んだ形状であった。西へ向かって浅くなり、西辺側は下部の掘り込みのみが残り、上幅30㎝、深さ６㎝前後の規模になっていた。底面はやや細かい凹凸があり、標高は北辺の中央付近が低かった。

埋没状態：埋土中にはＢ軽石が多く含まれていた。　**遺物**：土師器の小片がやや多く出土したが、混入品である。　**時期**：埋土の状況から中世とみられる。

Ｗ-40号溝跡　（第15・16・22図、ＰＬ.15）

位置：調査区中央部のX216～222、Y46～51で検出された。　**重複**：Ｗ-17号・30号・32号溝を切っていた。**規模・形態**：Ｗ-17号溝に沿って、北西から南東方向に直線で30ｍの長さが検出された。上幅が90㎝前後、深さは15㎝ほどで、断面形は皿状であった。底面の傾斜は認められなかった。　**埋没状態**：埋土中にはＡ軽石を少量含んでいた。　**時期**：埋土の状況から近代とみられる。

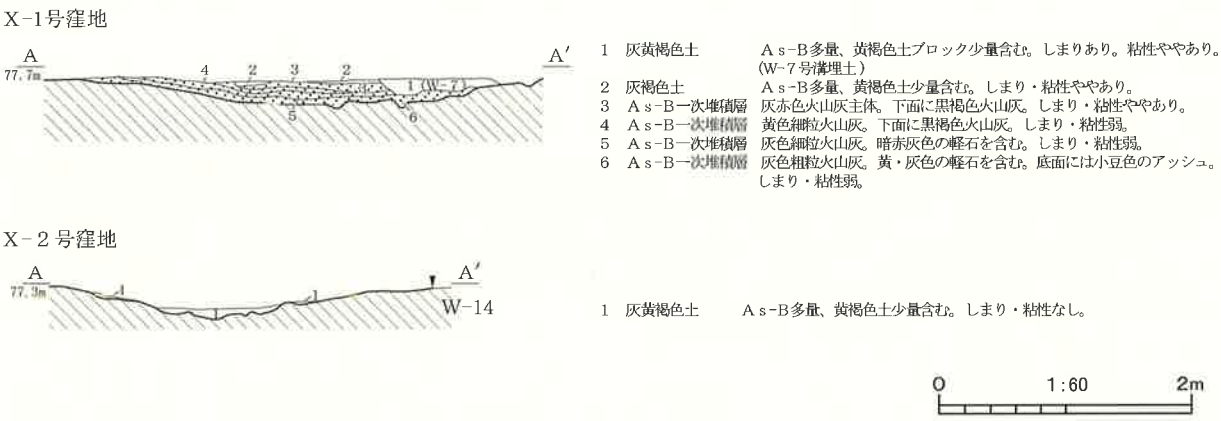
５　その他

Ｘ－１号窪地　（第14・23図、ＰＬ.15）

位置：調査区北半部のX208・209、Y35～37で検出された。　**重複**：Ｗ－７号溝と攪乱の窪み２か所に切られていた。Ｗ－９号溝とは同時期である。　**規模・形態**：平面形は本来は南北に長い長円形であったとみられる。最長部で８ｍほどを計る。深さは最深部が約20㎝で、立ち上がりのゆるやかな皿状の断面形である。南端は狭くなりそのままＷ－９号溝に続いていた。　**埋没状態**：底面にはＡs-Ｂの降下火山灰が認められ、上層も一次堆積の軽石の層理が確認された。　**時期**：埋土の状況から平安時代末である。

Ｘ－２号窪地　（第16・23図、ＰＬ.15）

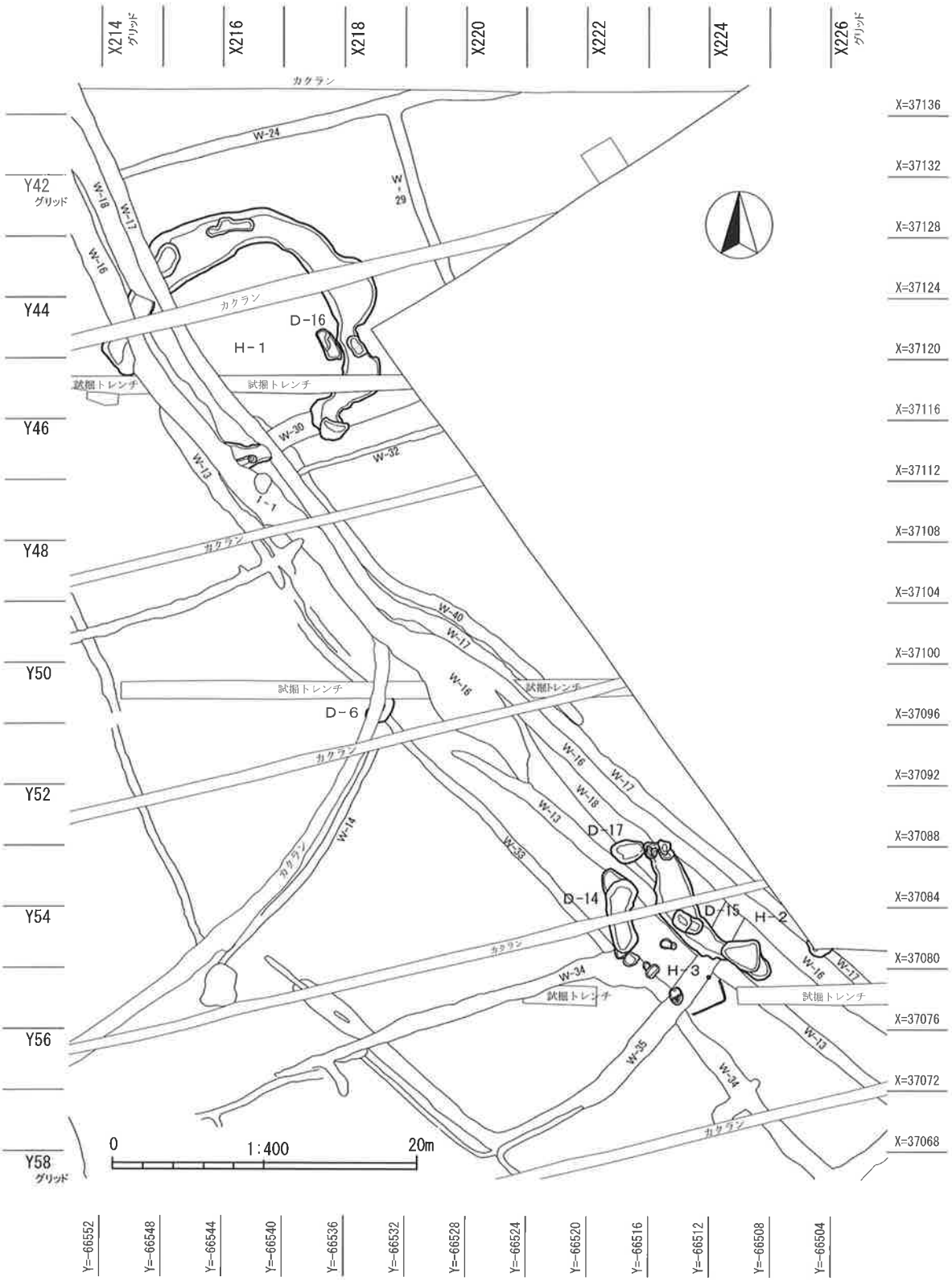
位置：調査区南半部のX215・216、Y55で検出された。　**重複**：Ｗ-14号溝に切られていた。　**規模・形態**：平面形は南北に長い不整の楕円形で、最長部が３ｍほどであった。深さは約34㎝で、断面形は立ち上がりのゆるやかな皿状であった。底面は凹凸が顕著であった。攪乱などにより確実にできなかったが、北側から延びてきたＷ－７号溝が接続していたものと考えられる。　**埋没状態**：埋土はＷ－７号溝と同じくＢ軽石を多量に含んでいた。　**時期**：埋土の状況から平安時代末から中世とみられる。



第23図　Ｃ区窪地断面図

2　古墳時代

古墳時代の遺構は、Ｃ区の中央部の東半付近で集中的に検出された。西側の浅い谷地形に臨む微高地の縁辺に分布していた。Ａｓ- Ｂ層はすでになく下層の第ＸⅢ層あるいは第ＸⅣ層まで耕地整理の削平が及んでいた。

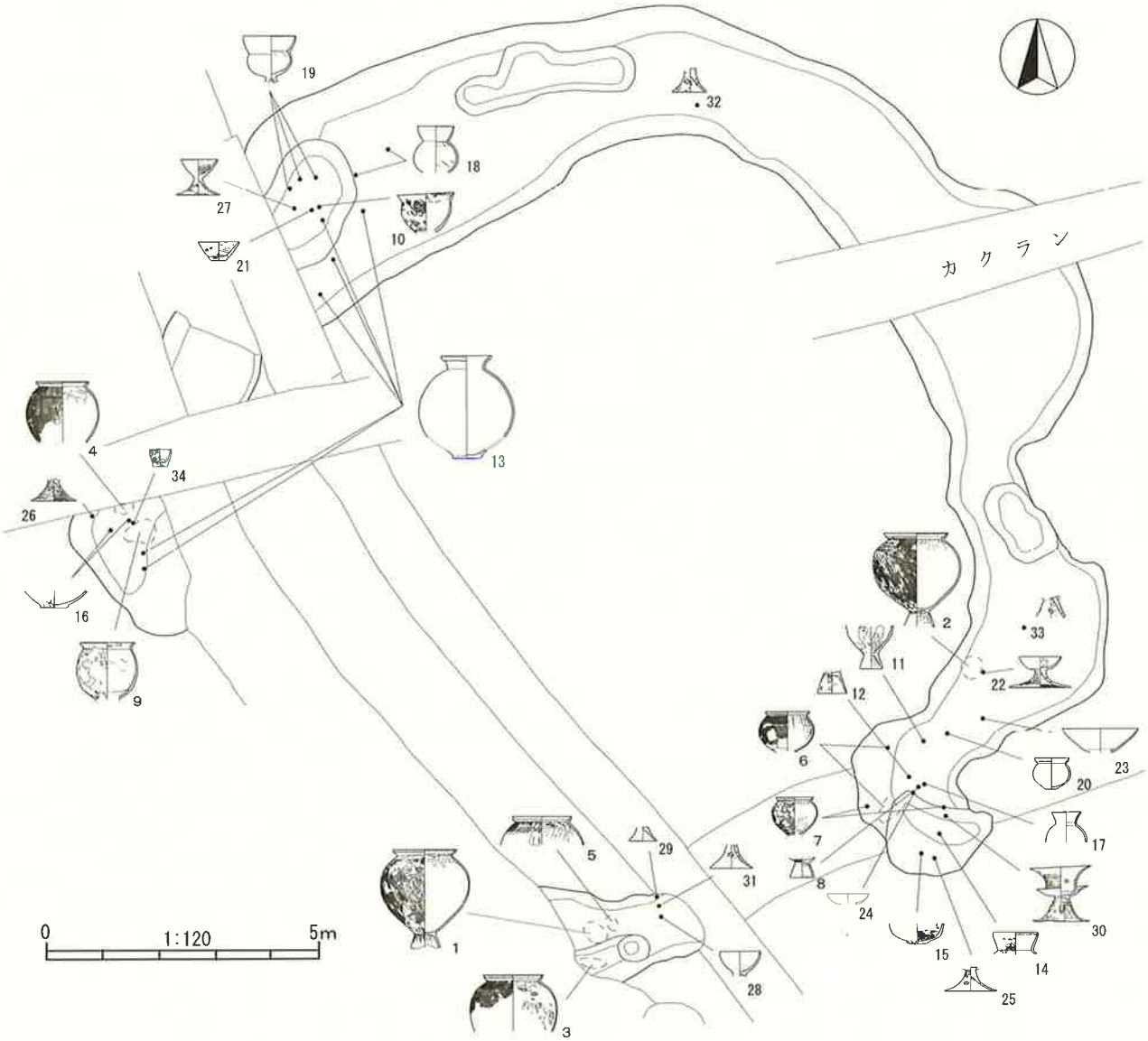


第 24 図　Ｃ区古墳時代全体図

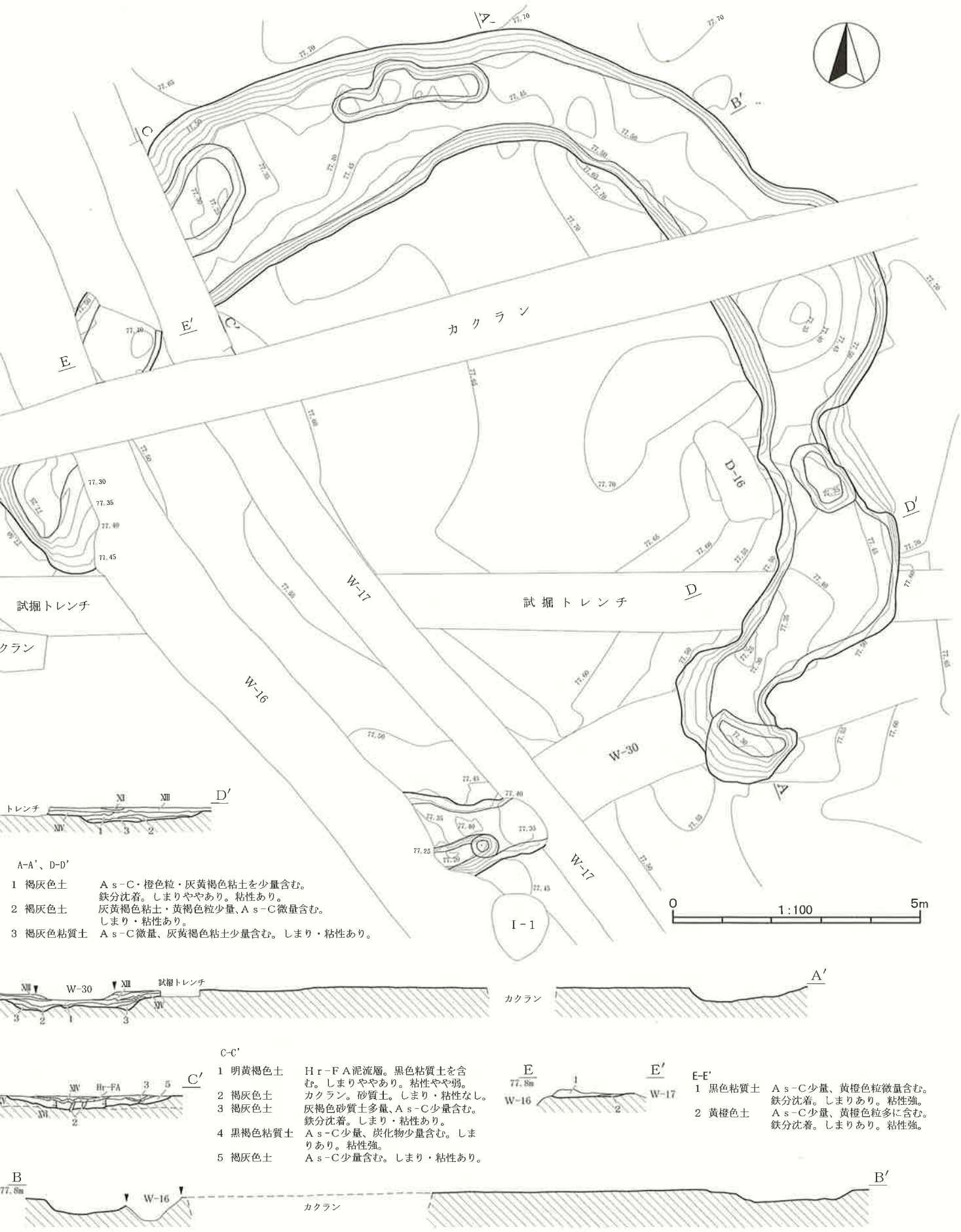
1　住居跡

Ｈ－１号住居跡　（第25・26図、ＰＬ.16・17）

位置：調査区中央のX214～218、Y42～46で検出された。　**重複**：Ｗ-16～18号・30号溝に切られ、現代の深い暗渠排水溝が東西に切っていた。**規模・形態**：住居跡の外側にめぐらされた外周溝部分のみの検出で、内部の構造などは不明である。隅丸方形の平面形を基調としているとみられ、外周溝は南辺の中央部が３ｍ以上の幅で陸橋状に掘り残され、南東隅部から東辺、北辺、さらに北西の隅部へと連続していた。西辺部については検出されなかった。規模は外周溝の内法で南北最長部が約11ｍを計る。東西も同規模であったとみられる。南北軸は30°西に振れていた。外周溝の形態は、内側は比較的直線に整えられ立ち上がりも急であったが、外側は不整形で幅や深さが一定ではなかった。概して隅部では幅が狭く浅くなっていたとみられる。底面には土坑状の深い落ち込みが数カ所認められ、北辺部の西では深さ40cmほどあった。掘り込み面は第ⅩⅣ層よりも下位であった。**埋没状態**：Ｃ軽石を少量含む埋土で、北辺部の外側からの流入土にはやや多く含まれていた。また北辺部では上部に10cm弱の厚さでＨr－ＦＡ層の堆積が認められ、下層では炭化物を少量含んでいた。　**遺物**：外周溝の中位から下位で多量の土器群が出土した（第32～35図）。南辺部と、北辺から北西隅部にかけての部分に集中しており、



第25図　Ｃ区　Ｈ－１号住居跡遺物出土状況

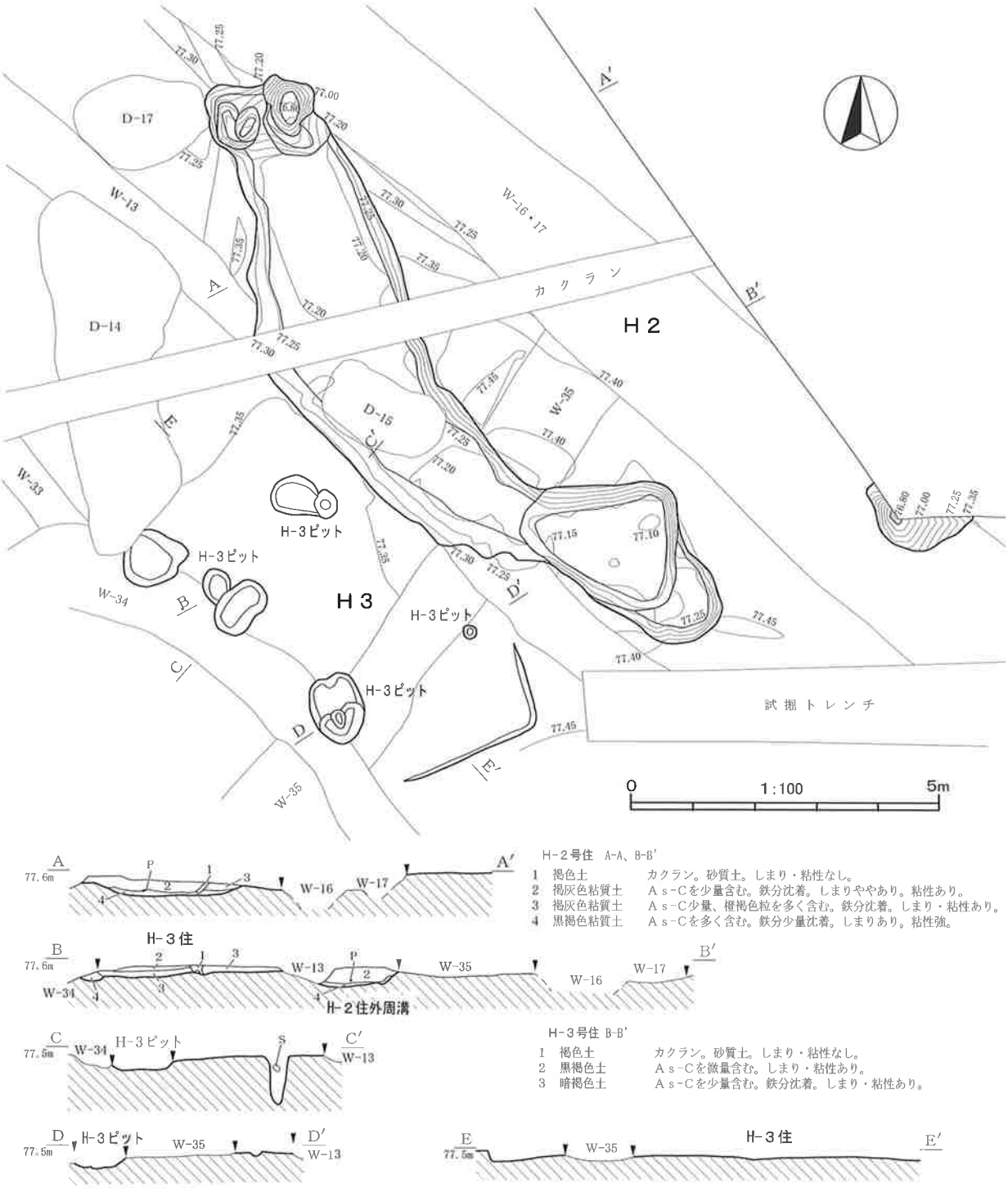


第26図　Ｃ区Ｈ－１号住居跡

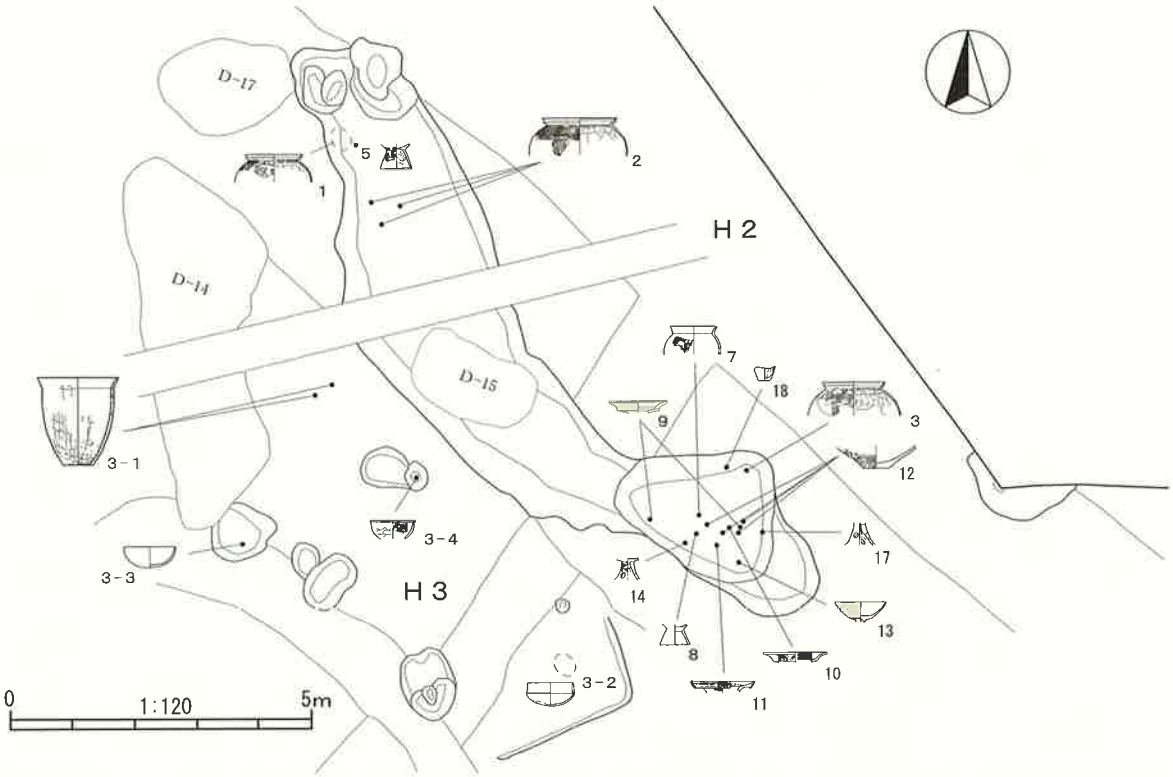
東辺部ではほとんど出土はなかった。　**時期**：古墳時代前期であり、Ａｓ－Ｃの降下以後の構築である。

Ｈ－２号住居跡　（第27・28図、ＰＬ.17）

位置：調査区南半部のX223～225、Y52～55で検出された。　**重複**：Ｗ－13号・16～18号・35号溝、Ｈ－３号住居に切られ、Ｄ－15号・17号土坑を切っていた。　**規模・形態**：外周溝部分のみが検出された。平面形は１号住居と同じく隅丸方形であったとみられる。外周溝は西辺部から南辺側への隅部と、南辺の東側の一部分のみで、北辺側では検出されず東辺部は調査区外であった。南辺側は中央部が幅約2.8ｍの陸橋状に掘り残され



第27図　Ｃ区Ｈ－２号住居跡・３号住居跡



第28図　C区　H－2号住居跡、3号住居跡遺物出土状況

ていた。規模は、西辺の内法の長さからみて一辺8m以上で、南北軸は20°ほど西に振れていたと考えられる。外周溝の形態は、外周側は不整形で立ち上がりもゆるやかであったが、内側は急であった。深さは全体に浅かったが、西辺北端と、南辺の東端部はピット状になり40～50cmの深さがあった。　**埋没状態**：埋土中にはC軽石が少量含まれていた。As-Cの降下以後の構築である。　**遺物**：外周溝中、特に南辺の西隅部からまとまって土器が出土した（第36・37図）。　**時期**：古墳時代前期で、As-Cの降下以後の構築である。

H－3号住居跡　（第27・28図、PL.17・18）

位置：調査区南半部のX222～224、Y54・55で検出された。　**重複**：H－2号住居、D-14号土坑を切り、W-13号・34・35号溝に切られ、現代の暗渠排水溝にも切られていた。　**規模・形態**：攪乱や重複のため明確なプランは捉えられなかった。南東側にL形に低い立ち上がりがみられたが、位置的に壁とは考えにくい。床面も明確な硬化面などは認められなかったが、柱穴とみられるピットを3カ所検出した。北のピットは深さ70cmほどあったが、西及び南のピットは20cm弱の深さであった。いずれも大きく浅いピットを伴っていた。東に検出したピットは小規模で柱穴とは考えられず、柱穴はW-35号溝の重複部に存在したものとみられた。D-14号土坑の南には貯蔵穴とみられるピットを検出した。長径1m、深さ15cmほどのピットで、内部からほぼ完形の椀が出土した。これらのピットや遺物の出土位置などを合わせ考えると、一辺7mほどの規模の住居であったとみられる。

埋没状態：埋土中にはC軽石が少量みられたが、Hr-FAは確認できなかった。　**遺物**：遺物の出土は少なく、貯蔵穴（3－3）以外に、北のピット内から杯の破片（3－4）が、床面直上からは散在的に土器片（3－1・2）が出土した（第38図）。　**時期**：出土遺物から古墳時代後期であり、Hr-FA降下以前とみられる。

２　土　坑

Ｄ－６号土坑　（第29図、ＰＬ.18）

位置：調査区中央付近X218、Y50で検出された。　**重複**：Ｗ-33号溝とトレンチに上部を切られ、中央部分を現代の攪乱の溝に切られていた。　**規模・形態**：平面形は長円形であったとみられ、残存部の南北長辺が1.7ｍを計る。深さは10cm強で、立ち上がりのゆるやかな皿状の断面形であった。　**埋没状態**：Ｃ軽石を少量含んだ埋土であった。　**遺物**:底面上から壷の大型破片などが出土した(第39図)。　**時期**:遺物から古墳時代前期である。

Ｄ-14号土坑　（第29図、ＰＬ.18）

位置：調査区東半部X222、Y53・54で検出された。　**重複**：Ｗ-13号・33号溝に一部を切られ、中央部を東西に現代の暗渠排水溝に切られていた。　**規模・形態**：中央部がくびれ、南北に長い溝状の平面形である。南北の両端にはゆるやかに立ち上がる突出部が付随している。本体の長辺部が4.7ｍ、北半の最大部の幅が約２ｍと大型であった。深さも68cmあり、断面は逆台形状で、西壁側は垂直に近い立ち上がりであった。底面は平坦で、底面の直上からは湧水があった。掘り込み面は第XIV層よりも下位であった。　**埋没状態**：最下層は泥炭質の漆黒色土で、この上部には東から流れ込んだ状況でＡｓ-Ｃの二次堆積層が見られた。この上部からはＣ軽石を含んだ埋土であり、さらに最上層にはＨｒ-ＦＡ層が薄く水平に堆積していた。　**遺物**：Ｃ軽石の二次堆積層の上位の埋土中から高杯が出土した（第39図）。　**時期**：埋土や遺物から古墳時代前期であり、Ａｓ-Ｃ降下以前の構築と考えられる。

Ｄ-15号土坑　（第29図、ＰＬ.18）

位置:調査区の東半部X223、Y54で検出された。　**重複**:Ｈ－２号住居外周溝に上部を切られていた。　**規模・形態**:隅の丸い長方形状の平面で、東西の長辺部で１ｍを計る。深さは40cmほどで、逆台形の断面形である。東半部は底面が10cm強ほど高かった。底面は平坦であった。　**埋没状態**：Ｄ-14号土坑と同様で、最下層に厚く泥炭質土が堆積し、上部の埋土にはＣ軽石を多く含んでいた。Ｃ軽石の二次堆積層は認められなかった。　**遺物**：土坑に伴う遺物の出土はなかった。　**時期**：埋土の状況から古墳時代前期、Ｄ-14号土坑と同時期とみられる。

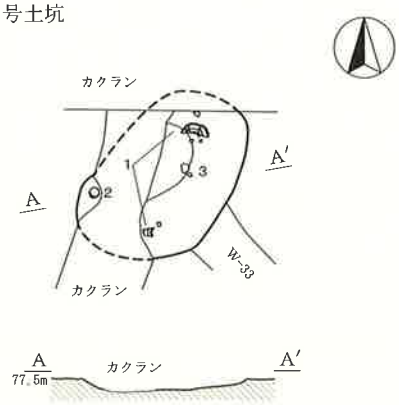
Ｄ-16号土坑　（第29図、ＰＬ.18）

位置：調査区中央部X217、Y44で検出された。　**重複**：Ｈ－１号住居の区画内に構築されているが、前後関係は確認できなかった。　**規模・形態**：平面形はやや不整の南北に長い長方形で、長辺部が２ｍ強の規模であった。深さは最深部で36cmほどを計る。断面形は箱形状で、底面は北側が一段低くなっており、全体にやや凹凸が見られた。　**埋没状態**:Ｃ軽石を少量含む埋土であった。　**遺物**:埋土の上部から壷の半欠品が出土した(第39図)。**時期**：遺物の状況から古墳時代前期である。Ｈ－１号住居の後か。

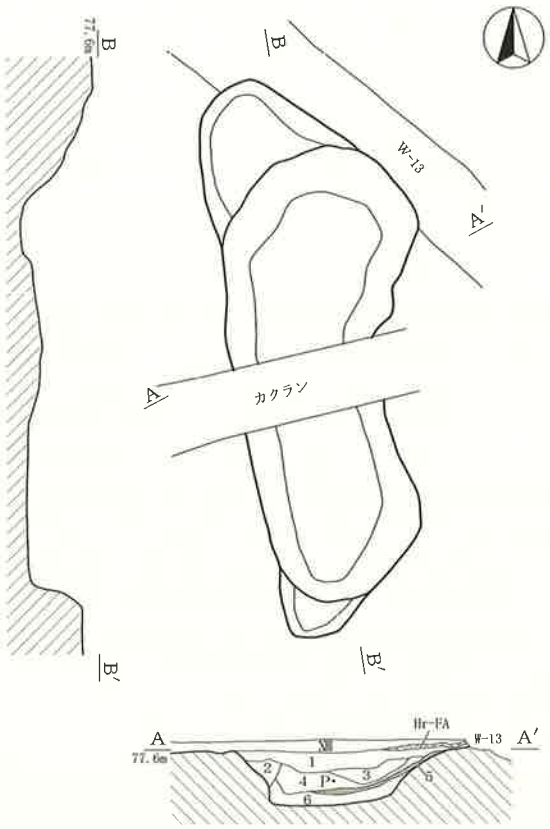
Ｄ-17号土坑　（第29図、ＰＬ.18）

位置：調査区の東半X222、Y53で検出された。　**重複**：Ｗ-13号・18号溝に上部を切られていた。　**規模・形態**：東西に長いやや不整な長円形で、長辺部で約２ｍを計る。深さは40cmほどで、皿状の断面形であった。全体に凹凸が顕著であった。　**埋没状態**：埋土は、自然堆積とはみられない状況であった。　**時期**：埋土の状況から古墳時代前期とみられるが、形態や埋土からみて倒木痕の可能性がある。

D-6 号土坑



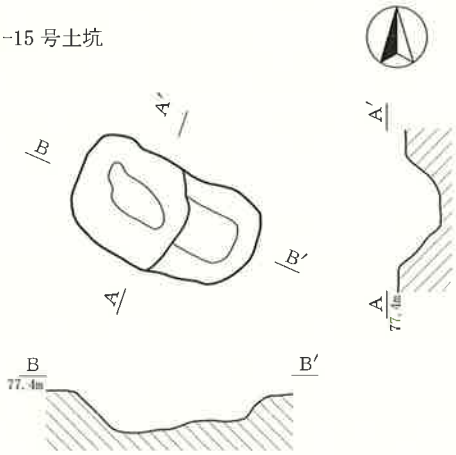
D-14 号土坑



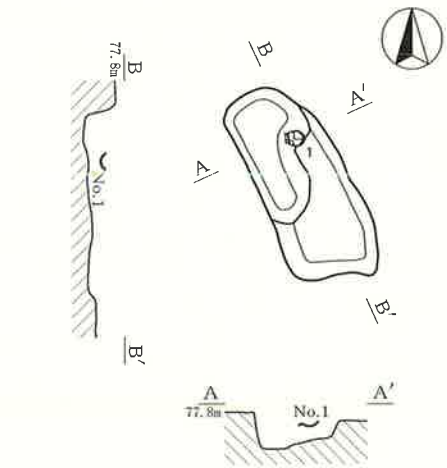
D-14 号土坑

1	黒褐色土	Ａｓ－Ｃを多く含む。しまりあり。粘性強。
2	灰色粘質土	Ａｓ－Ｃを微量含む。鉄分少量沈着。しまりあり。粘性強。
3	灰褐色粘質土	Ａｓ－Ｃを多く含む。鉄分沈着多。しまり・粘性強。
4	明褐色粘質土	Ａｓ－Ｃ多量、橙褐色粒を少量含む。鉄分多量に沈着。しまり・粘性あり。
5	褐灰色土	Ａｓ－Ｃ二次堆積層。しまりあり。粘性なし。
6	黒色土	橙褐色粒を少量含む。泥炭質。しまり、粘性弱。

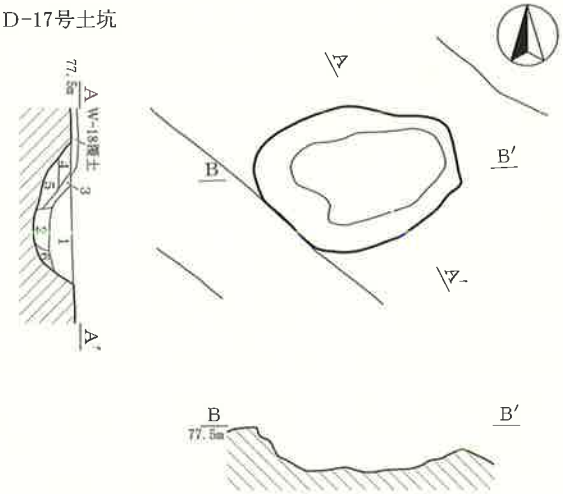
D-15 号土坑



D-16 号土坑



D-17号土坑



D-17 号土坑

1	黒褐色土	Ａｓ－Ｃを少量含む。鉄分少量沈着。しまりあり。粘性強。
2	暗褐色土	Ａｓ－Ｃを微量含む。しまり・粘性あり。
3	暗茶褐色土	鉄分多量に沈着。しまりあり。粘性強。
4	茶褐色土	Ａｓ－Ｃを少量含む。鉄分多量に沈着。しまり・粘性強。
5	灰褐色土	Ａｓ－Ｃを微量含む。鉄分多く沈着。しまり・粘性強。
6	黒褐色土	Ａｓ－Ｃを微量、灰色粘質土を中量含む。しまり・粘性強。

0　1:80　2m

第 29 図　Ｃ区古墳時代土坑

Ⅵ　出土遺物

1　平安時代末以降

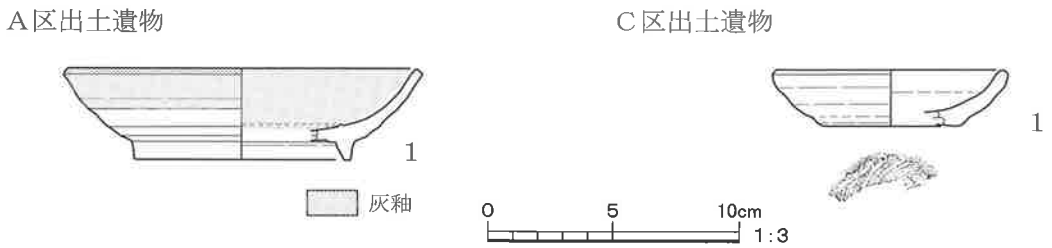
確実にＡs－Ｂ下水田に関係する遺物は出土していない。その後の時期の遺構では、Ｗ－16号・17号・18号溝跡以外では、混入品以外にはほとんど遺物の出土はなかった。

Ａ区出土遺物　（第30図、ＰＬ．19）

Ａ区北辺付近のX217、Y115で出土した。Ａs－Ｂ下水田が構築されている第Ⅻ層黒色粘質土の上面であったが、洪水起源とみられる灰黄褐色シルト質土の堆積する浅い窪地状部分の底面であり、この堆積層の出土とみられた。

Ｃ区出土遺物　（第30図、ＰＬ．19）

Ｃ区北辺部の１号南北大畦畔の東側X214、Y28で出土した。Ａs－Ｂ層の遺存状況が悪く判然としなかったが、水田面というよりはＢ軽石の混土層中からの出土とみられた。



第30図　調査区出土遺物

Ｗ－16号溝跡出土遺物　（第31図、ＰＬ．19）

平安末から中世の時期と考えられる最も規模の大きい溝跡で、ほとんどの地点で多数の遺物の出土があったが、多くは古墳時代の土師器片であった。図示した１、２、４は東端付近からの出土であり、３は中央部から、５は北端付近の底面の出土である。

Ｗ－17号溝跡出土遺物　（第31図、ＰＬ．19）

近世から近代にかけての溝跡で、陶磁器片などが比較的多く出土した。１は中央部での出土である。

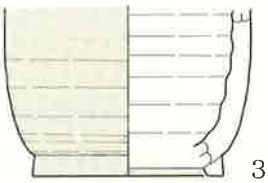
Ｗ－18号溝跡出土遺物　（第31図、ＰＬ．19）

中世から近世頃の溝跡と考えられる非常に浅い溝であったが、遺物の出土は多かった。混入品の土師器片以外に軟質陶器や陶磁器の破片も多数みられた。１、２、６は中央部寄り北半から、３～５は北端部付近からの出土である。

16 号溝跡出土遺物

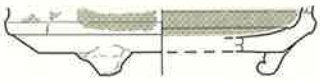
1

2



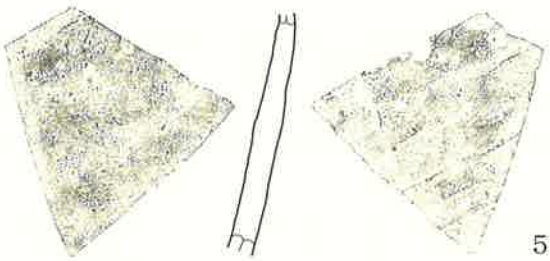
3

灰釉



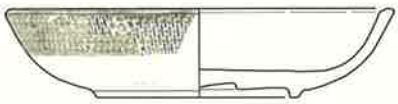
4

褐釉



5

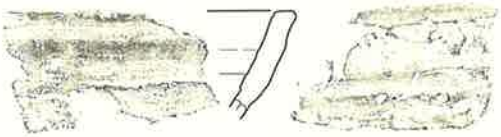
17 号溝跡出土遺物



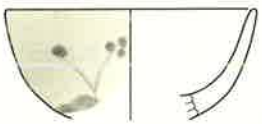
1

18 号溝跡出土遺物

1

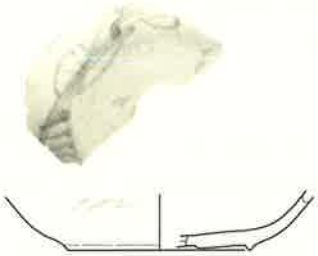


2

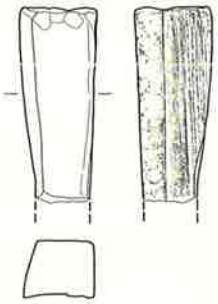


3

5



4



6

0 5 10cm 1:3

第 31 図　溝跡出土遺物

2　古墳時代

Ｈ－１号、２号住居跡、Ｄ－６号、14 号、16 号土坑は古墳時代前期、Ｈ－３号住居跡は古墳時代後期である。

1　住居跡

Ｈ－１号住居跡出土遺物　（第 32 ～ 35 図、ＰＬ．19 ～ 22）

第 25 図に示したように、すべて住居跡の外周溝からの出土である。破片も含めて多量に出土した土器のほとんどが南辺陸橋部の両脇と、北辺から西辺の隅部からの出土であった。２か所とも外周溝が切れた部分の近辺にあたり、出土層位は底面から中層付近にかけてからであった。居住中の使用により破損した土器を手近な場所に廃棄したものと考えられた。多様な器種がみられるが、場所による偏りなどは認められない。13 の壷の破片のみがやや広い範囲から出土している。

Ｈ－２号住居跡出土遺物　（第 36・37 図、ＰＬ．22）

第 28 図のとおり、すべて住居跡の外周溝からの出土である。特に南辺陸橋部の西側の部分からの出土が多かった。東側では調査範囲が狭かったこともあってか遺物の出土はみられなかった。西辺部では全体的に破片が出土しており、北端付近にはＳ字甕が多くみられた。すべて底面近くからの出土であり、住居の存続中に廃棄されたものと考えられる。

Ｈ－３号住居跡出土遺物　（第 38 図、ＰＬ．23）

第 28 図のとおり、住居の範囲は明確にとらえられなかったが住居内に散在的に分布しているものとみられた。中央から南にかけて杯類がみられ、３は貯蔵穴とみられるピット内の出土であった。１の甑の付近からは甕の大型破片の出土があり、北カマドの構造であったと考えられる。

2　土坑

Ｄ－６号土坑出土遺物　（第 39 図、ＰＬ．23）

加飾壷口縁部の大型破片が底面から出土している。その他には図示した別個体の２点の壷片が、やはり底面から出土したのみであった。

Ｄ－14 号土坑出土遺物　（第 39 図、ＰＬ．23）

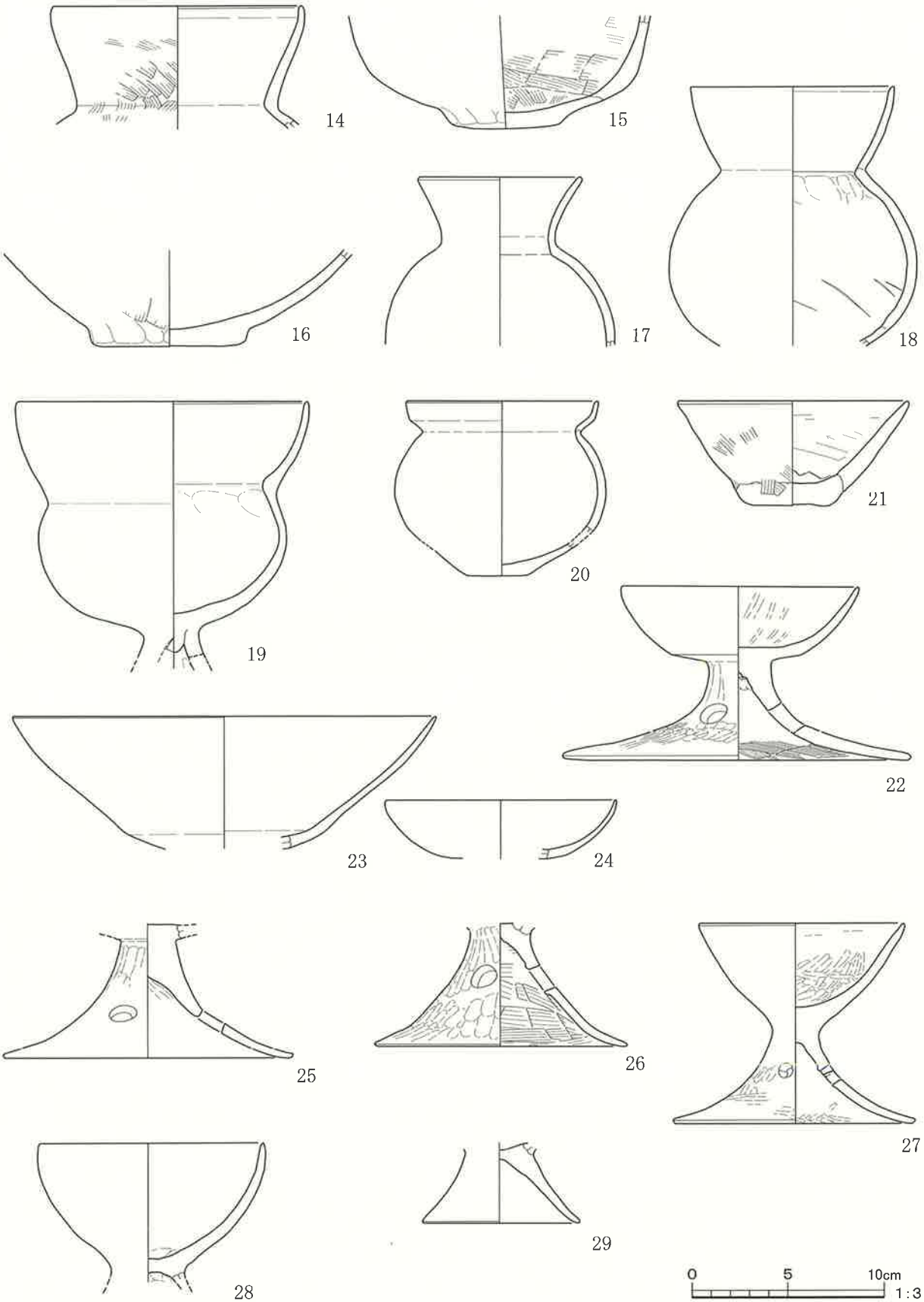
大型の有段高杯の破片が出土したほか、少量の土師器小片が出土した。高杯は底面から 25 ㎝ほど上位で、Ａｓ－Ｃ軽石の流れ込みの土層の数㎝上部からの出土であった。他の土師器片もこれより上位の出土であった。Ｈ－２号住居の西辺外周溝の直近に位置しており、Ｃ軽石との関係からみて本土坑はＨ－２号住居に先行するものであり、土坑の埋没過程でＨ－２号住居が構築されこの高杯が廃棄されたものと考えられる。

Ｄ－16 号土坑出土遺物　（第 39 図、ＰＬ．23）

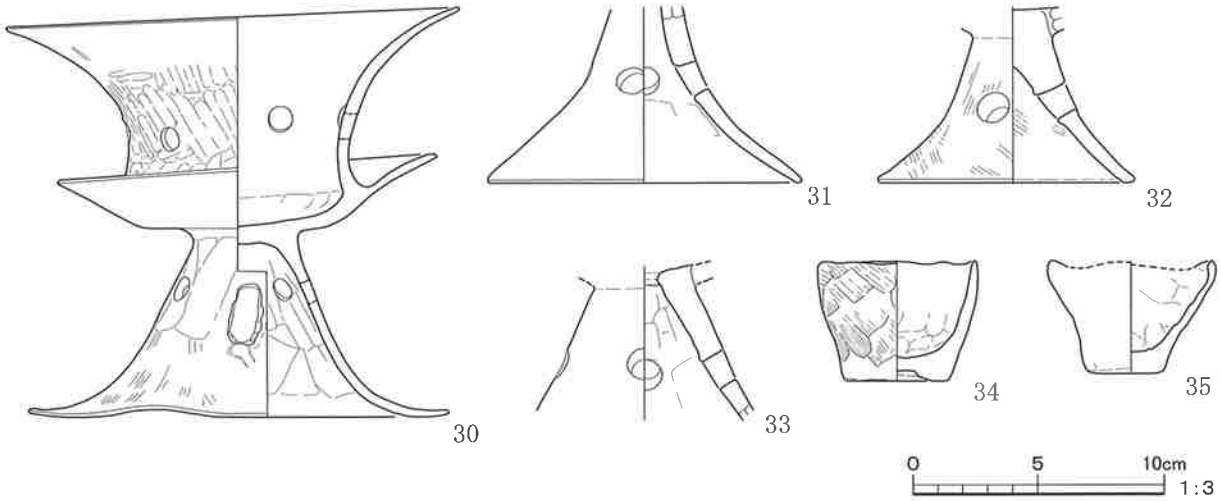
壷の半欠品が出土したほかは、土師器小片２点のみであった。底面から 16 ㎝ほど上位の埋土上部からの出土であった。

第32図　H－1号住居跡出土遺物（1）

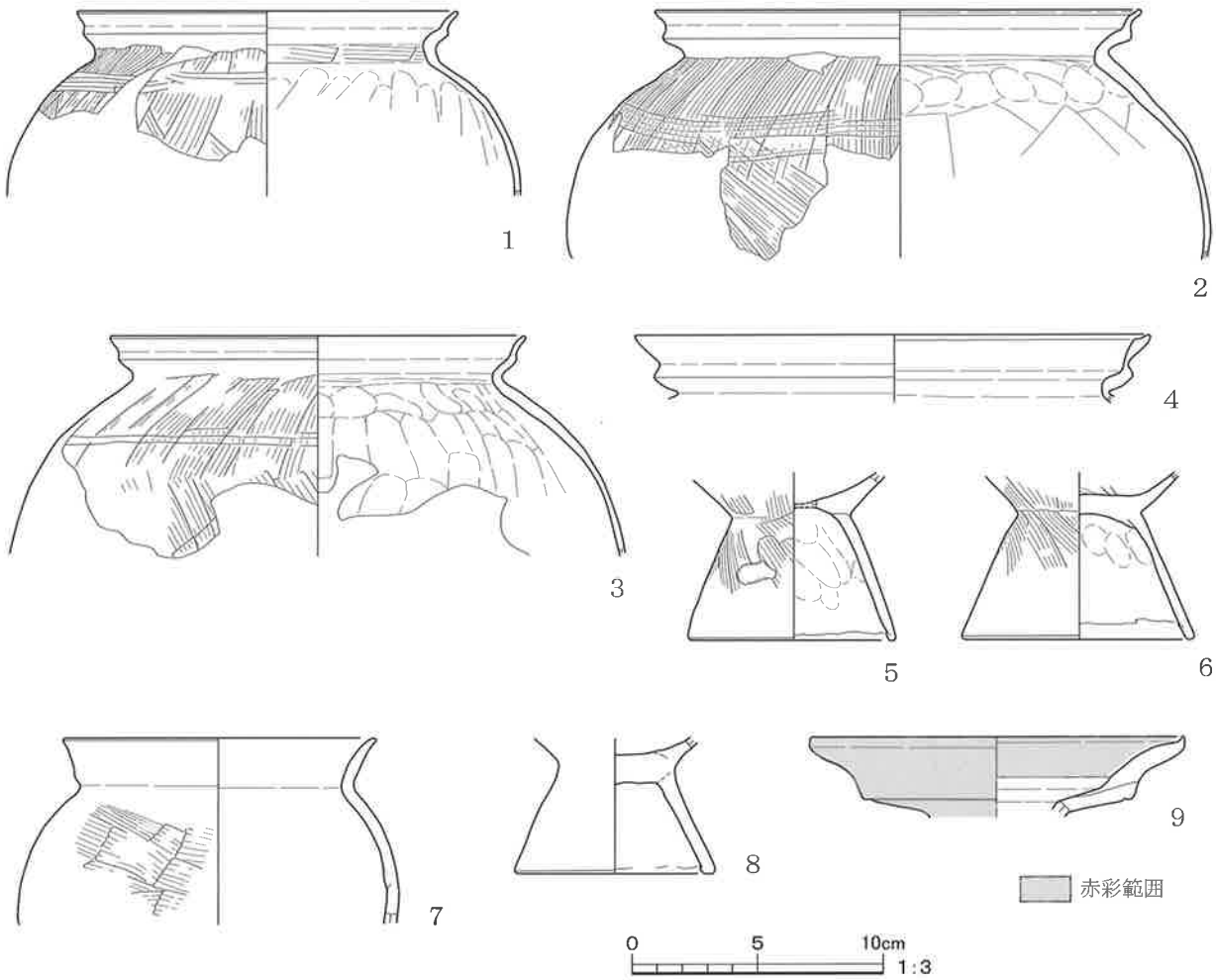
第33図　H－1号住居跡出土遺物（2）



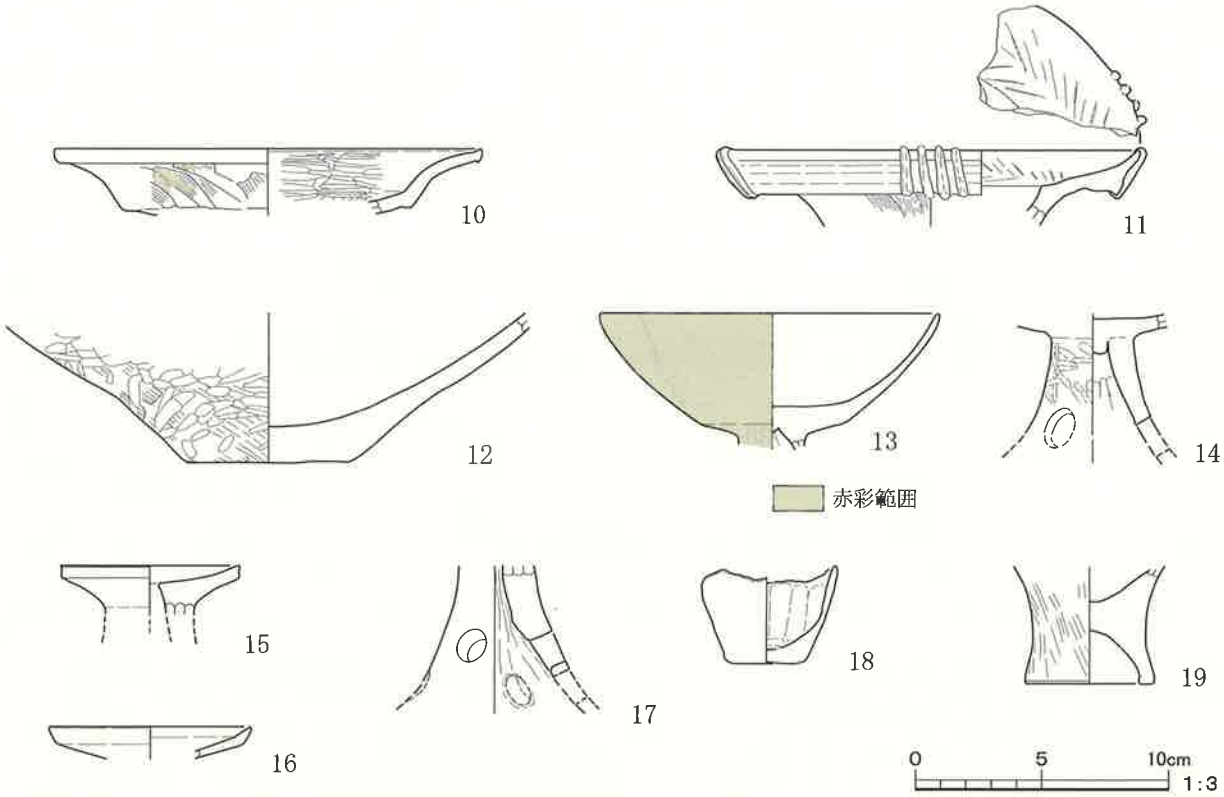
第34図　H－1号住居跡出土遺物（3）



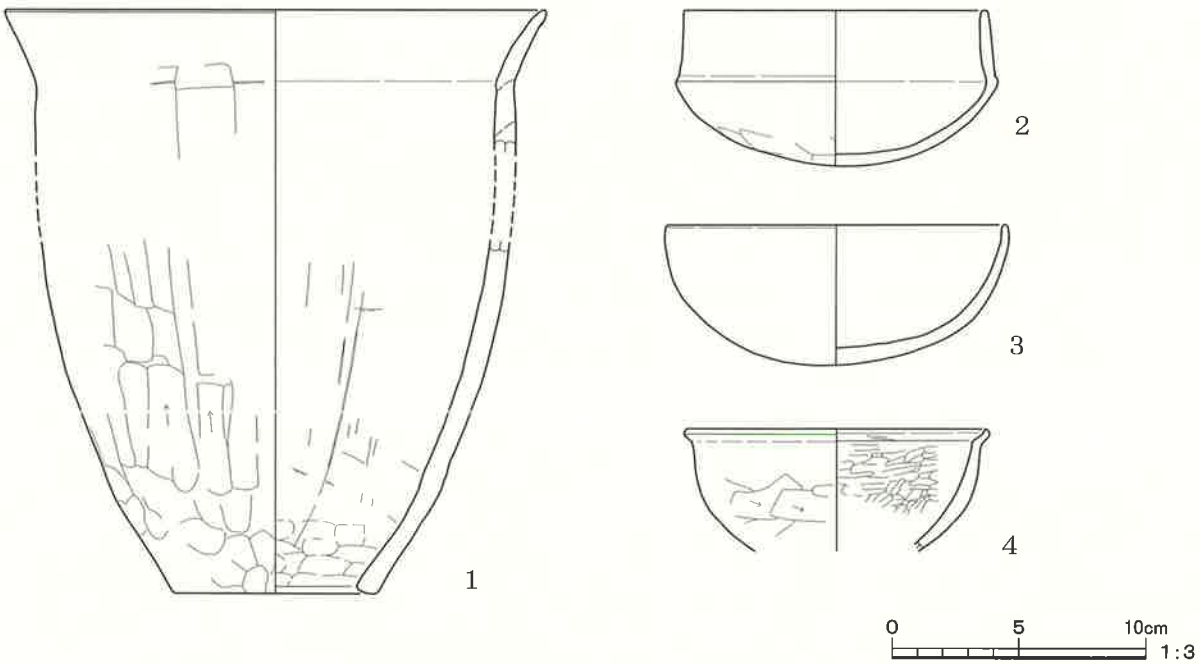
第 35 図　H－1 号住居跡出土遺物（4）



第 36 図　H－2 号住居跡出土遺物（1）

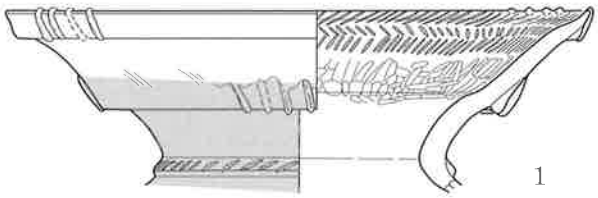


第 37 図　H－２号住居跡出土遺物（２）



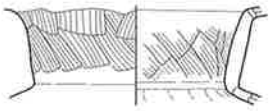
第 38 図　H－３号住居跡出土遺物

D-6号土坑出土遺物

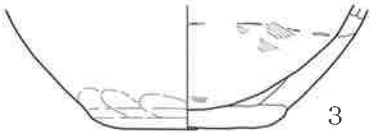


1

赤彩範囲

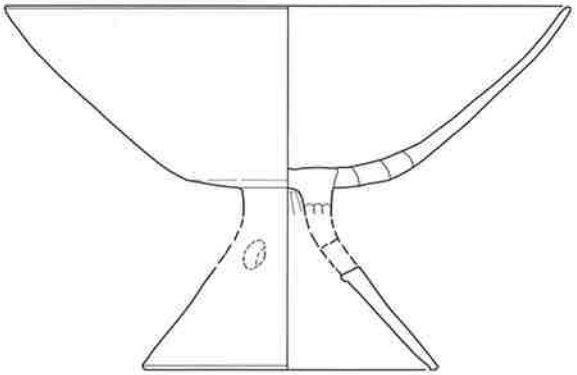


2



3

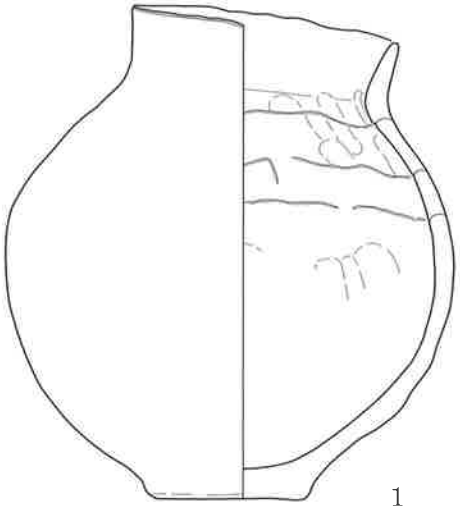
D-14 号土坑出土遺物



1

0 5 10cm
1:3

D-16 号土坑出土遺物



1

第 39 図　土坑出土遺物

第２表　Ａ区出土遺物観察表

寸法の（　）は推定値、＜　＞は残存値。

No.	遺構名	器種	寸法（cm）	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法等	備考
1	As-B 混土層	陶器皿	口径：(13.8) 底径：(8.6) 器高：3.6	①黒色粒微量 ②還元焔 ③灰白	灰釉。内面全体から体部上半に施釉。 外面：体部ロクロ回転ヘラケズリ。高台部削り出し。 内面：ロクロ調整。	1／5 見込み部に重ね焼き痕。

第３表　Ｃ区出土遺物観察表

寸法の（　）は推定値、＜　＞は残存値。

No.	遺構名	器種	寸法（cm）	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法等	備考
1	XII層上面	土師質土器 皿	口径：(9.0) 底径：(5.2) 器高：2.3	①細砂粒少 ②良好・酸化焔 ③灰黄褐	外面：ロクロ調整。底部ロクロ回転糸切り。 内面：ロクロ調整。	1／4

第４表　溝跡出土遺物観察表（１）

寸法の（　）は推定値、＜　＞は残存値。

No.	遺構名	器種	寸法（cm）	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法等	備考
1	W-16 号溝	軟質陶器 焙烙	口径：(33.0) 底径：(30.4) 器高：5.5	①細砂粒少 ②良好・酸化焔 ③黄灰	外面：ロクロ調整。 内面：ロクロ調整。内耳の貼付痕一部残。	1/14 内外面、割れ口に煤が付着。
2	W-16 号溝	軟質陶 焙烙	口径：(38.0) 底径：(35.4) 器高：5.4	①細砂粒少：黒色粒 ②良好・還元焔 ③黄灰	外面：上半部ロクロ調整。 内面：ロクロ調整。	1/12 径４㎜の補修孔が１カ所残存。
3	W-16 号溝	陶器 瓶	底径：(7.6) 器高：<6.6>	①白色粒少 ②還元焔 ③灰白	灰釉。全面に施釉。 外面：ロクロ回転ヘラケズリ。 内面：ロクロ調整。	1／5
4	W-16 号溝	陶器 香炉	底径：(9.8) 器高：<2.7>	①細砂粒微量 ②還元焔 ③灰白	底面に脚１カ所残存。内面全面と外面の一部に褐釉。 外面：下半ロクロ回転ヘラケズリ。上半ロクロ調整。 内面：ロクロ調整。	1／4
5	W-16 号溝	焼締陶器 大甕	器高：<9.5>	①砂粒多 ②還元焔 ③灰褐	外面：ナデ。 内面：ナナメナデ。	胴部破片 常滑

第５表　溝跡出土遺物観察表（２）

寸法の（　）は推定値、＜　＞は残存値。

No.	遺構名	器種	寸法（cm）	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法等	備考
1	W -17 号溝	磁器 皿	口径：15.0 底径：8.0 器高：3.5	①緻密 ②堅緻 ③白	染付。摺絵。 外面：ロクロ調整。蛇の目高台。 内面：ロクロ調整。	1／2
1	W -18 号溝	軟質陶器 焙烙	口径：(34.0) 底径：(31.8) 器高：5.4	①細砂粒：黒色粒 ②還元焔 ③黄灰	外面：ロクロ調整。 内面：ロクロ調整。	1/16
2	W -18 号溝	軟質陶器 焙烙	口径：(39.6) 器高：<4.4>	①細砂粒微量：赤色粒 ②還元焔 ③灰褐	外面：上半部ロクロ調整。 内面：ロクロ調整。	1/15 外面に煤が付着。
3	W -18 号溝	陶器 碗	口径：(9.9) 器高：<4.3>	①緻密 ②還元焔 ③灰白	陶胎染付。梅樹文。 外面：ロクロ調整。 内面：ロクロ調整。	1／4
4	W -18 号溝	陶器 皿	底径：(7.0) 器高：<2.2>	①緻密 ②還元焔 ③灰	陶胎染付。 外面：ロクロ調整。蛇の目高台。 内面：ロクロ調整。	3／8
5	W -18 号溝	磁器 坏	口径：7.4 底径：2.4 器高：2.3	①緻密 ②堅緻 ③白	染付。草虫文。 外面：ロクロ調整。 内面：ロクロ調整。	5／8
6	W -18 号溝	石製品 砥石	長さ：<7.7> 幅：3.0 厚さ：2.2	③灰緑	重さ：<91.3g>　石材：流紋岩　形状：直方体 長側面の一面は未調整の切断面。	1/2? 長側面三面を使用。一面は大きく砥ぎ減り。

第６表　Ｈ－１号住居跡出土遺物観察表（１）

寸法の（　）は推定値、＜　＞は残存値。

No.	出土位置	器種	寸法（cm）	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法等	備考
1	周溝南西部	土師器 台付甕	口径：18.6 底径：<8.2> 器高：<28.8>	①砂粒多量：チャート・黒色粒 ②良好 ③にぶい黄橙	Ｓ字状口縁。台裾部の破損後再調整を施し、疑似底部として使用。 外面：口縁部ヨコナデ。胴部羽状ハケメ後、肩部ヨコハケメ。 台部ナデ後、不連続ナナメハケメ。 内面:口縁部ヨコナデ。頸部ヨコハケメ。胴部ヘラケズリ後、ナデ。 台部ナデ後不連続ナナメハケメ。	胴部の一部欠、台裾部欠。 外面胴部中位に煤、内面下胴部に炭化物が付着。
2	周溝南辺	土師器 台付甕	口径：18.4 器高：<27.4>	①細砂粒少：石英・片岩 ②良好 ③灰黄褐	Ｓ字状口縁。台部の破断面に平坦な磨滅部分が見られ、１と同様に再調整の可能性あり。 外面：口縁部ヨコナデ。胴部羽状にハケメ後、肩部ヨコハケメ。 台部ナデ後不連続ナナメハケメ。 内面:口縁部ヨコナデ。肩部ユビナデ。胴部ナデ。台部ユビナデ。	胴部部分的に欠、台裾部欠。 外面胴部中位に煤、内面下胴部に炭化物が付着。
3	周溝南西部	土師器 台付甕	口径：17.6 器高：<16.5>	①細砂粒多：雲母粒 ②良好 ③灰黄褐	Ｓ字状口縁。 外面：口縁部ヨコナデ。胴部羽状ハケメ後、肩部ヨコハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。肩部ナデ。胴部ハケメ。	口縁～胴中位１／２残 ２片
4	周溝北西部	土師器 台付甕	口径：(15.3) 器高：<17.8>	①砂粒多：石英・片岩 ②良好 ③にぶい褐	Ｓ字状口縁。 外面：口縁部ヨコナデ。胴部羽状ハケメ後、肩部ヨコハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ後、ナデ。	口縁～胴中位１／２残 外面胴部中位に煤。
5	周溝南西部	土師器 台付甕	口径：17.2 器高：<8.3>	①砂粒多：チャート ②良好 ③にぶい黄橙	Ｓ字状口縁。 外面：口縁部ヨコナデ。肩部タテハケメ後ヨコハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。肩部ハケメ後、ユビナデ。	口縁～肩部１／２残
6	周溝南辺	土師器 台付甕	口径：12.8 器高：<11.8>	①細砂粒多 ②良好 ③灰褐	Ｓ字状口縁。 外面：口縁部ヨコナデ。胴部羽状ハケメ後、肩部ヨコハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。胴部ヘラケズリ後、ユビナデ。	口縁～下胴部３／４残 内面下胴部に炭化物
7	周溝南辺	土師器 台付甕	口径：11.0 器高：<11.1>	①細砂粒多：石英 ②良好 ③灰黄褐	Ｓ字状口縁。 外面：口縁部ヨコナデ。胴部ナナメハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。胴部ユビナデ。	胴部中位１／３欠。 外面下胴部に煤。
8	周溝南辺	土師器 台付甕	底径：(7.0) 器高：<5.7>	①砂粒多：石英 ②良好 ③灰黄褐	裾部内面折り返し。 外面：胴部ハケメ。台部ナデ。 内面：胴部ナデ。台部ユビナデ。裾部ナデ。	裾部１／２欠。
9	周溝北西部	土師器 台付甕	口径：(16.0) 器高：<16.8>	①砂粒多：チャート・黒色粒 ②良 ③にぶい黄橙	く字口縁。 外面：口縁部ヨコナデ。胴部雑なハケメ。 内面：口縁部ハケメ後ヨコナデ？胴部ヘラケズリ？	２／３残 外面胴上半に煤。
10	周溝北辺	土師器 台付甕	口径：16.4 器高：<11.6>	①細砂粒：赤色粒 ②良 ③にぶい黄橙	く字口縁。 外面：口縁部ナデ？上胴部密なハケメ。下胴部粗いハケメ。 内面：口縁部ヨコハケメ。胴部ヘラミガキ？	口縁部１／３欠。 内面下胴部に炭化物。
11	周溝南辺	土師器 台付甕	底径：6.3 器高：<12.5>	①細砂粒小 ②良好 ③灰黄褐	外面：胴部雑なハケメ。台部ナデ。 内面：胴部ヘラナデ。台部ヘラケズリ？	胴上部は一部のみ残
12	周溝南辺	土師器 台付甕	底径：8.4 器高：<6.4>	①砂粒多：チャート・石英 ②良好 ③にぶい橙	外面：ハケメ。胴部との接合面に指頭痕。 内面：胴部？台部ヘラケズリ？	裾部１／２欠。
13	周溝北辺～ 北西部	土師器 壷	口径：14.3 底径：8.4 器高：(30.0)	①砂粒多量：チャート・黒色粒 ②良好 ③浅黄橙	折返し口縁。 外面：口縁部ヘラミガキ？胴部ハケメ後？ヘラミガキ。 内面：口縁部ヨコヘラミガキ。胴部ヘラミガキ？	胴部１／３残 底部位置は図上復元
14	周溝南辺	土師器 壷	口径：13.0 器高：<6.4>	①細砂粒多量：チャート・黒色粒 ②良好 ③浅黄橙	内湾口縁。 外面：ハケメ。 内面：？	口縁部５／８残 ２片
15	周溝南辺	土師器 壷	底径：5.8 器高：<5.9>	①砂粒多量：赤色粒 ②良好 ③にぶい橙	外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ？底部ナデ。 内面：ハケメ。	下胴部～底部残
16	周溝北西部	土師器 壷	底径：8.0 器高：<5.0>	①細砂粒 ②良好 ③灰白	外面：ハケメ。 内面：？	下胴部～底部残
17	周溝南辺	土師器 小型壷	口径：8.3 器高：<8.8>	①細砂粒：石英 ②良 ③灰褐	外面：口縁部ヨコナデ？胴部ヘラミガキ。 内面：口縁部ヘラミガキ？胴部ヘラミガキ？	１／２残
18	周溝北辺	土師器 小型壷	口径：10.5 器高：<13.5>	①砂礫：チャート・片岩・石英 ②良好 ③橙	内湾口縁。 外面：ヘラミガキ？ 内面：ヘラケズリ？頸部ユビナデ。	胴部１／２残
19	周溝北辺	土師器 脚付鉢	口径：15.2 器高：<13.5>	①砂礫：片岩・チャート・石英・赤色粒 ②良好 ③にぶい橙	内湾口縁。脚部三方向に、三角形１孔・円形２孔の透し孔。 外面：ヘラミガキ？ 内面：？	口縁～脚基部３／４残

第７表　Ｈ－１号住居跡出土遺物観察表（２）

寸法の（　）は推定値、＜　＞は残存値。

No.	出土位置	器種	寸法（cm）	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法等	備考
20	周溝南辺	土師器 鉢	口径：(10.0) 底径：3.2 器高：(9.1)	①砂礫多：チャート・黒色粒・片岩 ②良 ③橙	有段口縁。 外面：口縁部ヨコナデ？体部ヘラミガキ？ 内面：口縁部ヨコナデ？体部？	口縁部１／２残 口縁・胴・底部の３点から図上復元。
21	周溝北辺	土師器 杯	口径：12.0 底径：4.0 器高：5.5	①砂礫多：石英・軽石 ②良好 ③浅黄橙	外面：口縁部ヨコナデ。体部ハケメ。底部ナデ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。	ほぼ完形。
22	周溝南辺	土師器 高杯	口径：12.3 底径：18.2 器高：9.1	①砂粒多量：石英・チャート・赤色粒 ②良好 ③にぶい橙	有段高杯。脚部三方向に円形透し孔。 外面：杯部ヘラミガキ？脚部ヘラミガキ。裾部ヨコナデ。 内面：杯部ヘラミガキ？裾部ハケメ。	ほぼ完形。
23	周溝南辺	土師器 高杯	口径：(22.2) 器高：<6.9>	①砂粒多：石英・赤色粒・チャート・片岩 ②良好 ③橙	有稜高杯。 外面：下部ヨコにヘラケズリ。 内面：？	杯部１／４残
24	周溝南辺	土師器 高坏	口径：(12.0) 器高：<3.1>	①砂礫多量：片岩・石英・チャート ②良好 ③橙	外面：？ 内面：？	杯部１／４残
25	周溝南辺	土師器 高杯	底径：15.0 器高：<6.9>	①細砂粒 ②良 ③にぶい橙	脚部三方向に円形透し孔。 外面：ヘラミガキ。 内面：杯部ヘラミガキ？脚上部シボリメ。裾部ヨコナデ？	裾部１／２欠
26	周溝北西部	土師器 高杯	底径：13.3 器高：<6.4>	①細砂粒：黒色粒・軽石 ②良好 ③浅黄橙	三方向に円形透し孔。 外面：ヘラミガキ。 内面：ハケメ後、穿孔。裾部ヨコナデ。	脚部のみ。
27	周溝北辺	土師器 高杯	口径：10.6 底径：(12.6) 器高：10.4	①細砂粒 ②良好 ③灰白	脚部三方向に瓢箪形状の透し孔。 外面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラミガキ？脚部ヘラミガキ。 内面:ヨコハケメ後、ヘラミガキ。脚部ヘラケズリ後？ヘラミガキ。	口縁部一部欠、裾部大部分欠。
28	周溝南西部	土師器 高杯	口径：(11.7) 器高：<7.2>	①砂粒多：石英・黒色粒 ②良 ③灰白	外面：体部ヘラミガキ？ 内面：杯底面指頭痕。体部ヘラミガキ？台部指頭痕。	杯部２／３残
29	周溝南西部	土師 器高杯	底径：8.3 器高：<4.2>	①砂粒多：チャート・石英 ②良好 ③橙	低脚高杯。 外面：？ 内面：？	裾部一部欠
30	周溝南辺	土師器 器台	口径：18.0 底径：16.6 器高：16.2	①細砂粒多量：チャート・石英 ②良好 ③にぶい橙	結合器台。脚部４か所に円形透し孔。１か所に長方形状透し孔。体部７か所に円形透し孔。 外面：体部ヘラミガキ。受部ヘラミガキ？脚部ハケメ後、ヘラケズリ。 内面：ヘラミガキ？受部？脚部ヘラケズリ後、ヨコナデ？	口縁部・受部・脚裾部を部分的に欠。
31	周溝南西部	土師器 小型器台	底径：12.4 器高：<7.0>	①細砂粒多：石英・赤色粒 ②良好 ③にぶい黄橙	四方向に円形透し孔。内底面貫通孔。 外面：？ 内面：ヨコにヘラケズリ？	
32	周溝北東部	土師器 小型器台	底径：10.2 器高：<7.0>	①砂礫多：石英・片岩 ②良 ③橙	三方向に円形透し孔。 外面：ハケメ。 内面：ハケメ後、ナデ。	裾部１／２欠。
33	周溝南辺	土師器 小型器台	器高：<6.2>	①細砂粒多量：チャート・黒色粒 ②良 ③にぶい橙	四方向に円形透し孔。内底面に貫通孔。 外面：ヘラミガキ？ 内面：ヘラケズリ。	脚部片
34	周溝北西部	土師器 手捏ね土器	口径：6.2 底径：4.0 器高：4.7	①砂粒少：軽石 ②良好 ③黒	底部中くぼみ。 外面：ハケメ。 内面：ユビナデ。	ほぼ完形。
35	周溝南東部 覆土中	土師器 手捏ね土器	口径：(6.3) 底径：3.0 器高：4.5	①細砂粒少 ②良好 ③浅黄	外面：無調整。 内面：ユビナデ。	口縁部の大部分欠。

第８表　Ｈ－２号住居跡出土遺物観察表（１）

寸法の（　）は推定値、＜　＞は残存値。

No.	出土位置	器種	寸法（cm）	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法等	備考
1	周溝北西部	土師器 台付甕	口径：15.2 器高：<7.4>	①砂礫：石英・片岩 ②良 ③にぶい黄橙	Ｓ字状口縁。頸部内面にヨコハケメ。 外面：口縁部ヨコナデ。胴部羽状ハケメ後、肩部ヨコハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。胴部ユビナデ。	口縁部～肩部
2	周溝北西部	土師器 台付甕	口径：19.4 器高：<10.0>	①砂粒多：チャート・石英・赤色粒 ②良 ③にぶい黄橙	Ｓ字状口縁。頸部内面にヨコハケメ。 外面：口縁部ヨコナデ。胴部羽状ハケメ後、肩部ヨコハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。肩部部ユビナデ後、胴部ヘラケズリ。	口縁部１／４欠
3	周溝南部	土師器 台付甕	口径：(16.5) 器高：<8.8>	①砂粒多 ②良好 ③にぶい橙	Ｓ字状口縁。頸部内面にヨコハケメ。 外面：口縁部ヨコナデ。胴部羽状ハケメ後、肩部ヨコハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。胴部ユビナデ。	口縁部～胴上部１／３残
4	周溝南部 覆土中	土師器 台付甕	口径：(20.4) 器高：<2.7>	①砂粒多：石英・片岩・赤色粒 ②良好 ③淡白	Ｓ字状口縁。 外面：ヨコナデ。 内面：ヨコナデ。	口縁部１／７残
5	周溝北西部	土師器 台付甕	底径：8.0 器高：<6.7>	①砂礫：石英・片岩粒 ②良 ③橙	裾部内面折り返し。 外面：胴部ハケメ。台部ナデ後、ハケメ。 内面：胴底部ナデ。台部ユビナデ後、ナデ。	胴下部～台部一部欠。 内面周縁に炭化物。
6	周溝北西部 覆土中	土師器 台付甕	底径：(9.1) 器高：<6.7>	①砂粒多：石英チャート・赤色粒 ②良好 ③にぶい橙	裾部内面折り返し。 外面：台部ナデ後、不連続ナナメハケメ。 内面：胴部ヘラケズリ後、ナデ。台部ユビナデ後、ナデ。	裾部１／８残 内底面に多量の砂粒を含む粘土を付加。
7	周溝南部	土師器 台付甕	口径：(12.6) 器高：<7.4>	①砂礫：チャート・赤色粒・石英 ②良好 ③灰黄褐	く字口縁。 外面：口縁部ヨコナデ。胴部ハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。胴部ヨコナデ。	口縁～胴中位１／４残
8	周溝南部	土師器 台付甕	底径：7.9 器高：<5.4>	①砂粒多量：石英・チャート・黒色粒・赤色粒 ②良好 ③橙	外面：ナデ？ 内面：台部横にナデ。	
9	周溝南部	土師器 壺	口径：(14.8) 器高：<3.2>	①砂粒少：石英・片岩・赤色粒 ②良好 ③橙	二重口縁。 外面：ヨコナデ？全体を赤彩。 内面：ヘラミガキ？上段部を赤彩。	口縁部１／２残
10	周溝南部	土師器 壺	口径：(17.0) 器高：<2.6>	①細砂粒小：赤色粒 ②良好 ③にぶい橙	二重口縁。 外面：ハケメ後、口唇部ヨコナデ。 内面：ヘラミガキ。	

第９表　Ｈ－２号住居跡出土遺物観察表（２）

寸法の（　）は推定値、＜　＞は残存値。

No.	出土位置	器種	寸法（cm）	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法等	備考
11	周溝南部	土師器 壷	口径：(16.4) 器高：<3.0>	①砂礫多：ヴャート ②良好 ③橙	パレススタイル壷。口唇部外面に粘土帯を付し幅広の端面とし、４本？一組の棒状浮文を４単位？貼付。 外面：口縁部３条の横方向沈線文。頸部ハケメ。 内面：口縁部矢羽根状に櫛歯の刺突文。	口縁部１／８残
12	周溝南部	土師器 壷	底径：6.4 器高：<5.6>	①砂粒少：石英・軽石・チャート・赤色粒 ②良 ③暗灰黄	外面：胴部ハケメ後、ヘラミガキ。 内面：ナデ？	胴下部～底部残
13	周溝南部	土師器 高杯	口径：13.4 器高：<5.3>	①砂粒多：石英・片岩 ②良好 ③橙	外面：？全体を赤彩。 内面：杯部ヘラミガキ？脚部ヘラケズリ。	杯部１／２残
14	周溝南部	土師器 高杯	器高：<4.8>	①砂粒少：赤色粒・軽石 ②良 ③にぶい褐	脚部三方向に円形透し孔。 外面：ヘラミガキ。 内面：坏底部ヘラミガキ？脚部シボリメ。	杯底部～脚上半部残
15	周溝北西部 覆土中	土師器 小型器台	口径：(7.0) 器高：<2.0>	①砂粒多：チャート・片岩 ②良好 ③橙	外面：ヘラミガキ？ 内面：？	器受部１／２残
16	周溝南部 覆土中	土師器 小型器台	口径：(7.4) 器高：<1.3>	①砂粒多：石英・赤色粒 ②良好 ③橙	外面：？ 内面：？	器受部１／４残
17	周溝南部	土師器 小型器台	器高：<4.8>	①砂粒多：石英・チャート・軽石 ②良好 ③灰白	脚部に二段・三方向に円形透し孔。 外面：ヘラミガキ？ 内面：シボリメ。	脚上半部残
18	周溝南部	土師器 手捏ね土器	口径：5.2 底径：3.0 器高：3.8	①砂粒多：石英・チャート ②良 ③灰黄褐	外面：ナデ？ 内面：ユビナデ。	口縁部一部欠。
19	周溝北西部 覆土中	土師器 手捏ね土器	底径：(5.0) 器高：<4.6>	①砂粒少 ②良 ③灰白	器台ミニチュア。 外面：ハケメ。 内面：ユビナデ。	胴下部～台部１／２残

第 10 表　Ｈ－３号住居跡出土遺物観察表

寸法の（　）は推定値、＜　＞は残存値。

No.	出土位置	器種	寸法（cm）	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法等	備考
1	覆土中	土師器 甑	口径：(21.4) 底径：(8.0) 器高：(23.0)	①細砂粒：軽石・赤色粒 ②良好 ③にぶい黄橙	外面：口縁部ヨコナデ。胴部下から上にヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ。胴部縦・横にヘラケズリ後、ヘラナデ。底孔ヘラケズリ。	口縁部１／６、下胴部１／３残 ２片を図上復元。
2	覆土中	土師器 杯	口径：12.0 器高：6.1	①細砂粒：白色粒 ②良好 ③橙	須恵器模倣杯。口縁端部面取り。 外面：口縁部ヨコナデ？体部ヘラケズリ。 内面：口縁部ヨコナデ？体部ナデ？	口縁部１／２欠。 口縁部外面の一部に黒色の付着物。
3	貯蔵穴？内	土師器 椀	口径：13.8 器高：5.5	①細砂粒：赤色粒 ②良 ③橙	外面：ヘラケズリ？ 内面：口縁部ヨコナデ？体部ナデ？	口縁部一部欠。
4	ピット１内	土師器 杯	口径：(12.0) 器高：<4.8>	①細砂粒：白色粒・赤色粒 ②良好 ③にぶい褐	内斜口縁。 外面：口縁部ヨコナデ。体部ヘラケズリ。 内面：ヘラミガキ。	口縁～体部１／８残

第 11 表　土坑出土遺物観察表

寸法の（　）は推定値、＜　＞は残存値。

No.	遺構名	器種	寸法（cm）	①胎土　②焼成　③色調	成・整形技法等	備考
1	Ｄ－６号	土師器 壷	口径：23.1 頸径：11.2 器高：<7.4>	①砂礫少：軽石・石英 ②良好 ③にぶい橙	有段口縁加飾壷。口唇部外面に粘土帯を付加した幅広の端面に、４本一組の棒状浮文を５単位？貼付。段部外面には４単位貼付。 外面：ハケメ後ヨコナデ？頸部凸帯に櫛歯の連続刺突。段部の棒状浮文以下を赤彩。 内面：ヘラミガキ後、口縁部に矢羽根状に３列の櫛歯の刺突文。	口縁～頸部３／５残
2	Ｄ－６号	土師器 壷	頸径：8.1 器高：<3.9>	①細砂粒多量：石英・チャート・軽石 ②良好 ③橙	頸部円筒状。 外面：ハケメ。 内面：ハケメ。胴部ユビナデ。	頸部
3	Ｄ－６号	土師器 壷	底径：(5.8) 器高：<4.9>	①細砂粒多量：石英・チャート・黒色粒 ②良好 ③にぶい橙	外面：ナデ？ 内面：ハケメ後ナデ。	底部１／４残
4	Ｄ－14号	土師 器高杯	口径：(22.2) 底径：(11.6) 器高：(14.4)	①細砂粒少 ②良 ③にぶい黄橙	脚部に円形透し孔。三方向？ 外面：体部ヘラミガキ。脚部ナデ？ 内面：体部ヘラミガキ？脚部ナデ？	１／５残 ３片を図上復元。 杯部内面に黒色の付着物。
5	Ｄ－16号	土師器 壷	口径：(10.4) 底径：5.8 器高：19.5	①砂礫多量：石英・軽石・赤色粒 ②良 ③にぶい橙	肩部内面に粘土紐巻上げ痕。 外面：ナデ？ 内面：口縁部ヘラナデ？胴部ユビナデ後ナデ？	１／２残 弥生系土器か。

Ⅶ　まとめ

調査において気付いた点を記してまとめとする。なお、隣接地点で同時に調査された南部拠点地区遺跡群№11について、調査担当者の永井智教氏より種々の資料を提供いただき参考とさせていただいた。

1　平安時代末以降

条里型地割りについて　（第40図）

Ａs－Ｂ下水田は、調査区Ａ、Ｂ、Ｃの範囲の全域に広がっていたと考えられる。この中で東西大畦畔が３条（Ａ区・１号、Ｂ区・２号、Ｃ区・３号）、南北大畦畔が２条（Ｃ区・１号及び２号）確認された。これらを隣接の南部拠点地区遺跡群№４、№７、№８、№11、さらに北方の横手湯田遺跡などの調査結果と重ね合わせると第40図[(1)]のようになった。これにみるように周辺では109～110ｍ間隔の大畦畔で区画された条里型地割りが整然と施行されている。今回検出された１号から３号の東西大畦畔、さらに２号南北大畦畔については、この周辺の条里区画の基準に整合していた。しかしＢ区からＣ区にかけて250ｍ以上の間で検出された１号南北大畦畔については、この基準に合致していない。一方で、№７の調査で検出された南北大畦畔から想定された区画とは、110ｍほどの間隔や走向の方位が適合していた。本調査区の１号南北大畦畔や、№７－１ａ区西端部と№８－Ｂ区東端部などで検出された南北大畦畔は、その規模や形態などからみて大畦畔であることは確実である。過去にこれに似た状況で区画の基準に合致しない南北大畦畔が、900ｍほど東方の下阿内前田遺跡でも確認されている。いずれも東西大畦畔の方位は一致しているので、異なる区画基準であったとは考えにくい。坪界を構成しない内部の区画割りのための畦畔であったものか、あるいは条里施行の時間的な差などにより区画の基準が異なったものかなど、さらなる今後の検討が必要である。

第40図　条里型地割り想定図

土坑について

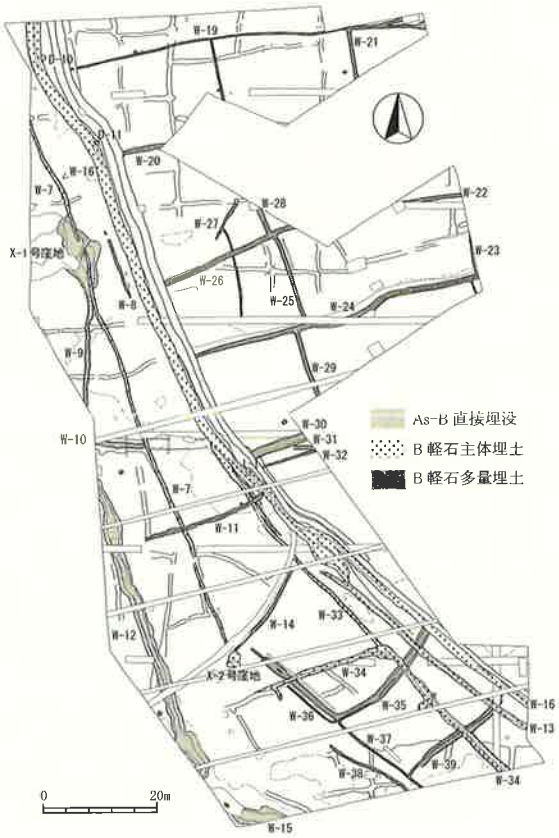
Ｄ-10 号土坑と 11 号土坑については、Ｂ軽石を多量に含む埋土で形態・規模も同様のものであった。また重複するＷ-16 号溝との位置関係も共通しており、Ｉ－１号井戸跡がやはり似た状況にあることからみて、Ｗ-16 号溝の流水や湧水を利用した溜井状の井戸と考えられる。Ｄ－７号土坑も立地は異なるが似た形態で、同様に溜井施設とみられる。後述する東側微高地の畑地、あるいは西側の微高地への灌漑に利用するための便宜的な施設ではなかったかとみられる。

溝跡について　（第 41 図）

Ｃ区では平安時代末以降の溝跡が多数検出されたが、このうち平安末から中世にかけての溝跡は、埋土の様子から大きく３時期に区分できた。最初の時期はＡs-Ｂの降下で直接埋没しているもので、Ｗ－２号・４号・６号・９号・10 号・12 号・15 号・27 号 31 号・38 号溝である。このうちＷ－２号・６号・10 号・31 号溝については大畦畔に伴う溝跡であった。Ｗ－９号溝はＣ区の谷地部に位置し、Ｘ－１号窪地から南方へ派生していた。Ｗ-12 号・15 号溝は谷地の西辺を走り、規模・形態が同様で一連のものともみられる。さらに規模は異なるが前記のＷ－９号溝とも走向が一致し、連続している可能性がある。これらは、流水などの痕跡は認められなかったが溜井状のＸ－１号窪地からの水路であった可能性が考えられる。排水のための溝跡であろう。Ｗ-27 号・38 号溝は水田の畦畔を切って不定方向に走っており、溝跡としたが非常に浅く底面は凹凸が目立つものであった。№.11 で想定されたような道の跡の可能性もある。いずれにしてもこれらの溝は水田面や畦畔を切って構築されていることから、この時点ではこれらの区画は水田として耕作されていなかったことになる。

次は、Ａs-Ｂの降下からさほど時間を隔てない時期に開鑿された溝で、第Ⅹ層あるいは第Ⅸ層由来とみられるＢ軽石を主とする暗褐色の混土層で埋まったもので、Ｗ－７号・13 号・16 号・33 号・34 号溝である。Ｗ－７号溝は北の調査区外から続いており、Ｘ－２号窪地に接続して終わっているようであった。Ｗ-16 号溝は、調査区内の谷部と微高地の地形の変換線を南北に縦断する規模の大きい溝で、水流も相当あったことが知られた。その後の近世から現代にかけてのＷ-17 号溝がこれを忠実にトレースして走っていることや、東西方向の溝跡がすべてＷ-16 号溝を基準としているようであることなど、後世の土地利用にまで大きな影響を有した溝跡である。

最後が、軽石の混入量がやや少ないＢ混土で埋没している溝で、第Ⅶ層の黄橙色砂質土の影響とみられる黄灰褐色を呈するＢ混土層であった。Ｗ－８号・11 号溝・14 号・19 号～26 号・28 号～ 30 号・32 号・35 号～ 37 号・39 号溝と最も多く、いずれも規模は小さい。このうちＷ-11 号溝は流砂の堆積などから排水路と考えられた。その他の多くは調査区東半の微高地上に構築されており、Ｌ字形に屈曲したり、Ｔ字形、十文字に交差するものが多かった。底面の高低差もほとんどなく、水路というよりは区画のための溝とみられ、畑地の境界溝と考えられた。第 41 図のとおり区画は東西に長い長方形を基調としているが、すでに条里区画とは異なり地形に応じた区画となっているようである。中世以降は東側の微高地部分は畑地としての利用であったと考えられる。



第 41 図　Ｃ区平安時代末以降の溝跡位置図

2　古墳時代

後期の住居跡について

Ｈ－３号住居は古墳時代後期の住居跡であった。 №.11の調査区でも同時期の土器がまとまって出土しており、周辺部の過去の調査では、徳丸仲田遺跡Ｉ区で後期の住居跡が１軒検出され、河道跡からは須恵器杯蓋などが出土している。西田遺跡では土坑・ピットが検出され、溝跡からも後期の土器が出土し、横手湯田遺跡Ｃ区とＤ区では土器が集中する部分が検出された。このほかにも周辺部で後期の土器の出土があり、いずれも後期でも比較的早い段階の時期とみられる。住居跡自体の検出例は本遺跡で２例目であるが、周辺でのこのような状況を考えると、古墳時代後期の初め頃には微高地上の各所に数軒単位程度で住居が散在していたことがうかがわれる。

前期の住居跡について

前期のＨ－１号・２号住居は外周溝部分のみの検出で、内部の構造は不明である。このような浅く不整形な外周溝をめぐらす形態の住居の検出例として、隣接する№.11地点、北西900ｍほどの横手湯田・横手早稲田遺跡、南方の玉村町の上之手八王子遺跡、太田市新田の唐桶田遺跡、さらに周溝の形態が異なるが伊勢崎市三和工業団地Ｉ遺跡などがある。低地帯に立地する該期の住居跡に認められ、特に前橋台地南部で多くの発見例がある。Ｈ－１号・２号住居はともに隅丸方形の平面形を基調とするとみられ、Ｈ－１号住は内法の一辺が11ｍで、住居の本体部分も大型であったとみられる。

遺物は、Ｈ－１号・２号住居とも良好な土器群が出土した。特に大型のＨ－１号住居では土器の出土量も多かった（第32～35図）。台付甕には、Ｓ字甕１～８とく字甕９～12がある。破片も含めＳ字甕が主体であり、すべて外面肩部にハケによる平行線が施され、１～４は口縁端部が外反して内面に平坦面をつくる。１は頸部内面にヨコハケメを残す。壷は、折り返し口縁で球形胴の13と内湾口縁の14がみられ、15は下ぶくれの胴部である。小型壷は口縁部が外反する17と内湾口縁の18があり、胴部は球形化している。脚付の鉢19は大型で口縁部が大きく内湾する。類例が横手早稲田遺跡で出土している。鉢20は有段口縁を持ち底部は小さな平底である。坏21は厚く粗雑なつくりで、弥生系の器種である。有段高坏22は杯部は浅くなっており、脚裾部が大きく開く。有稜高坏23は口縁が大きく開き稜は弱い。25も裾が大きく開く脚部で、有稜高坏の脚部とみられる。高坏27・28は椀状の杯部で、在地の弥生系の土器とみられる。結合器台30は受け部が鍔状に大きく発達した特異な形態であるが、似た器形が太田市中溝・深町遺跡で見られる。小型器台31は脚部にわずかに屈折が残っている。Ｈ－２号住居（第36・37図）では、Ｓ字甕１～６とく字甕７・８があり、やはりＳ字甕が主体である。１～３は頸部内面にヨコハケメを残す。壷は口縁部片のみだが伊勢型二重口縁の10やパレス壷の11がみられる。11は口縁部内面の平坦面が下がり気味でやや新しい様相とみられる。有段高坏13は杯部が浅めである。小型器台は受け部が皿状の形態である。なお、両住居跡とも手捏ね土器を数点ずつ出土していることは興味深い。

以上のようにく字甕やＨ-1号住居の結合器台30、さらにわずかな在地系とみられる土器などを除いて、ほとんどの器種が東海系といわれる土器であった。Ｓ字甕については、井野川流域での田口一郎氏による分類・編年[(2)]が示されており、これによればＨ－１号住居、Ｈ－２号住居ともⅡｂ類に比定されるものが主であり、両住居はほぼ同時期と考えられる。また、Ｓ字甕の故地である濃尾平野の廻間編年ではＨ－１号住居の３はＢ類の新段階に相当し、廻間Ⅱ式の新段階にあたる[(3)]。全体に壷や鉢などに内湾口縁の形態を残すものの、Ｈ－１号住居17・18は球形の胴部でやや新しい様相であり、有段高坏や有稜高坏は杯部が浅くなり、パレス壷もやや時期が下るとみられることなどから、廻間Ⅱ式期でも末頃に位置づけられ３世紀末の年代が与えられる[(4)]。

出土土器の様相からは、石田川式土器様式の確立される直前の時期にあたるとみられ、№.11地点や横手湯田・横手早稲田遺跡の集落とともに、この前橋台地南部の低地帯に最初に進出した集団の一部と考えられる。この後、

県内平野部を中心に広範囲に石田川式土器が展開し、前橋八幡山古墳や元島名将軍塚古墳などの大型古墳が築造されていくのであろう。

土坑について

前期のD－６号、14号～17号土坑のうち、D－６号土坑では底面から加飾壷の口縁部が出土した。棒状浮文を口縁部に二段に貼付し、内面に矢羽状の刺突文、外面には赤彩が施されている。器形は柳ヶ坪型壷の二重口縁に近い形態で、パレス壷とは異なる。頸部の形態は異なるがこれに似た口縁形態で棒状浮文を口縁端部に貼付した加飾壷が、パレス壷とともに高崎市貝沢柳町遺跡の方形周溝墓から出土している。加飾壷は特殊な土器であったとみられることから、本土坑については墓壙であって、加飾壷はこれに副葬あるいは供献された土器ではないかと考えられる。

D－16号土坑では、埋土上部から直口縁壷の半欠品が出土した。器形や、内面の輪積み痕など弥生系の土器と考えられる。土壙墓に供献されたものとみられ、H－１号住居廃絶後の構築とみられる。

D－14号、15号土坑はH－２号住居にやや先行する土坑で、D－17号土坑は倒木痕の可能性が強い。

今回の調査では、古墳時代前期は住居跡２軒と土壙墓２基が検出された。住居跡がさらに東にも存在する可能性はあるが、いずれにしても小規模な集落であったとみられる。同時期の集落は、谷地部を隔てて西に隣接するNo.11で９軒が、横手湯田・横手早稲田遺跡でも10軒ほどの集落跡が発見されている。そのほか周辺部でも該期の土器の出土が認められた地点は多く、低地に面した微高地上にいくつかの小集落が分布していたと考えられ、その景観は古墳時代後期と似た状況であったとみられる。

注（１）図のデータを南部拠点地区遺跡群No.11担当者の永井智教氏に提供いただいた。
（２）田口一郎 1981「Ｓ字状口縁台付甕の分類と編年」『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会
（３）赤塚次郎氏のご教示による。
（４）同　上

主な参考文献

前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009『南部拠点地区遺跡群No.１』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009『南部拠点地区遺跡群No.２』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010『南部拠点地区遺跡群No.３』
前橋市教育委員会 2010『南部拠点地区遺跡群No.４』
前橋市教育委員会 2010『南部拠点地区遺跡群No.５』
前橋市教育委員会 2011『南部拠点地区遺跡群No.６』
前橋市教育委員会 2014『南部拠点地区遺跡群No.７』
前橋市教育委員会 2014『南部拠点地区遺跡群No.８』
前橋市教育委員会 2014『南部拠点地区遺跡群No.９』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009『南部拠点地区遺跡群No.１』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2009『南部拠点地区遺跡群No.２』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 2010『南部拠点地区遺跡群No.３』
前橋市教育委員会 2010『南部拠点地区遺跡群No.４』
前橋市教育委員会 2010『南部拠点地区遺跡群No.５』
前橋市教育委員会 2011『南部拠点地区遺跡群No.６』
前橋市教育委員会 2014『南部拠点地区遺跡群No.７』
前橋市教育委員会 2014『南部拠点地区遺跡群No.８』
前橋市教育委員会 2014『南部拠点地区遺跡群No.９』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998『横手湯田Ⅱ遺跡・西田Ⅱ遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1998『横手湯田Ⅲ遺跡・徳丸仲田Ⅱ遺跡・西善尺司Ⅱ遺跡・下増田越渡Ⅲ遺跡』
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1999『西田Ⅲ遺跡』
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『横手南川端遺跡・横手湯田遺跡』
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『西田遺跡・村中遺跡』
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『鶴光路榎橋遺跡』
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『徳丸仲田遺跡』
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001『下阿内壱町畑遺跡・下阿内前田遺跡』
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001『亀里平塚遺跡・横手宮田遺跡・横手早稲田遺跡・横手南川端遺跡』
田口一郎 1981「Ｓ字状口縁台付甕の分類と編年」『元島名将軍塚古墳』高崎市教育委員会
赤塚次郎 1990「Ⅴ．考察」『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター
飯島義雄 1998「古墳時代前期における「周溝を持つ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号
深沢敦仁 1998「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究ＸＶＩ』庄内式土器研究会
坂口　一 1999「周溝の巡る住居について」『三和工業団地Ⅰ遺跡(2)』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

写 真 図 版

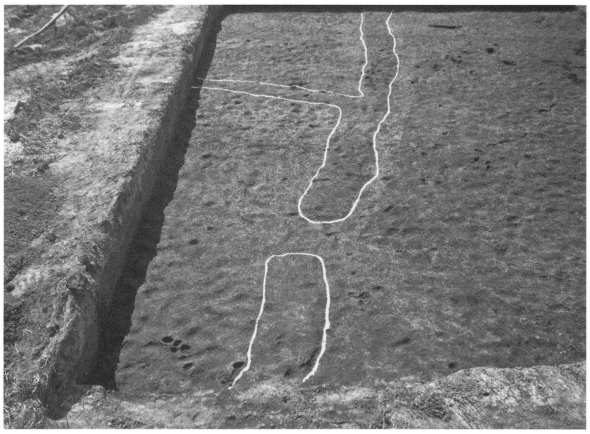
調査地から榛名山方向を望む（南東から）

Ａ区（左）・Ｂ区（右）全景（右が北）

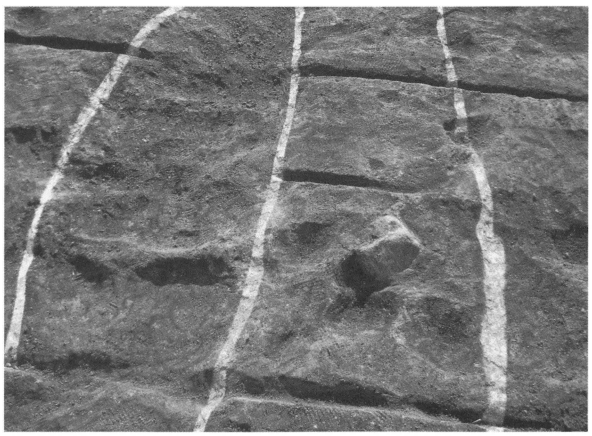
PL. 2　A区

A区 全景（右が北）

As-B下水田　1号東西大畦畔・W－2号溝跡（上が北）



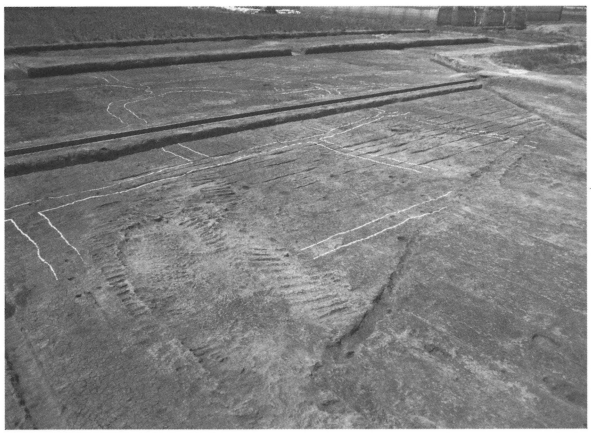
As-B下水田1号東西大畦畔　水口1（東から）



As-B下水田1号東西大畦畔S－1（東から）

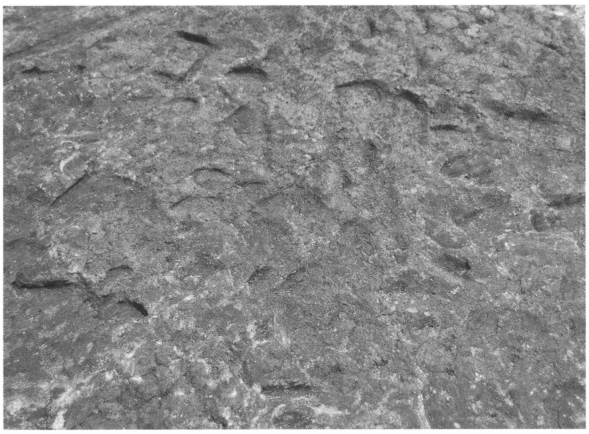
As-B下水田1号東西大畦畔　S－2断ち割り（東から）

As-B下水田1号東西大畦畔・W－2号溝跡 土層断面（西から）



A区東半部 As-B下水田（南東から）

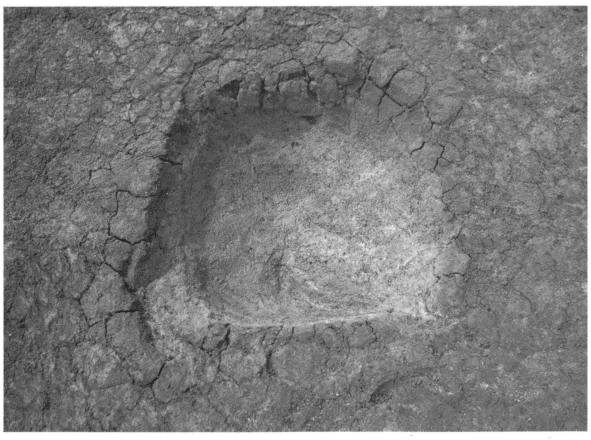
A区西半部 As-B下水田（西から）



As-B下水田面 耕具痕（北西から）

A区 遺物出土状態（北東から）

D－1号土坑（東から）

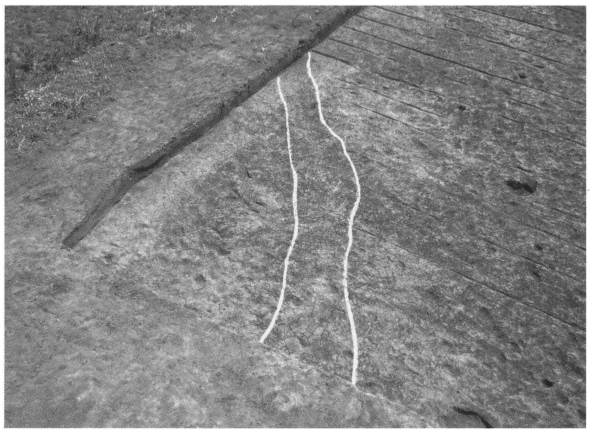


D－2号土坑（南東から）

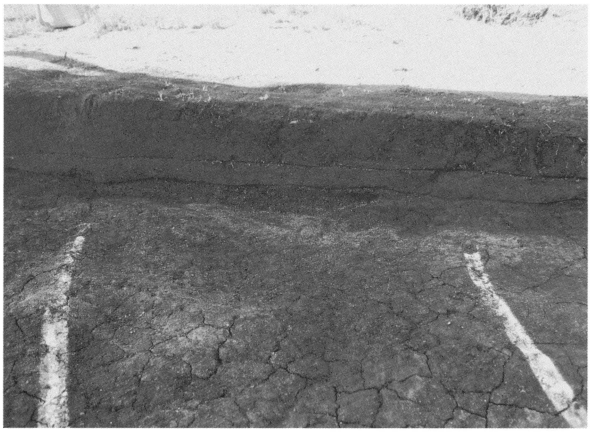
W－1号溝跡（南から）

ＰＬ．４　Ａ・Ｂ区

Ｗ－３号溝跡（北から）



Ｗ－４号溝跡（北西から）



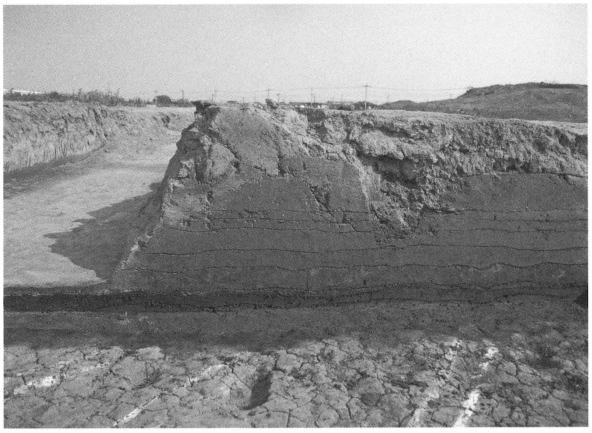
Ｗ－４号溝跡 土層断面（南から）

Ａ区 基本層序（東から）

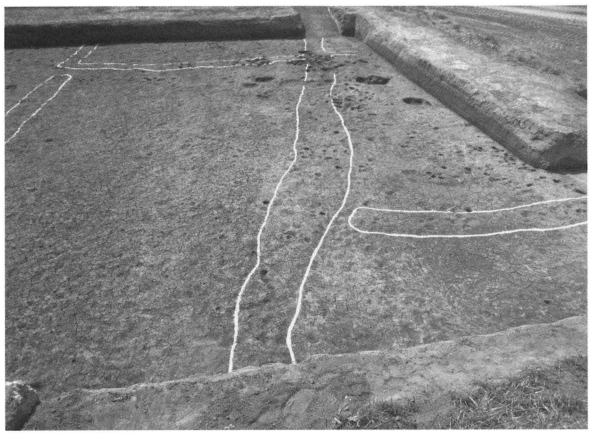
Ｂ区 全景（右が北）

Ａs-Ｂ下水田１号南北大畦畔・Ｗ－６号溝跡（右が北）

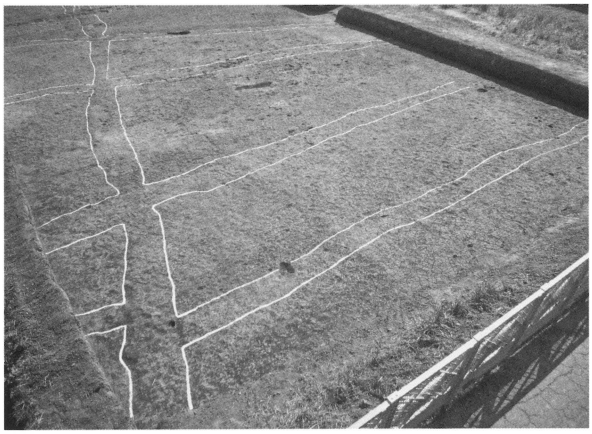
Ａs-Ｂ下水田１号南北大畦畔・Ｗ－６号溝跡（北から）



Ａs-Ｂ下水田1号南北大畦畔・Ｗ－６号溝跡 土層断面Ｆ（北から）

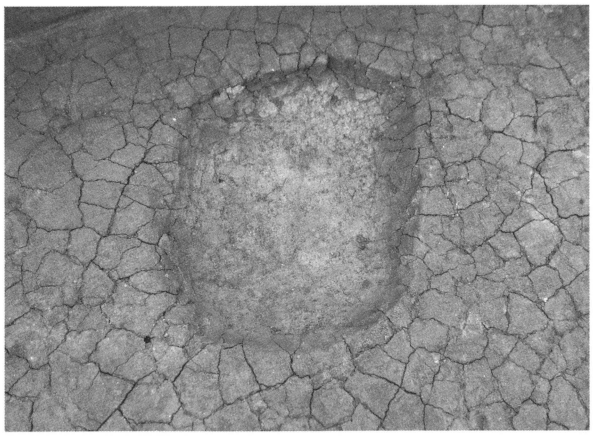


Ａs-Ｂ下水田２号東西大畦畔（東から）



Ｂ区南半部 Ａs-Ｂ下水田（北東から）

Ｄ－３号土坑（西から）



Ｄ－４号土坑（南から）

Ｗ－５号溝跡（西から）

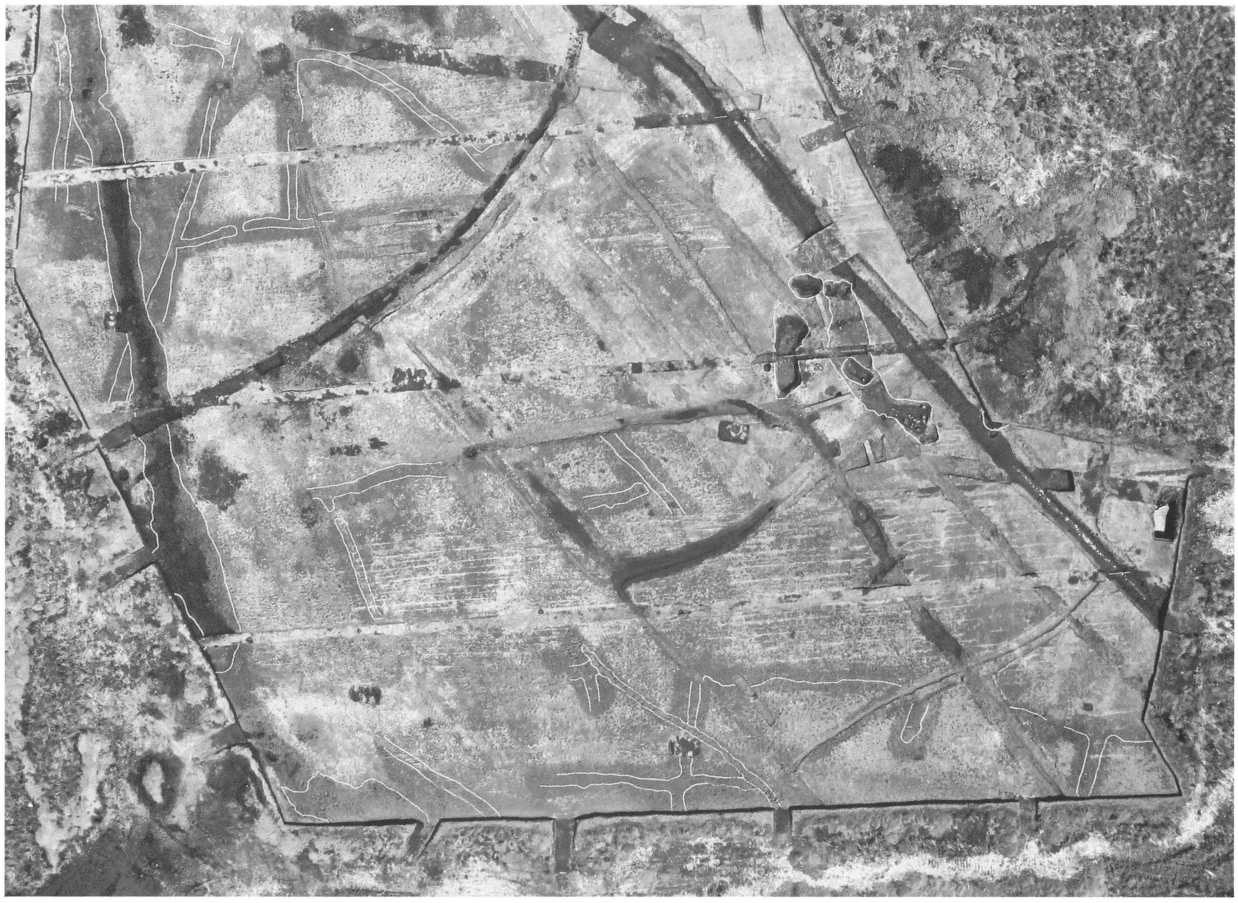
PL. 6　C区

C区 全景（上が北）

C区 全景（南から）

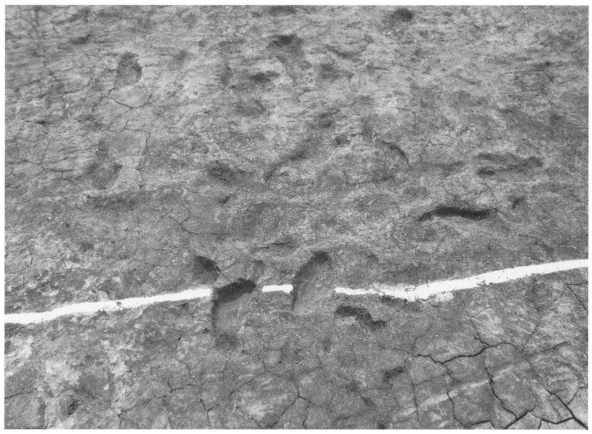
C区北半部 As-B下水田と1号南北大畦畔（上が北）

PL. 8　C区



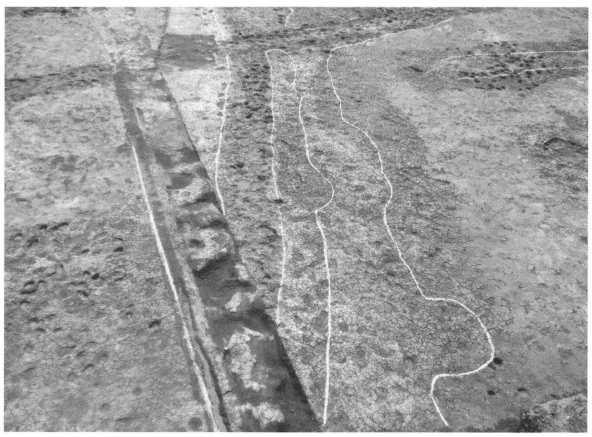
C区南半部　As-B下水田とH－2号・3号住居跡（上が北）

As-B下水田1号南北大畦畔（南東から）

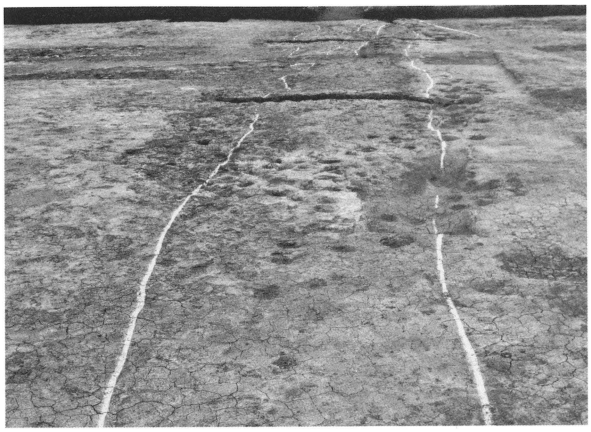


As-B下水田1号南北大畦畔　西脇の足痕（東から）

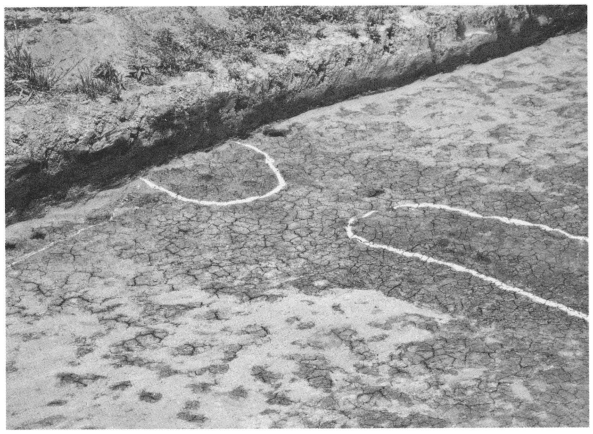
As-B下水田1号南北大畦畔　断ち割りA（南から）



As-B下水田3号東西大畦畔　西半部・W－10号溝跡（西から）

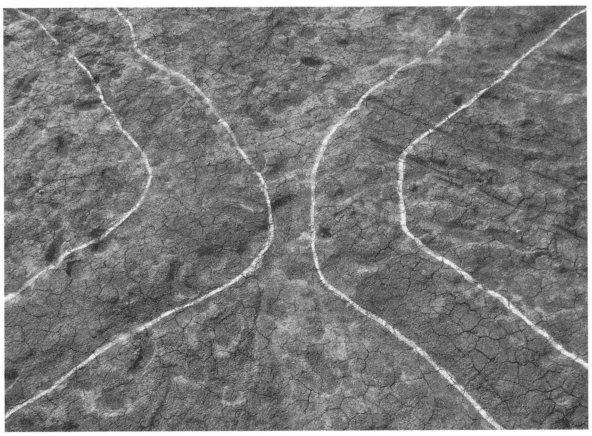


As-B下水田３号東西大畦畔・W－10号溝跡（東から）



As-B下水田 水口１（南東から）

As-B下水田 水口３（南東から）



As-B下水田 水口５（南東から）

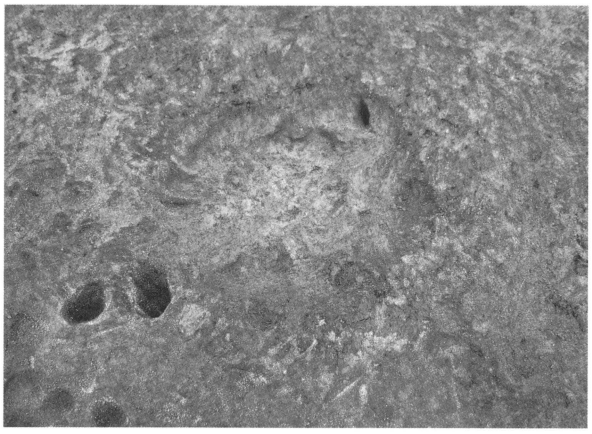
As-B下水田 ２号南北大畦畔 水口６（南から）

As-B下水田 水口７（南から）

As-B下水田面 凹凸状況（西から）

As-B下水田 畦畔断ち割りD（北から）

PL. 10　C区



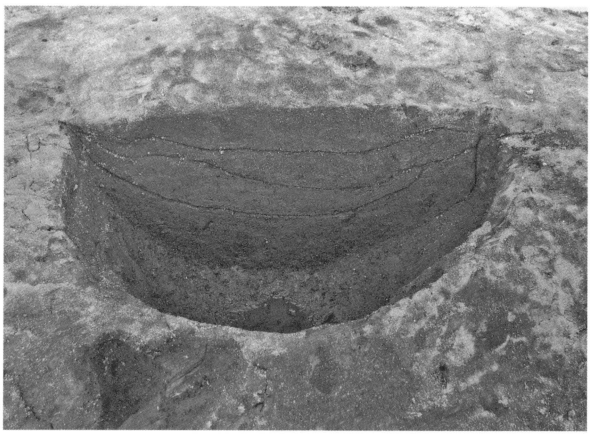
D－5号土坑（南から）

D－7号土坑（北から）

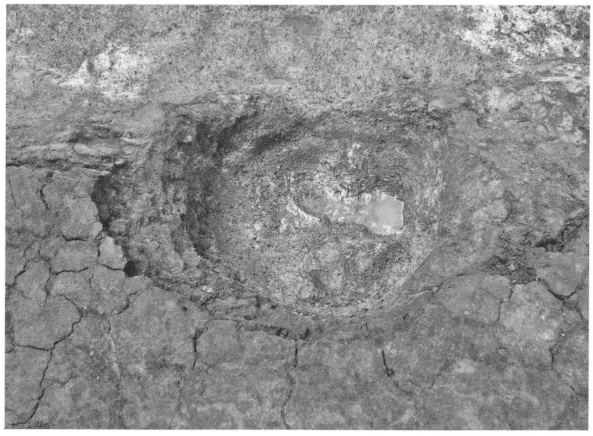
D－8号土坑（南東から）

D－9号土坑（東から）

D－10号土坑（東から）

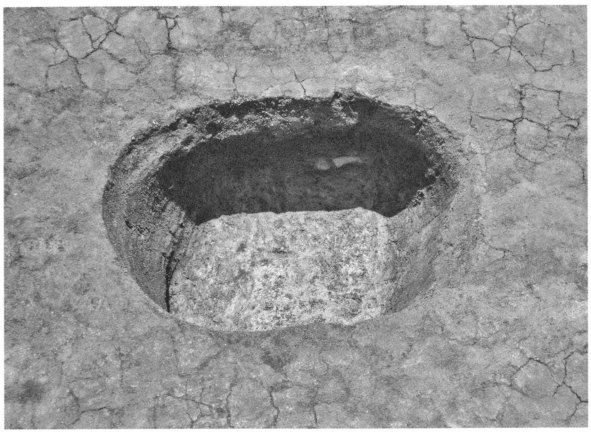


D－10号土坑 土層断面（西から）

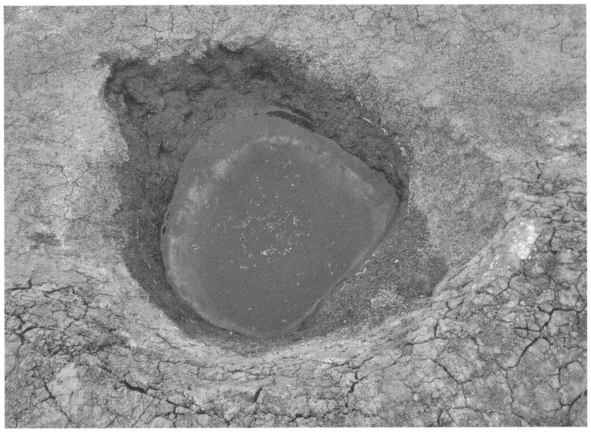


D－11号土坑（東から）

D－12号土坑（南から）



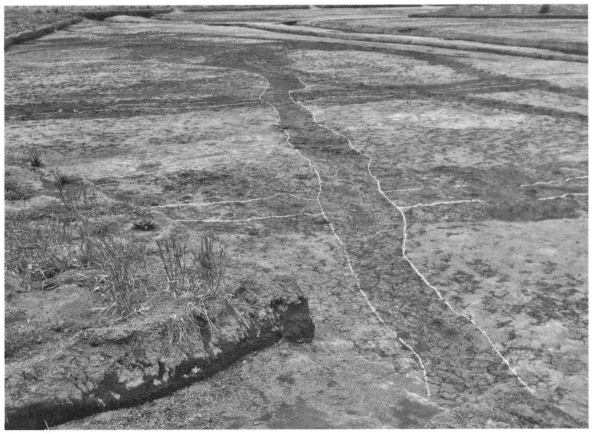
D－13 号土坑（北から）



I－1 号井戸跡（北東から）

W－7 号溝跡（北から）

W－8 号溝跡（南から）



W－9 号溝跡・X－1 号窪地（南西から）

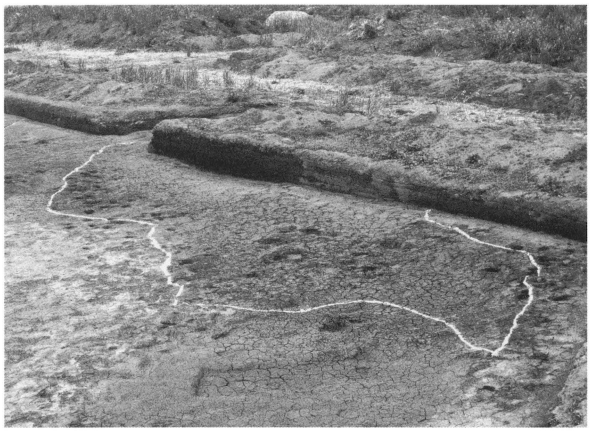
W－11 号溝跡（東から）

W－12 号溝跡（北から）

W－13 号溝跡（中）、16 号・17 号溝跡（右）（南東から）

ＰＬ．12　Ｃ区

Ｗ－ 14 号溝跡（北東から）



Ｗ－ 15 号溝跡（北西から）

Ｗ－ 15 号溝跡 土層断面（北西から）

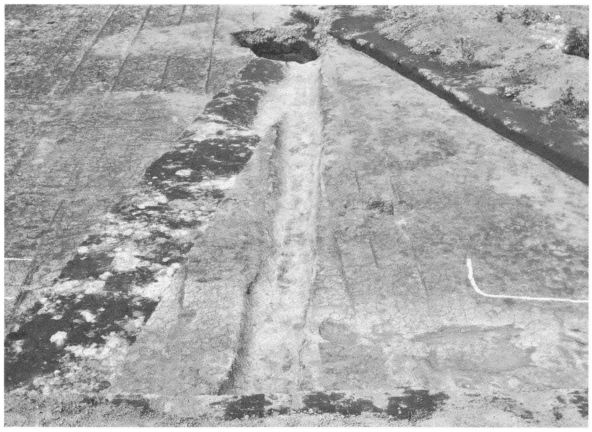
Ｗ－ 16 ～ 18 号溝跡 北端部（北から）

Ｗ－ 16 ～ 18 号溝跡 土層断面Ａ（南から）

Ｗ－ 16 号・17 号溝跡 中央付近屈曲部（南から）

Ｗ－ 19 号溝跡、21 号溝跡（東から）

Ｗ－ 20 号溝跡（東から）



W－22 号溝跡（東から）

W－22 号溝跡 土層断面A（西から）

W－23 号溝跡（南から）(2)

W－24 号溝跡（東から）

W－24 号・25 号・29 号溝跡 交差部（南から）

W－25 号・26 号・28 号溝跡（北から）

W－26 号溝跡 土層断面A（西から）

W－27 号溝跡（北から）

Ｗ－30号溝跡（西から）

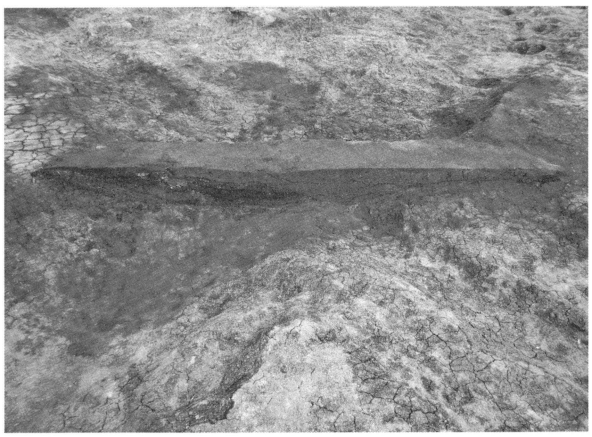
Ｗ－31号（右）・32号（左）溝跡（東から）

Ｗ－31号・32号溝跡 土層断面（西から）

Ｗ－33号溝跡（南から）

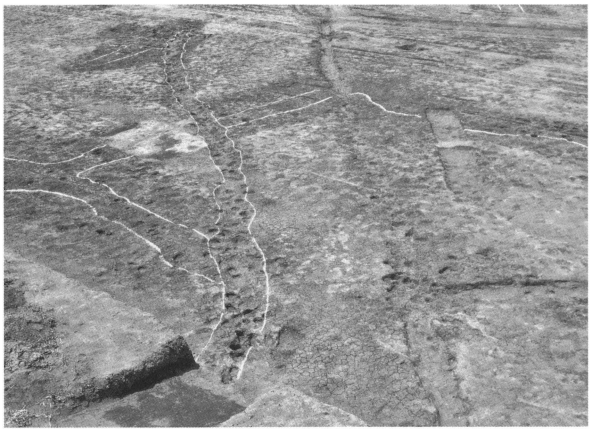
Ｗ－34号溝跡 東辺（南東から）

Ｗ－34号溝跡 東辺最深部（南東から）

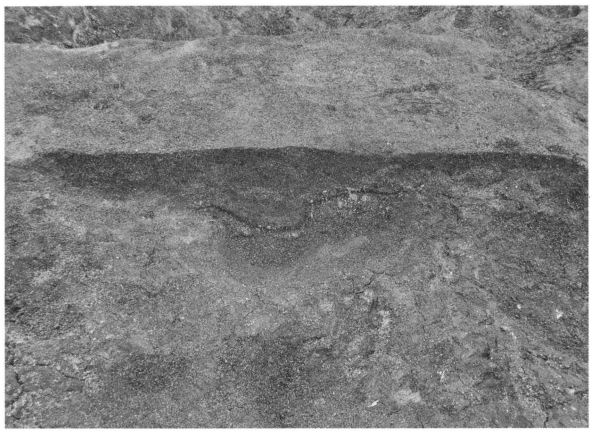


Ｗ－34号・39号溝跡 交差部土層断面Ａ（北西から）

Ｗ－35号溝跡 西辺、36号溝跡（南東から）



W－37号溝跡 西辺（右）・38号溝跡（左）（東から）

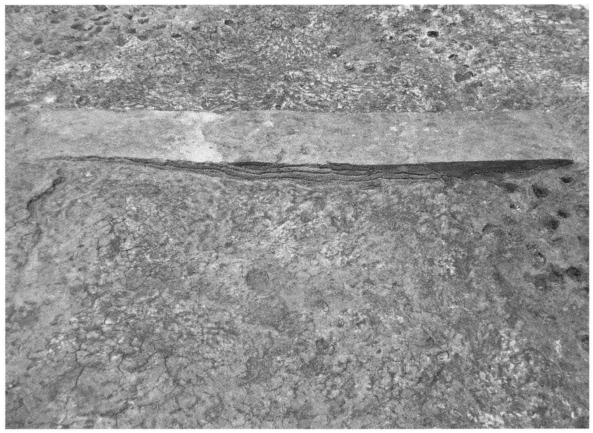


W－38号溝跡 土層断面A（南東から）

W－39号溝跡（西から）

W－40号（左）、16号・17号（右）溝跡（北から）

X－1号窪地・W－9号溝跡（北から）



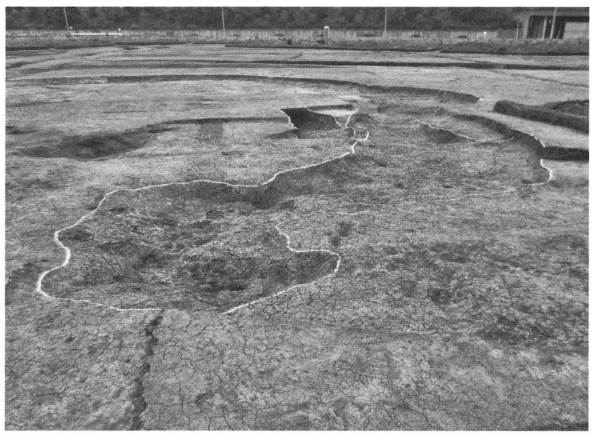
X－1号窪地 土層断面（南から）

X－2号窪地（南東から）

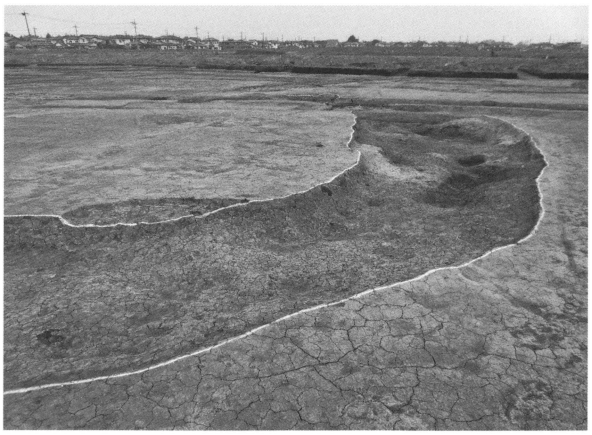
X－2号窪地 土層断面（南東から）

Ｃ区、古墳時代遺構 全景（右が北）

Ｈ－１号住居跡（東から）

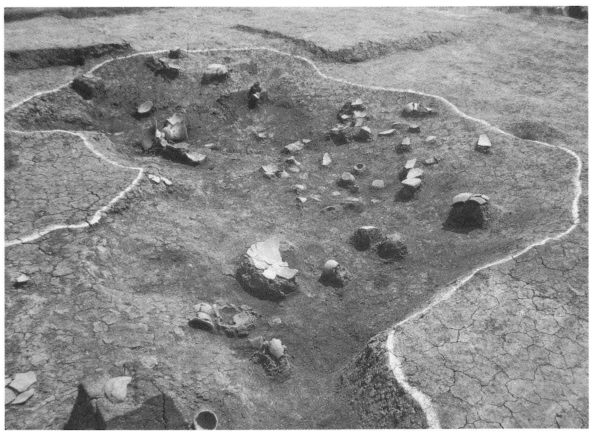


Ｈ－１号住居跡 外周溝南辺（南から）



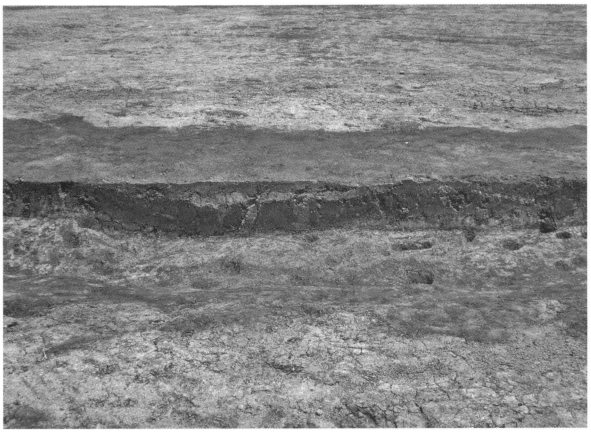
Ｈ－１号住居跡 外周溝東辺（南から）

Ｈ－１号住居跡 外周溝北辺（北西から）



H－１号住居跡 外周溝南辺遺物出土状態（北東から）

H－１号住居跡 外周溝北辺遺物出土状態（南から）



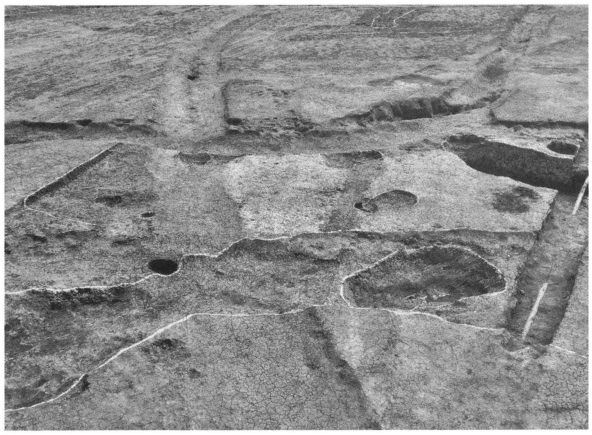
H－１号住居跡 外周溝北辺部土層断面（西から）

H－２号住居跡（ 西から）

H－２号住居跡 外周溝南西部（北西から）

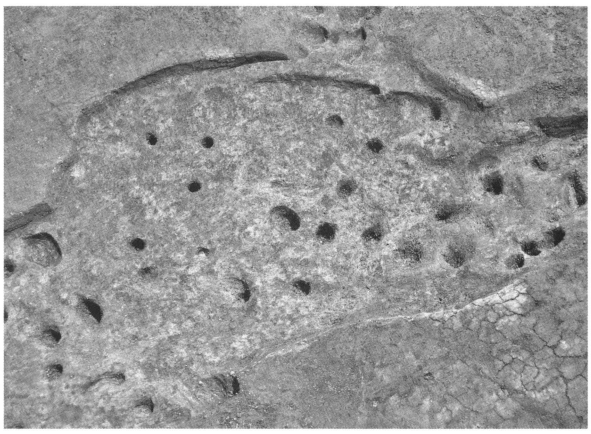
H－２号住居跡 外周溝南西部遺物出土状態（西から）

H－２号住居跡 外周溝土層断面Ａ（南から）



H－３号住居跡（東から）

Ｈ－３号住居跡 遺物出土状態（北から）



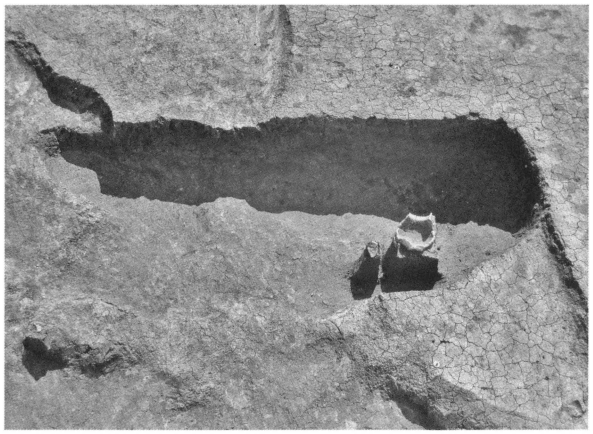
Ｄ－６号土坑（西から）

Ｄ－６号土坑 遺物出土状態（西から）

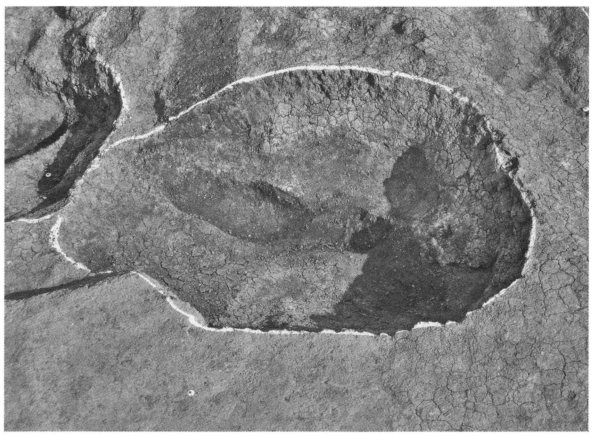
Ｄ－14号土坑（南から）

Ｄ－14号土坑 土層断面（南から）

Ｄ－15号土坑（西から）

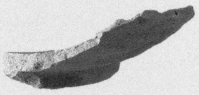


Ｄ－16号土坑（東から）



Ｄ－17号土坑（北から）

A区出土遺物



1

C区出土遺物

1

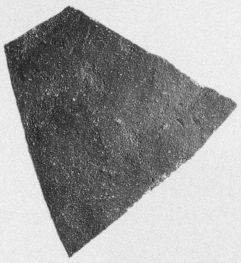
溝跡出土遺物

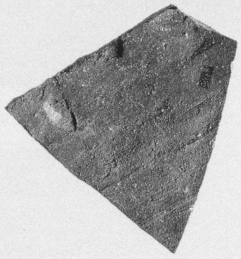
W-16　1

W-16　2

W-16　3

W-16　4

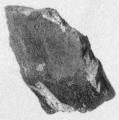




W-16　5

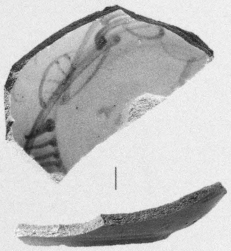
W-17　1

W-18　1

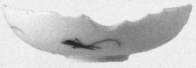


W-18　2

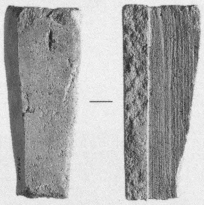
W-18　3



W-18　4



W-18　5



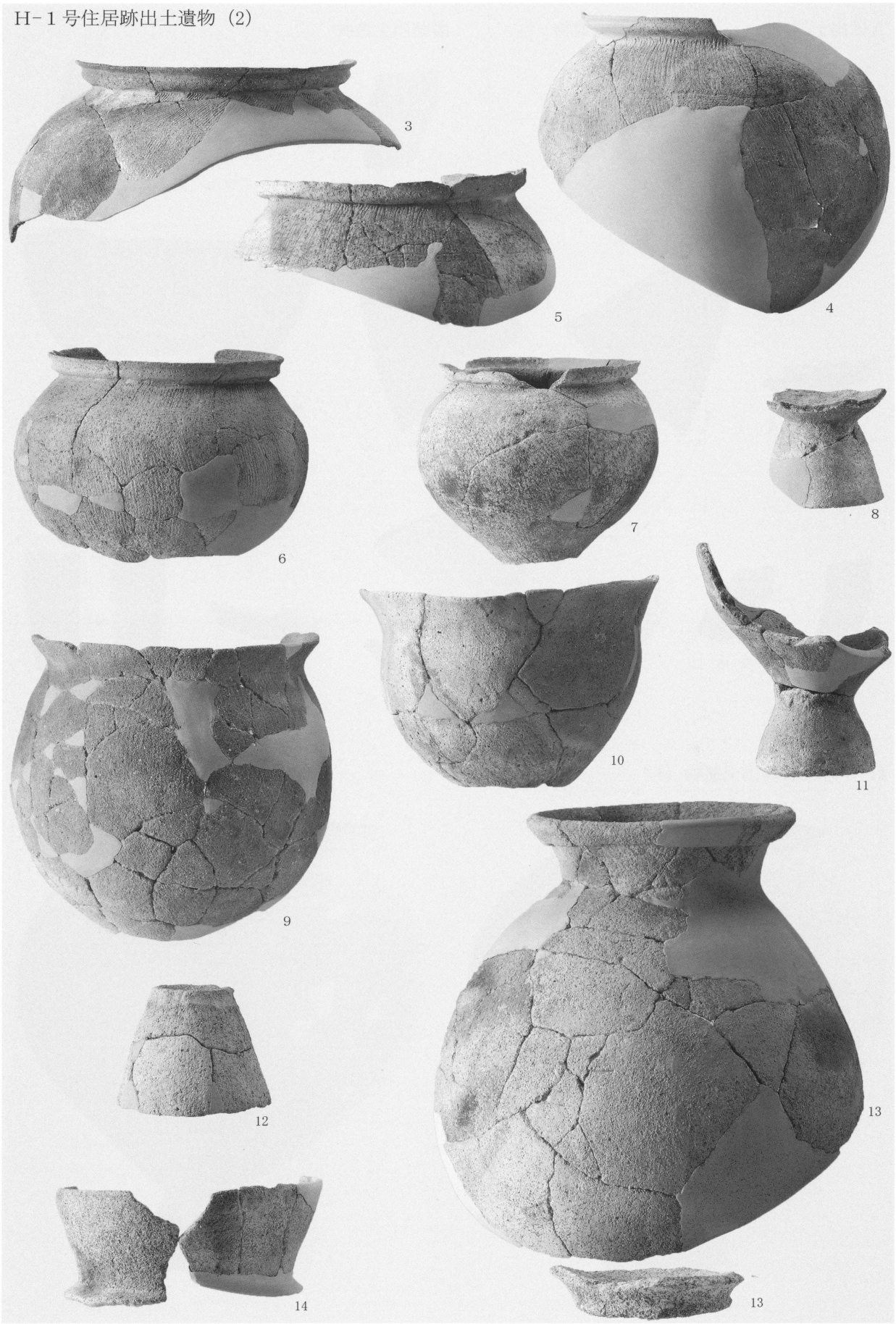
W-18　6

H-1号住居跡出土遺物（1）

1

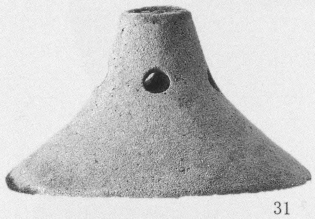
2

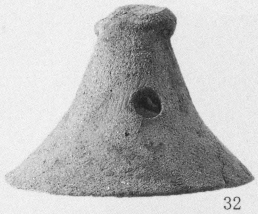
H-1号住居跡出土遺物（2）

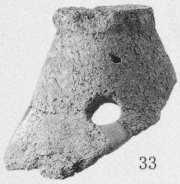


H-1号住居跡出土遺物（3）

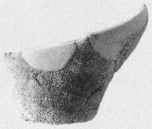
Ｈ１－号住居跡出土遺物（4）


31

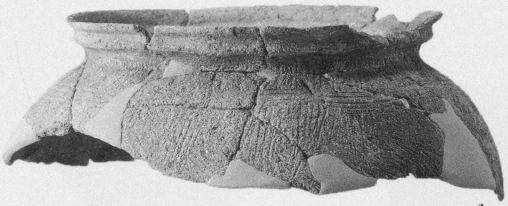

32


33

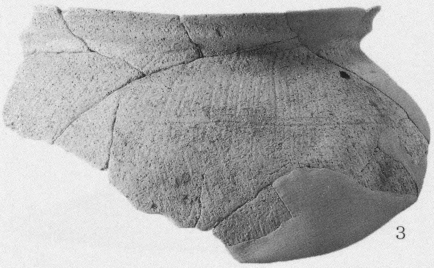
34


35

Ｈ－２号住居跡出土遺物


1

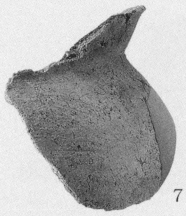
2


3

4

5

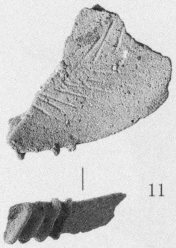
6


7

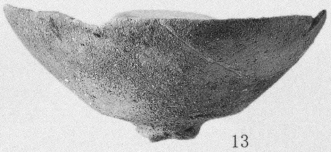
8

9

10


11

12


13

14

15

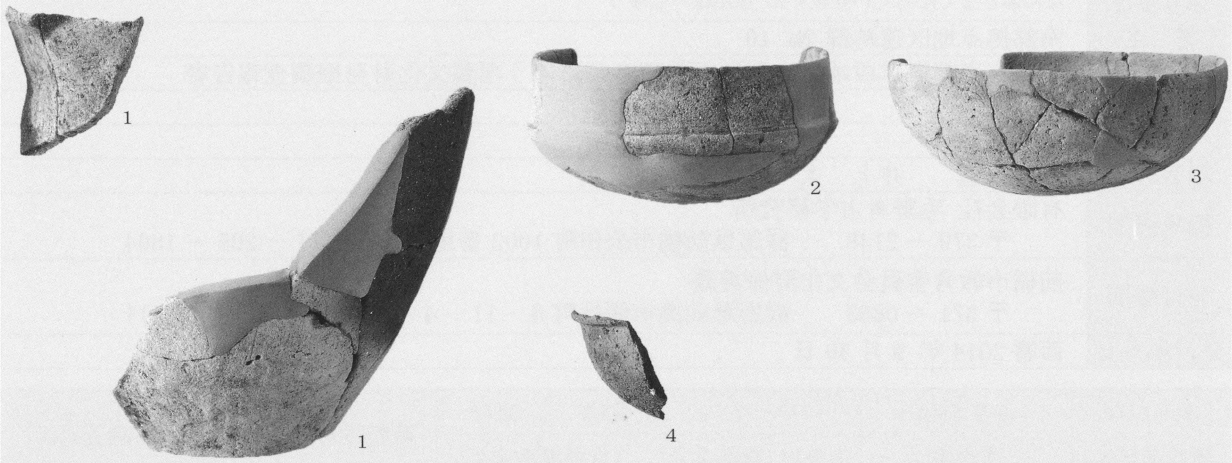
16

17

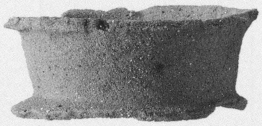
18

19

H-3号住居跡出土遺物



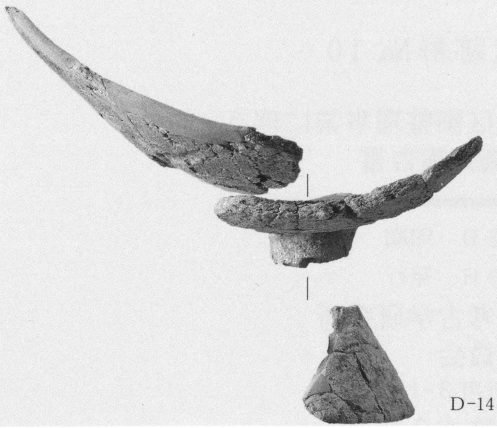
土坑出土遺物



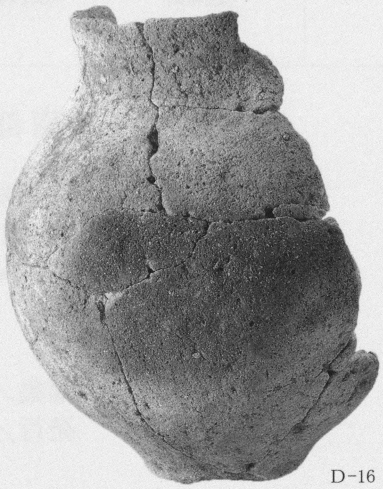
D-6 2

D-6 3

D-6 1



D-14 1



D-16 1

抄　録

ふりがな	なんぶきょてんちくいせきぐん なんばーじゅう
書　名	南部拠点地区遺跡群 No. 10
副書名	前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	
編著者名	藤坂和延　　井上　太
編集機関	有限会社 毛野考古学研究所 〒379－2146　　群馬県前橋市公田町1002番地1　TEL 027－265－1804
発行機関	前橋市教育委員会文化財保護課 〒371－0853　　群馬県前橋市総社町3－11－4　TEL 027－280－6511
発行年月日	西暦2014年 9月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	（世界測地系）				
なんぶきょてんちく 南部拠点地区 いせきぐん　なんばーじゅう 遺跡群 No. 10	ぐんまけんまえばしし 群馬県前橋市 つるこうじまち 鶴光路町 113-2, 113-3, 114-4, 117-2, 117-4, 117-5, 118-2, 119-2, 119-3, 120-2 かめさとまち 亀里町 960-3, 1002-3, 1003-2, 1003-3, 1006-2, 1007-7 にいぼりまち 新堀町 6-2, 77-2	10201	00785 (25G84)	36° 19′ 58″	139° 5′ 32″	20140310 ～ 20140524	9,850 ㎡	土地区画 整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南部拠点地区 遺跡群 No. 10	生産跡	平安時代末	Ａｓ－Ｂ層下水田跡・溝跡	中・近世の陶磁器片	平安時代末期の条里型水田を検出。
	集落跡	古墳時代前期	住居跡	土師器	外周溝を持つ住居跡を２軒検出。

南部拠点地区遺跡群No. 10

前橋市南部拠点西地区土地区画整理事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成26年9月25日　印刷
平成26年9月30日　発行
編集／有限会社毛野考古学研究所
発行／前橋市教育委員会
群馬県前橋市総社町3-11-4
印刷／朝日印刷工業株式会社